大正五年九月刊行

(非賣品)

出版 船 協會會 報

第拾九號

評評評評評評評 評 評 監 監 理 理 理 會 議議議議議議議 員員員員員員員事事事(主 主 報主 事)

協

造

役

員

生入島山須橫藤斯末堤今進井若福近寺赤 本田田島 波 廣 岡 口宮田 藤野松 島代 思正純經馬剛利成範三恭一在貞之基精則 莊 敏 三 準 郎 藏信年平郎二義郎太屋夫助樹一良

信 委

通

員

地 方 委 員

長長大大神浦函舞長佐吳神大橫橫 崎崎阪阪戸賀館鶴崎保 戸阪賀濱 男餌

山德松熊鶴 柴小缺江岩新田福田小 曾山田 断格住中地原野我本喜林 李文 口大田田 倉傳 寺 一尚九泰一得俊清武 泉則清次 吉麼一達郎 郎晉郎一郎董郎三夫 雄藏訂

造 船 協 會 會 報 第拾九號

大正五年九月刊行

▲第四回三好獎學資金懸賞當選論文

On the Stal turbine

ヘルマー、ヘッドバーグ君

An analysis of model screw propeller experiments

正員工學士

元

良

信

太

郎君 花屋ヨリ

目 次

講 本 臨時講演會及博覽會參觀 會 記 演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

正員 正員 海軍機關中佐 I 學 + 浦 岩 野 田 直 周 六君 英君

准員工 學 + 橋 口 保 孝君

Some hints regarding deflection of ships due to

正員 工學博士 末 廣 恭 二君 temperature difference.

准員 工學 井 口 常 雄君

Yokota's "General expression for stress com-

On

Dr.

ponents in two-dimentional problems of elasticity

正員 工學博士 末 廣 恭 二君

▲寄

稿

會報第十八號を手にして……

同 員

柴

田

齡

二君

म्म.

前號會報講演目次

噸數測度法ニ就テ

螺旋軸折損の源因ニ就テ 正員工學 協同員 士 柴 Щ 田 本

幸

男君

敏

Ŧ

代君

造船船渠ニ就テ

正員 工學博士 Щ 田 佐 **人君**

Stress-Distribution in a Plate with an Elliptic Hole 正員 工學博士 横

田

成

年君

The Question of Longitudinal Bulkhead in View of

.....

岩見ヨリ

Actual Experience in the Present War

伊藤式船舶操縱裝置

正員 工學博士 正員 工學博士 **ユフ、ビ** 伊 東 1 久 1 米 藏君 ス君

▲前號會報號外目次

救命艇ニ就テ

正員 工 學 士 春 H 信 市君

一個なる場合がある

H

-

11

行

造

會 記 事

臨 時 講 演 會及 博 · 覽會 多 觀

大正五 DU 年 09 九 日上 月 九 日 野 不 及 忍池 + 日 畔 兩 海 日 事 = 於 水產博覽會 テ 海 事 水 々場二 產 博覽 命參 參 集 朝 セ 幷 本 = 本 會 會 員 春 約 期 百 講 名 演 會 7 テ、 開 催 午前 ス 其 + 時 概 況 左 會場各 如 シの 部 參

in

4

2

E

IJ

7

觀

3 IE. 午 同 會 場 內 於 ラ水産料理試食會ヲ開 +, 午 後三 時 餘與館 ラ觀 覽 1 終 テ階 時退

月

當 同 博覽會 於テ 本 會々員 ノ為 入場 参ラ寄い 贈 特 别 便 宜 與

* =

3/

7

ラ

V

ス

散

スの

同 H 午 後六時 3 1) 築地 精養軒 = 於 テ晩餐會ヲ開 1 出 席 者左 如 3/

腹 石 黑 五. 十二 君 今 岡 純 郎 君 飯 田 熊 吉 君 伊 藤 由 君 磯 田

傳

七

君

Ŀ 卷 Æ. Ŧi. 邦 彦君. Ĺß 義 君 君 藤 高 東 海 島 橋 範 新 勇 平 藏 八 君 君 君 小 武 渡 長井 邊 村 耕 行 太郎 太郎 潔 君 君 君 近 田 加 茂 藤 中 弦 楳 正 吉君 彌 雄 君 君 去 武 加 田 野 甲 藤 子 精 太郎 良君

來 賓

寺

井

忍

君

Ξ

好

光三

郎

君

斯

波

忠

郞

君

君

君

堤

河

岩 野 直 英君 橐 谷 年 實 君 浦 田

君 萬 朝 報 社 H 日 新 周 聞 六 社 君

藤

H

經

孝

君

Ξ

輪

修

=

君

國

民

新

聞

社:

月十 日午後五 時 3 IJ 築地 府立工藝學校講堂ニ 於テ講演會ヲ 開 催 3 左ノ 講演ア 90

本 記 事 臨時講演會及博覽會參觀

四

末

廣

恭

四

On Dr. Yokota's "General expression for stress components

准

員

軍艦淺間 ノ離礁並ニ應急修理工事ニ

就テ

ÌE. 員 I 學 士

Œ 員 海軍機關中佐 浦

岩 野

英君

直

田 周 六君

土 橋 口 保 孝君

Æ

員

I.

學

舶用汽罐 ニ於ケル石炭重油 ノ混焼法ニ就テ

Œ. 員 I 學:

士

Ξ 橋

篤

敬君

Some hints regarding deflection of ships due to temperature difference

=

īE. 員 工 學 博 士

工 學 士 井

末

廣 恭

二君

口 常 雄君

in

two-dimensional problems of elasticity" JE.

I 學 博 1: 末 廣

恭 二君

右ノ内、三橋氏ハ支障アリ當日 缺 席 付同氏ノ論文ハ更ニ十分討論 ブ上 一掲載 ス IV = ŀ ŀ セ 70

JE. 員 I 學 1: 海 軍 造 船

大

監

野

海 軍 機 關 1 佐

JE.

員

正員

I

學

士

海

軍

造

船大技士

橋

口

五

頁

防

水

水運轉

有

第三

軍

水計淺回運

ト實際に

作業序

浦

田

周

保 直 孝 六 英

現 坐 軍 狀調 礁 艦 編 後 淺 H 查 浸 間 前 水 1 坐 1 次 狀 礁

沉

計劃

防排 稀 が有ノ長濤が大装置工事 事

離排 後 部重 礁水 試驗 方 量 案 物 卸 3 方

救 離 體 修

撤去施

至法 iv 迄

1 理

= 方

排 水

狀

況

救難 百二

据

十二節

番ノ修理竣工

九

ア竣工

修理方針

船體

固 假

有

使用 略

損所概略

假泻肠

回 口 防 防 防

水運轉準備工

I 事

演

軍艦淺間ノ離礁重應急修理工事ニ就テ

=

軍艦淺間橫須賀軍港回航

內外工事竣工機關修理竣工 室 ノ修理竣工

演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

室排水裝置

今後 試運轉ノ成績ニ付所見 港外試運轉 ノ方針

大試運轉 サンバルトロメノ名殘

機關室下當金取外 機械室下破孔真相

ニューマチックドリル

某島着淺間檢査(右舷主機クランクピン切斷

某島マデ

防水作業

クラン ク」應急修理竣工

横須賀歸

出發

作部ノ勤務狀況

第二編 章 後

ノ損害概略 機關修理

機關

工事成績 工事竣工 艦底修理追補改良方案

」ノ使用

第一 回試運轉中ノ狀況

回試運轉後開放檢查狀況

豫定港ニ於ラ本邦回 航

右舷第二低壓曲肱栓切斷 肱栓切斷)

前

來

歷概要

曲 曲肱栓切斷面 版栓切斷ノ原因 狀態

曲

肱栓應急修理

出發橫須賀回 航

横須賀發吳着

罐部 機械部ノ損

排水及汚水排除裝置工事 機關 機關部修 運轉能否決定 理方針

竣工豫定期日

修理工事ノ概要 回主機械試運轉次第書

回試運轉ノ狀況

回試運轉ノ成績

回試運轉後ノ機關部修理 方進

回主機械運轉次第書 回試運轉後ノ修理工事 槪

本邦ニ向ケ出發後東洋 港外試運轉成績 中島迄 前ニ行クベキ機關部 (右舷第一 工事

一底壓

曲

右舷主機械第二低壓曲

肱栓應急

修 理圖

救 **数**期筒, 喞 筒 大體 要目

罐 救 が 難 喞 筒 に 大體 要 目 用 罐 備

蒸發力ト 喞 筒 蒸汽消費 額

汽 發 電 働 喞 筒 = 改

間 据 附 ケ 事 = 决 定 セ w 罐 及 喞 筒

主

淺

發電機及電 + 機及電 喞 n 管類準 筒 ヲ電 動 動 機大體 備 働 機 進 備 要 目 造

編 前 編

第

大正四 7 南八十六度西四「ケーブル」ノ所ニ 年 月三十 日午後二時三分軍 艦 於テ 淺 間 坐礁 3 丰 ス V 艦體 = 或 南 北 カ 四 IJ + フ 才 度東ヲ・ IV = P 间 半 島 ツ テ擱 サ > 坐 210 n 1 U × 灣 工 2 1 ラ 2

ス

坐礁後浸水ノ狀況

T

後部 防禦甲板以下 水 之ヲ 表 2 適當 三示 = 排 舵柄室ア ス 水 防 如 V 水作 テ漏水防止 + = テ漏水ヲ見ザル處前 成 業ヲ N 績 1 + 3 -)-故 ス v 作 IJ = = 業ヲ 直 ŀ 接損 不可 施 3/ 能 所 部 少 ŀ ナ = 通ズ 1 v テ ハ ŀ 110 防禦甲 in 清 Æ 冰庫 浸 毛 1 水ヲ防禦甲板以下ニ喰止 板以下 3 勿論其 y 前 1 方 現 他 1 狀 水雷火藥庫黑色火藥庫及其 ŀ 雖 ヲ 維 モ 移 持 動 3 剛筒僅 又防禦甲 4 w 目的 カニ二臺ノ外人力ニテ之ヲ 板以上 ラ以テ日夜努力シ其結果 ハ既ニ浸 附近糧 食庫 水 2 A w 2 所 排 ラ

運 搬 据 附

喞筒 水喞 据 附 筒 及 給 タン

1

諸管裝置 吸入護謨 蛇

力量

喞筒 1 能 力

鋲打 空氣 壓 速 搾咖 力小 筒 使 7 IJ 用 3 事

= 用 E タ n 主 ナ N 材

玉

濵

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就

講

第七區(グ」右舷)下甲板(三罐「ケ)	機械室	小砲 彈藥庫及信管庫	後部發射管室	後部水雷火藥庫	前部水雷火藥庫	前部發射管室	第一罐室	第三罐室	第四罐室	第二罐室	場所(群クハ)
<u>m</u> -10	三一三五	=-110	=-0	11-0	111-0	1110	ニニース	ニー一八	二—1七	午後 一一 時 分	タル時刻
二—二七	1-111	ーーニセ	五七	五七	五七	_ -t	五 五	五.	<u>一</u> 四	明 三分	リ坐ノ礁時間
同 .	午二 前二 二 時	二月二日中ニ 満		認一メスト ストリン ストリ ストリ ストリ ストリ ストリ ストリ ストリ ストリ	同右	ト認ス の が水蓋閉鎖セ シモノニ	五一三〇	五一三〇	五一三〇	五十三〇分	シ滿時水
一一五七	一 一 五 七	四八一〇	同	11回-0	同右	二 四 以 上 0	三一二七	三一二七	三十二七	三十二七分	リ坐ノ礁時間
メ且ツ滿水ノ状態トナノ接目ヨリ浸水下甲板ヲ及ポシ主トシテ罐室室並ニ炭庫ニ浸水ノ結	性ラ得サルニ至ル を を を を を を を を を を を を を	浸水セシモノト認ム 下部艦底破損浸水ノ爲メ	を が が が が が が が が が が が が が	部ニモ遂ニ浸水	二後部隔壁ヨリ浸水下方艦底破損並ニ前離室	選索 () と () を (十四分火床ヲ浸シ自然消他ニ比シ浸水増加ノ度緩	右同	右同	ルニ至ル ルニシテ効果ナク遂ニ退 リニシテ効果ナク遂ニ退 リニシテ効果・ファッショルニ	記
レート 中 最 を 早 り 浸 水 ル 側 壁 ノ 緩 ス ル 側 壁 ノ の 緩 み り の り る り る り ろ り る り る り の り の り の り の り の り の り の り の	モリニ諸の は は は は は は は は は は は は は	下方ヨリ此部ニモ	止リニ過ぎが水 地が が水 が水 が水 が が が が が が が が が が が が が	室浸水ノ爲メニ此	湖水ノ結果下方並	ナルテリテルテルテルテルテルテルテルテルテルテルテルテルテルテルテルテルテルテル	スシ ルテ ニ午 至後			去スルセシモ小勢 ルノ止ヲ得労 カシモホ勢	事.

掌水雷科要具庫	掌砲科要具庫	同 第 一 區	同第三區	同第二區	同第七區	同第五區	彈藥通路第四區	彈藥通路第六區	第六區(ドルーム)	第八區(ア」を舷)
七-1110	七一三0	七-10	セーロ	セー〇	* -=0	六一三〇	六一三〇	六—〇_	* * * * 0	四一二〇
五一二七	五 二七	五 <u> </u> - 七	.四一五七	四一五七	四一二七	四一二七	四 二 七	三一五七	三一五七	二二七
同右	日不 午 将ナレドモ三	午二 前月 八四 時日	午後八時頃	午後八時頃	同右	同右	午前八時頃	時頃一日午前九	午後ト認ム	同 右
七二-0	七二一0	九 四 一	七八一〇	七八一〇	<u>211-0</u>	四二一〇	四:1-0	一九一〇	四八一〇	一一一五七
同右	シモノナランが彈薬庫	水七頃除リメ水壁區始庫 原日ニシー得ス電節が高メー 第一十八次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次	炭庫第五區等ノ浸水セシタメ其部ヲモ浸	ノ重 ネ目等ヨリ浸水ス ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	一次のでは、	第六區ノモノニ同ジ	展車 - 接スル壁ノ螺釘孔、鐵飯ノ合セ目等 原サ閉ズ - 環域とはサゴテ螺孔へ木栓ニテ 原サ閉ズ - 環域とはサゴテ螺孔へ木栓ニテ 原サ閉ズ - 環鎖の - 環境の - 電機の - 環境の - 電機の - 環境の - 電域の - 環境の - 電域の - 環境の - 電域の - 環境の	局メニ隆起ス イ水歴 並ニウネリ毎ニ鑑體ニノ水歴 並ニウネリ毎ニ鑑體ニウネリ毎ニ 概	ギ得ズ防水犀ヶ閉鎖スドヨリ浸水木栓填障等ニテ防半シモ 壁並ニ床上ノ飯ノ重ネ目電線諸銲賞罐室ニ滿水セシタメ此等ノ區畫ニ技	メ且ツ湖水ノ狀態トナレリ ナ及ボシ主トシテ镰室ニ接スル側壁ノ鋼 ・ 一般・ 一般・ 一般・ 一般・ 一般・ 一般・ 一般・ 一般・ 一般・ 一般

t

演
軍艦淺間ノ離礁並應急修理
理工事ニ
就

第一二區	同第十一區	通彈路藥	第九區(ドルーム」)	主砲彈 火 藥 庫	後部副砲火藥庫	後部副砲彈庫	小銃彈藥庫	同第九區	樂橫通路第八區	掌帆科要具庫	船匠科要具庫	戰時無線電信室	下部發介所
六一〇	六一〇	六-0	四	ラ彈量彈薬 死 東 ア ア ア ア 日 出 エ シ と に の の に 。 に の に 。 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 。 に 。 に 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	早二期月ナーラリン	早期ナラン	ナラン 一日午後十時頃 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	10-0	10-0	八-0	ハー0	七一三〇	七一三〇
一 五 五 七	一五一五七	五一五五五五	三二五七	五二三	五上	五二三	七一五七	七一五七	七一五七	五一五七	五一五七	五一二七	五一二七
午二 前月 八三 時日	午二後月八二時日	午二後六二時日	未タ湖水セス	同	中屋へ三日午前	午三 前日 中	午前七時頃	午前八時頃	午前八時頃	同	同右	同右	同右
七八-0	五四一〇	五二一〇	19	同	七四二八一〇	七二-0	ーセーの	四二-0	- 八-0	七二-0	セニー〇	七二一〇	七二-0
支柱す置キ壁鈑ノ合や目ハーコーキング」ハニ従事シ木栓ニテ諸孔チ塞ギ防水蓋ニハルニ日午前防禦甲板ノ防水蓋ヲ開キ敵夜排コリ電纜諸桿等ノ通過部ノ間隙並ニ防水蓋=リ電纜諸桿等ノ通過部ノ間隙並ニ防水蓋・以下、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一	同右	思考ストラリ此ノ區割ニ及ボセルモノトア通過部等ヨリ此ノ區割ニ及ボセルモノト	サ保チッツアリ 電纜通過部等ヨリ漏水其ノ大部ハ水栓「コ 電源の過部等ヨリ漏水其ノ大部ハ水栓「コ ででは、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、	0	0		等ヨリ此ノ部ニモ浸水セシモノト認ム 彈薬通路ニ滿水セシヲ以テ其桿管ノ通過部	同 右	機械室浸水ノ爲メ此部ニ及ブ	同右	学砲科要具庫ニ同ツ	職室トノ隔壁ニアル弇桿ノ通路部ヨリ浸水	同右

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就ラ

=

現

狀

調

查

= 出

來 關東橫須賀出發 IV 限 リ現狀調査ヲ 先チ工作部ハ技手工手各一 ナ サ V × V ガ尚ホ 關 東到着後モ 並二職工若干ヲ先發ノ軍艦 調査ヲ行ヒ 久 ル結果左 ノ如 = 便乘 20 セ 3 メ先着ノ上關東到着前

炭庫	艦	前部副砲彈庫	前部副砲火藥庫	前部主砲彈藥庫	部掌水雷科倉庫	電氣 要 具 庫 後部 掌 心科要 具庫科 軍 本 工 車 入 口	
		セルイション リコモリン トル海ア リコルト リコー リカル リニー リカル リニー リカル リニー リカル リニー リカル リカル リカル リカル リカル リカル リカル リカル リカル リカル		ニ浸ラ庫前不明 搬水ンプ同日ナン 出見見サンスで は見り リサハ午ランド ルスナ理午	後部	午二 前月 六 一	
Annual Local Local Control of the Co		·一四 一五 七	一四一五七	一 四 二 五 七	水中發射管室二同	一 五 五 七	
And the state of t		司右	同右	午前中 中期上層ハ二月 三日 日	シ	年前 三月 三日 八一〇	
		同 右	同右	四 八 一 〇		七八—	
庫ノ外全部滿水ト認ム	大番底ョリ二十八番底迄の擱坐ト同時ニ浸水・大番底ョリ二十八番底をシモノ を	同 右	同右	此部ノ艦底へ吸損セサレトモ後方破損セシル部ノ艦底コリノ浸水ノ横壓ノタメ隔近ノ角整 1000000000000000000000000000000000000	別ニ作業ヲ爲サズ	別ニ作業ヲ爲サズ	彈丸搬出ノ上防水蓋ヲ閉鎖ス

九

演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事

0

持石ニ 右 丰 檢 セ 面)淺間 ŀ 約 114 E ス y つウ 船 n 干 寄 擱 = 2 體 艦底 テ餘 ネ 坐 セ 八 y 中 百 來 1 狀 殆ン リ堅 IV 央 四 能ヲ ヲ 3 + 常 テ船體動搖 1 y カラズ艦底 全面 開 平 附 ŀ スの 方 Ł 近 テニッニ = 呎 岩 亘リ ナ ス ノ岩ニ IJ 其 n 凹ヲ生ズ岩ヲ掘リ開 形 爲メ岩ヲ掘レハ穴 切 狀 他 當リ 斷サレ 3 IJ 居ル 膰 推察スルニ艦 ンヲ恐 垂 處 3 ウ 21 艦 n ネ ノ中 ハ自然ニ崩壊シ 丰 n y 底ノ岩 テ ŧ 觸着部 其豫防 央部及ビ後方ニ於テハ六個 , 爲メ前後 八最大干沙面下約二十 = ŀ 於ケ 3 テ塞 テ 左右 in ガリ作業不 破 如 損 何 = 動搖 ŀ 狀 毛 サレ 況 V ノ大ナ 可 7 難シ岩ニ 能 檢 呎 ツ ノ治 + セ " y 1 7 IV 當リ ッ 岩 1 ナ ウ 欲 ネリー 居ラザ 旦荒 乘 ~ ス in ŋ E 其 天 岩質 質 後 所ヲ 遭 遇 接

七 船 丰 干 附近 沈 呎 九时 吃 七呎 ヲ 水 1 -後 水 = 部二十 IJ ス 深 1 四 Æ 足 ヲ 月 1 ラ 精 中 ナ ス JI. 測 呎八时 或日 リー 坐 ス 確吃 ルニ 前 月 部三 水 七 ナ 前 リ左右 H 後 ハ三月十 一十五 1. 調 ~ 充 ٠, ジ傾斜 呎後部二十 分 Ŧ H 沙 調 深 サア 1 ベノ干沙ニ 一ラ前部 右舷ニー 八呎ノ事 リ右 方 度半ナリ + テ前部三 = Æ = 21 呎 7 大 五时後. IJ + 于二 但 是 IV 岩礁ア 3 3 呎 浪 部 ŋ 見 一十 爲 叶 y v メ精測 後部 左方 四 11 呎 前 部 二十二呎 八不可 时 稍 ٠٠ 沙 滿沙 4 ノチ 深 能 九 = 牛 テ ナ 滿 时 E 90 滿汐 前 = 諸 從 部 所 + 突岩 テ 六呎 呎二 前 部 时 IJ

浮

テ

三)氣候温 高 和 四 = シテ常ニ 五 呎 位 ア 晴 りつ 天ナ V Ŧ 「ウネリ」 アリ淺間ノ位置 1 磯 ノ上ナ ルヲ以テ特ニ 然リ平 1 時 E ウ 1.

Ŧ. 四 曲 泥 現 3) 土 海 ラスロ 狀 7 水 官 生 濁 厠 清 テ 100 w 淨 F. 士官次室、 アリ 船體 部 如 ナ 1) 17 肋 隅ガ引 屈 甚 艦 底二 九十六番ニ當ル 曲 1ª 食器室、 變 3/ 形 カラ 於 キ裂 テ 程 力 ズ ハ岩粉碎 機關長室、 度 潜 n 水工 1 機關倉庫入口ノ上部 傾 測 向 IJ ヲ 3 難 テ土砂ト 困 主計長室、 爲メ塗具龜裂 ラス 丰 モ其徴候ト モ ナリ ノハ 第四分隊長室、 つウ 寧 1 セ V D 隅ニテ鋼鈑 テ見 ネリー n つウ 3 ルベ 木 y 肋 " = 百二十 動 牛 第三分隊長室、 亂 ガ モノト = 鋲 3 セ テ體 ラレ 番 浴 中 甲板 フテ裂ケ テ多少ノ ヲ 當 攫 n 第二分隊長室、 ٧٠, 通 於テ V タル 路隔 濁 折 二士 4 1) r 壁 作 7 リ同 一官室、 兩 舷 所 第一 危 共 士官食器 ザ 險 當 分隊 Ŀ iv IJ 掌 ガ 長 モ

結

果

£ 口 裂 砲 ウ ケ F. 隅 y 科 ケ ラ 部 汉 防 ガ 禦甲 IV 具 庫 隅 7 兩 ケ 連 ŋ 側 ガ 汉 板 入 裂 百 並 w 口 v ラ 7 於テ 前 ケ 左右 + 左 後 IJ 京 肋 3 w 下 番 肋 y 7 部 九 六时 百三十 引 IJ + = 當 隅 + 最 Ŧi. 下 番 位 E in 横隔壁(ゲラ 甲 呼 於 = 九 當 吸 板 番 テ v モ ス w 横隔 居 當 N 至 同 兩舷共)ガ甚ダ iv n 樣 如 V 左舷通 壁(兩 結 7 110 裂目 動 果 前 搖 ナ 罐 舷共 ア 3/ y 煙 路 " 突 隔 IJ h 甚 V 壁 肋 ス r 外 Thi 7 ガ艦 九十 3/ 屈 テ 筒 7 諸 屈 首 Ŧî. 曲 下 所 番 曲 セ 向 = 部 七 N 當 常 7 ガ 12 " テ上 屈 IJ ナ 7 IV ラ IJ 肋 曲 左 七十 部 +)* 舷 百〇 せ w iv 左 通 軌 7 儿 1 番 隅 n 1) 番 路 此等 音 並 隔 當 當 アリ 壁 下 w w 又機 機關 皆 機 E 部 船 關 右 部 關 科 科 ガ 倉庫 隅 中 室 倉庫入口 曲 1 央 y 縱 於 テ 左舷入 隔 4 IJ 鋼 押 E 部 in

云 觸岩部 翼及舵 用 室 迄 ズ 破 7 叶 罐 罐 孔 底 ŀ 重 7 體 サ 前 ノ下 云 面 ŋ ズ 7 IJ 底 ガ 隔 テー 潜 つウ 後 端 後 , 罐 如 部 壁 水 = ハネリ」 室入口 體 火藥 損 何 3 工 肋 浸 所 = ナ 隆 庫 調 水 7 百 n 毎ニ y 起 破 下 查 ス 3 都 現在三十 + 肋 IJ r 孔 3 一天井ニ 合浸 肋 Ti. IJ 百四 得 7 百二十 後 n 番 及 罐室 水 著 + iv P 近ヅキ 七番 破 知 九 2 ノ全容量ハ 五番 番 損 17 = w 突 最 ~ E 3 ŋ 叉 = + IJ 前 Æ 力 降下 大ニ 罐室 肋 ١, ラ 肋 上ゲラ 百七十 遠 ズ 百六十 Ш 左舷 五. サ ス 3/ n テ 力 v 1 四三、六噸 九番 隆 ŋ = 足 九 部 1 アス 罐 起二 番 罐 " 體 下 迄 ` 室 = 呎 通 1 7 in -耳 = 防禦甲 當ツ ナ 漏 y n 路 ŀ 1 10 水多 龍骨變形 = 稱 扉 氣 ラ外板「ラップ」切い 足 曲 ス 後 板 味 IJ w + 以下 悪 固 程 罐左舷罐 21 想像 着 シラ w 破 2 全 3 居リ 九十 部 孔 = ツ 浸 7 前 難 ブ テ 九番 水 モ = 力 離 通行 發 破 5 ス 長 肋 1 見 孔 ズ V サニナ 破 次 居 不 七 7 十三 損之 IJ 可 IJ = w 長 又 能 內 E 番 防 Ē. = サ 底 1 7 一呎六时 + 次 y 7 3 水 損所 IJ ガ 扉 七 1) Ifi 三十 損 推 呎 廣 力 四 進 大 巾 各 七 器 2 其 时 ナ 时 巾 n

七)坐礁 現 位 置 = 止 際 3 ~ 9 テ 種 , 先ヅ 4 = 肋二十三 動 搖 3 ツ 一番附 1 遂 近 擱 1 龍骨 44 セ ガ岩 12 毛 1 = 當 1 認 IJ 船 4 艦 體 底 進 > デ 面 大 Ш -)-3 W 岩ヲ 及 前 擦 部 懸垂 1) 其 部 1 尖 1 頭 破 孔 7 削 IE. 落 此 テ 作 用

= 於 ケ w 隆 起 渡 圓 域 軍艦淺間 廣 + ノ離礁並應急修理工事ニ就 = ŀ 並 罐 室 內 底 割 目 長 + = 1. 1 頂 丰 廣 押 V 上 ゲ ラ V 居

iv

徵

候

軍艦淺間

礁並應急修理工事二

九 æ 艦 底 飯 Ш 破 V 3 1 顯 n 所 1 ヲ V 多 居 ク見 IV 所ヲ ザ 總 iv ラ調 鋼 查 性 ス 質 IV 佳良 = 鋲 + 切 V n 7 ラ外 證 ス 板 繼 目 離 v 叉 ハ緩 3 ヲ 生 2 汉 w モ 之ア ッ然 10

+ 孔 ア 按 n 1) ズ = n 1. 見 毛 = ザ ア 9 w 底 破 7 然 得 v V 1, A モ N 淺間 處必 ズ ハニケ V モ 月 其 餘 内 = 底 旦リ 迄破 波 V = 居ラズ又内底破 搖ラレテ礁上 = v 坐セ 居リ テ其 IV モ 1 外 + 底 V 110 1 只凹 觸岩 部 3 面 1 = 1 = 幾多ノ テ 破

大破

居

位 7 一时二分 以 置 及 テ 44 重 重 礁 量物 サ 前 3 ノ吃 排 IJ 約 計算 九百二 水量 水 ス 子三 テ 萬 n 浮揚 = 百三十 今 噸 ス > ヲ 輕 ~ 浸 噸二 水ヲ 減 + Æ 3/ 1 = 全 3/ X テ約二十五 部 w 相當 排 7 以テ 除 スの ス n 目 呎二 1 下 セ 艦 时 18 艦 重 量 水平吃水ナ 重 1 九千三 量 20 前 部二十 一百七 リシ ŀ 噸 云 ナ 呎八叶 in フ 坐 ~ 礁 2 八分 後關東 重 量 物 Ł 7 到 後部 取 着 IJ 除 二十 丰 Ti. 汉 手 w

十二)淺間 潮 ŀ 华 ス 知 礁 w 時 iv = 重 五〇 前 ~ 量 1 部 約 3/ 27 順六ナリ之ニ對シーデ 满 Imi 如 1 岩 五 テ 潮 何 潮 = ノ時約三、三九三噸六干 ナ ○○噸乃至二、○○○噸 最 IV モ 干 重 多 滿 サ ヲ岩礁 二依 7 壓力ヲ受ケ 以艦首 スプ 載 V セ 居ル 呎三 1 居 潮 + ス w ノ時 时 毛 1] X 力 1 位 相 1 ヲ 約六、 當 + 浮 ŀ 概 y . 沈 算 、七六二 繋 ス ス 1 維方 IV 滿 w 7 = 潮 以テ 一噸六 法 船 時 滿 依 ナ 重 ŋ 溯 IJ 四 量 危險 「ウネリ 九、三〇七噸 四 時 五七 後 1 部 防 噸干 7 一高 岩 得 潮 浸 サ六、七呎 = n 水 最 Æ 時 船 モ 量八、 一一、〇八八噸 大 底 -)-時 n 損 Ŧi. 壓力 华 傷 四 礁 ヲ受ケテ干 頗 厭 カラ 噸 ナリ n 大 故 7

IJ

動

礁 計 畫 0 進 備

離

斷 排 行 水 急响 3 3/ テ可 得 ~ 筒 + 牛 据 IJ ヤ 付 故 ヲ ヲ 調 ナ = 先 查 3/ " 排 セ T 水試 > 噸 1 驗 ス セ 丽 1 3 依 テ リ漏 1 ル 幸 = 水ヲ 二臺七百 破 孔 觀 小 察 = 3 以テ Ŧi. V + テ 噸 此 破 1 孔 喞 セ 筒 有 2 カヲ 無 1 ルレ 所 以 在 四 テ 並 「臺及四 漏 大 水 = 小 百噸 打 7 勝 推 " 測 ワ 如 3 1 2 H. 3 210 " 其 如 2 儘 b 何 1 7 テ w 屯 程 臺 浮揚 度 ヲ 7

罐

デ

區

=

Thi

テ

水

用

1

3

テ 1

何

V

Æ

防

禦

甲

板

=

据

付

ケ

倘

亦

八

+

噸

ッパ

n

ット

臺ヲ

前

部

浸

水區

=

八十

・
順
パ

N

ツニー臺ョ

後部 水區

浸

水

力

Æ

1

7

上甲

板

=

据

付

5

出

來

得

w

限

IJ

艦

底

防

水ヲ

爲

3

A

n

E

メン

1.

スの

室

機

械

室

排

水

用

1

3

,百噸

セ

2

ŀ

· ~ _ _

臺ヲ

前

部浸水區

排

水用

1 *≥*

十五

噸

油

機喞筒二臺ヲ後部浸

ノ排

有 0 長 濤

左舷 7 n 益 74 = 月二 4 = 不 IJ 約 船 良 Ti. H 7 + 度 4 ラ 廻 刻 前 3 方 1) 3 13 IJ = x 波高 傾 汉 y 斜 艦 w セ モ 1 シ長濤高 損 2 1 メ離 ナ 害 IJ 增 然 ガナ三 礁 加 セ 3 V 得 1. IV 事 174 w E 此災害 呎 ナ 想 ラ 像 翌 2 朝 = 迄 ŀ 21 難 寧 思 力 坐 フ D ラ - 礁位置 = 我 ズ 此 1 意 ・ヲ得 ヺ 1 得 時 並 タレ 最前 B = IV 觸岩ノ模様 11 æ 方 ノア ナ ノ觸岩ガ y ŋ 變更 1 艦 ス 何 V 底 機械 1 ヲ 離 7 V 室 V 11 夕 後 部ヲ 此 N 岩 中心 艦 ガ + 7 ナ 垂 ŋ 狀 船

水 装 置 I 事

炭庫 3 給 IJ 撤 水 ッ」二豪及二十 四 多 セ 並 月 3 數 デ 1 = Ŀ. 雜 , ŀ H 喞 ス 甲 用 3 筒 排 板 IJ 左舷 當 喞 水裝置工事 給汽 ラ其 五 筒 側 噸 並 油 ス 代 一 n 喞 機 爲 四 IJ 筒 月十 一臺ヲ 運轉用 ŀ ッ メ管装置 チン 2 テチ 備 九 グレ 日 罐 ^ 竣工 = 噸 汉 据 1 7 電 w 付 最 假 工事 モ ス 働 罐 給 喞 モ 意ヲ 其他 水 ハ 七 筒試運轉ノ I フタ 2 用 場 ŀ 必 n 2 要 E 3 2 × y ナ " 取リ 際力量不足ナ 7 in 据付 ŀ 事 集 業 V 水容量 ケ = × 着手 モ タリ又防禦甲 1 ルヲ發見シ = 約 ス 三百十五 後 3 テ蒸氣壓力不同 部 浸 板 水 噸ヲ以テ喞 上 タルヲ以テ二十五噸 區 ノ五、六、七、 對 2 + テ in 筒 最 = 運轉用 、八番 拘 初 ハラズ 八十 罐 1 油 六個 四 機 噸 各 個 臺 1

防 水 I 事

フ 前 罐 室 舷 下 長キ外板 破 孔 い鋼鈑ヲ以テ完全防水工 事ヲ行 ラ又其 ノ他 1 既知 ルノ外板 破孔 應急防 以水ヲ行

(二)外板 緩 = 1 14 來得 n 限 y 獸 脂 目 塗又 絲 屑填 隙

演

軍艦淺間

9

)中 押 板 = 在 w 砲 門 其 他 舷 側 防 水 7 行 フ

淺間

ノ離礁並應急修理

1

1 3 2 高 ス 但

H. 四 浸 浮 水區 揚 後觸岩部 開 口 ス w 3 中甲 y 表 板 1 n ハ n " 破 チーハーコ 孔 ヲ 咄 嗟 間 = グ」ヲ 防 水 ス 呎 n 目 的 7 7 以 ラ 2 大形 蓋 7 用 1 帆 意 布 ス 防

水

席

進

備

後 部 重 量 物 卸 L 方

楯 及 7 揚 ゲ 架共)後 タ w 1 部 + È 1 砲二 之ヲ 前 一門(天蓋砲案共 方ニ 引 出 ス 1 後 計 部 畫 -**砲**彈 iv 7 以 彈 九 テ ヲ 後 卸 部 1 ス 重 量 輕 減 ス N A メ五 番 乃 至 74 番

ヲ

副

砲

水 試 驗

排

目 的 水 7 2 以 プ テ四 1 效力 月二 于二 术 H 2 プレ 排 水 配 試 驗 置 ヲ 1 適 行 否 7 其 並 = 成 漏 績 水 筒 左. 所 及 如 破 シ 孔 1 大小 7 檢 2 如 何 ナ n 程度迄 排 水 3 得 w 7 ヲ 試 L w

前 部 浸 水 區 21 確 實 = 排 水 ス w = 1 7 得

後 部 浸 水 區 1 漏 水 ヲ 防 11 3/ 得 サ IV モ 充 分排 水 目 的 7 蓬

ス

in

=

ŀ

7

得。

मि 但 -2 F IJ 噸 ŀ 思 電 E 働 3/ 喞 ガ實 筒 1 際 吸 入管二 20 不 便 本 -1) 7 9 且 テ " 長 各 吸 17 導 入先 ク護謨 高 蛇管 サ 7 異 1 屈 = 曲 ス ---= 無 方 理 ガ 7 水 生 ヲ 出 ジ不工合多シ デ 汉 w 1 丰 直 1 立 其 1 1 毛 口 1 7 閉 本 弇 ス 改

iv 7 要 ス

後 罐 室 最 毛 多 量 1 漏 水 T IJ テ 减 水 思 13 力 ラ ザ 1) 3 E 時 华 1 間 約 七 呎 減 水 7 + 1

りつ

74 前 罐 室 屯 右 百 斷

Ŧi. 機 械 室 21 右 = 比 3 幾分 多力 減 水 3 及 IJ 0

)總區 箘 排 所 1 水 小 7 行 漏 水 E ヲ 潜 感 水 I 30 外 7 外 底 = 底 並 於 テ = 各 ケ 浸 所 水 1 區 小 1 吸込 底 -7 潜 發見 × テ 2 漏 17 水 .12 搜 索ヲ 1 = ナ サ 3/ * X n = 左舷 前 罐 室 內 於 テ

但

3/

大體

1

水

流

30

後

罐

室

3

1)

始

IJ

前

後

=

流

12

n

傾

向

7

ij

mi

テ

肋

百

十五

番

隔壁

y

機

械

室

向

テ

流

v

出

n

=

內

底

79

#

水

試

驗

成

績

鑑

3

左

1

如

17

離

礁方案ヲ

定

2

1

四

B

ズ

汉

+

3/

1

セ

ズ

吸込 量ヲ 量 更 7 働 感 キ 增 -60 及 水 加 -1)-1) ス n 1 ~ ス 全 運 丰 V E 17 轉 10 漏 時 漏 1 -7-水 水 間 1) 箇 量 然 所 時 ハー 四 共尚 廣大 + 時 Ŧi. 間 分ニ 約五 示 進 3/ 千八十 テ 3/ 2 且. テ温 デ 幾 " 諸所 內減 分 E 噸 = デ 1 水量七百五 多 モ ナ 防 7 iv 水ヲ 存 此 大 在 行 量 + ス IV 九 10 漏 噸 E 所有 1 水 7 IJ + 7 喞 in w 排 ヲ = 筒 水力 證 拘 ガ 1 1 水 ラ 時 漏 頭 ズ 間 著 水 增 五 千 加 3 ·四百噸 打 ス + 勝 n 呼 チ 丰 得 從 出 推 3 漏 叉 定

見

水

八)初 x ラ 爲 七 w 排: 水 作 業 + 12 7 以 テ 喞 筒 運 轉信 號 誤 錯 測 不熟練等 試 驗 1 精 密 ヲ 缺 ギ 17 jv 所 + 7 保

礁 方 案

離

設 テ 7 海 = 又 十八呎以內 傳 F 1 喞 " 平 筒 流 ラ 穩 次第 力 v 込 3/ テ テ テ 離 V 觸 艦 浮揚ラ 礁 メン 着岩 動 程 ŀ = 搖 度ニ 2 迫 少キ ス之ヲ防 1) メ以テ前方 排 破 H 水 孔 =. 水運轉 於テ總 位 3/ 得 置 = n 7 引 發見 = 1 區 + 名 排 至 出 3/ n 7 水 7 ス ~ テ之ヲ閉塞 行 Æ 待 V 斯 1 チ 4 艦 ŀ 潜 如 スの 水 前 7 ス I 魂氣强 部 n ヲ 7 3 = テ外 水 デ 毛 ク度 ヲ 注 布 底 ギラ大ナ 4 3 防 布帆 ŋ 水運轉ヲ 至. 布 細 アフト 等 = 水 行 防 y 水 吸 E ムレヲ 遂 材 込ヲ 料 漏 調 ヲ 水減 破 查 孔 少シ 抓 吃 テ 吸 3 旣

浮揚吃水の研究

ŦĹ w 要 7 小 以 ス 潮 故 3 テ 浮揚 多ク 場合 小 沈 吃 潮 水 潮 滿 3 高 1 前 2 潮 Ŧi. w 部 呎 當 7 7 1 許 y 四 IJ 後部吃 サ + 潮 呎 ザ 高 w = Ŧ. 水二 毛 テ 呎 E 1 一十八呎 差 + 1 ŋ 支 丰 但 1 1--坐 確吃 船 3/ + iļi ガ幾 毛 後部 央吃水三十三 水 分 > 前 後 是非共二十八呎以內中 進 部 二十 V 汉 八呎中 呎以内ニ w 後 = 央三 1 前部吃 テ 離 干 礁 央 呎 水 七 ョ 3/ --是非 增 x 1 加 1 艦 共三十三 3/ 1 得 ス 前 w 部 E 一呎以 前 亚 1 1 部 狀 內 ス 態 ア

演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

テ浸水重 艦自身及附屬物並 量及注 小重量 = 搭 ŀ ナス浸・ 載物ノ重 水重 量ハ 量 ŀ 九、五六二噸ナリ外ニ 24 排 水喞筒 ノ能力上自然鑑內 艦ノ浮揚重 = 量 殘 留 = 加 ス フベ n 浸 + 水 1 Æ ノハ 重 量ヲ 水 云 ナリ此 Ł 注 水重 水ヲ二別

所要ノ浮揚吃水ヲ得シムル爲メ艦ノ前方區 劃 故サラニ 注水スル 水 ノ重 量ヲ云 フ。

想像シテ浮揚吃水ヲ豫測 水ノ量ハ大排水決行ノ際ニ スル モノナリロ 於 5 n 排水力ノ如何 依リテ種々ノ場合ヲ考へザ ルベ カラズ故ニ 兹二 四 "

場合ヲ

ノ場合

然 1 前後部浸水區 IV 3 1 Iffi 牛 ラ艏ョリ肋三十七番 い計算上左 八內底上平均二呎 ノ狀態ニテ浮揚ル 7 デ ノ區 ノ高サ迄第 劃二 毛 注水シテ中甲板下面 ノトスの 乃至第六浸水區 3 內 リ下二 底 F. 呎三 平 均 时 + 迄達 呎 セ 高 2 サマ 4 iv デ浸 モ ノト 小戏强留 スの ス w E

第二ノ場合 1 吃 浮 揚 水 排 平 後 前 水 4 均 部 部 量 二十七呎八叶八分八七 三十三呎八吋八分ノ三 五呎十一吋二分ノー 三十呎八叶八分/五 一三、一一一噸

第一ノ場合ト 1 丰 い計算上左 異 ナル 一、狀態 所 ハ内 底上 ニテ浮揚 十一

ルモ

九

呎

1

アルヲ八呎ト

假定スロ

浮 揚 排 前 水 部 量 三十二呎十吋 ノトス。 二、四二

二十六呎三吋四分ノ一

吃

水

後

部

-|-

y

4

ŀ

y

2

平

均

第三ノ場合

第一ノ場合ト異 ナル所ハ内底上十一呎トアルヨ七呎ト假定ス

然ルトキハ計算上左ノ狀態ニ浮揚ルモノトス

排 水 量

前 部

水 後

吃

平 均

三十二呎四叶十六分ノ一

二十五呎十一吋十六分ノ三

二十九呎一吋八分ノ五

六呎四吋八分ノ七

第四ノ場合 第一ノ場合ト異 トキハ計算上左ノ狀態ニテ浮揚ルモノトス。

ナル

所い内底上十一呎トアルヲ五

呎ト假定ス。

排 水

前 部

後 部

吃

均

水

三十一呎八吋四分ノ三

二十五呎一叶十六八九

二十八呎五吋三十二分ノ五

六呎七吋十六分ノ三

烈若クハ、 右ノ如ク計算ノ結果ヲ得タルヲ以テ今後排水ノ成績次第ニテハ浮揚見込立ツモノトス扨ラ浮揚ケ 破孔增大其ノ他不慮ノ出來事ニ由リ排水力ニ大影響ヲ生シ罐室機械室へ防禦甲板マデ満 離 水

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

ス

1

セ 110 排 礁

後

破

噸

+

w

ヲ以テ漏水

٠٠

時

間四

千六百七十二

一頓ナリ

1

見

做

ス

~

3

前

回

ノ排

水試驗

場合ニ

此

2

稍

々可

ナ

IJ

ŀ

量

萬五千

+

w

1

IJ

ヲ

甲

板

如

八

演

軍艦

過淺間

ノ離礁並應急修

理工事

セ 水 要部 110 且離 ハッチ」ヲ 礁 -百五十二 V タルモ 閉 四 「噸六ト ノガ スノ 法ヲ講 再 F. 沈没 此 3 外 ス 吃 w 底 如 防 水 平 牛 水蓆當テ 均三十 憂 ナ 方又 丰 四 口呎五吋 æ 1 排 F 水力回答 ス。 四 分 1 復 -)-7 デ _. 此 時 最 ラ凌 悪 グ事 場 合ト ヲ 得 見做 シメ 2 3 砲門! 1 ス 斯 並

防 水 運 韓

四 月二 一十七 日 第 回 防 水運轉 7 施行 ス 其 成績 左 如

其 四 減 時 水 間 小量二千 運 轉 ノ後機械室パニ重 九百十二噸ナ リ推定喞 底上 平 筒 均深 力 ۱۱ サ 五 + Ŧ 呎七 四 百 时 罐室 噸 1 ハニ 重 3 四 時 間 底 上平 排 水量二 均 深 サ 一萬一 Ť 千六百噸 呎 九 时 ŀ ナ = 對 V 減 水二千 九百

第二回 防 水 運轉準 備工事

回 防 水運 神前 -左ノ通 y ノ エ 事 ラ行 フ

)縱通彈藥道 路 區 四區 Ŧi. 圆 壁 = 各 個 ニノ穴ヲ 明 ケ 通 路 水 が確 室機 械室 = 自然放 水 ス n 樣 = ス IV = 潜 水

工事

(二)前部及後 部 浸水區 ア・各室 >> 悉皆 利 通 3 水 ヲ 箇 所 = 呼 F. 寄 也 得 12 樣 隔 壁 F 部 = 穴切 リ方 追 加 = 1 潜 水 I

(三)後部 w 限 浸 IJ 栓 水 圖 止 ス 7 in 排 = 水 10 3 テ 其 中 = ア n 彈 藥等 重 量 物 ヲ 卸 10 ス 1 此 期 = 於 シラ機: 械 室等 3 IJ 漏 水 ス 諸 孔 出

ス

=

五 四)救難 罐强 定 x 壓通風 京 w , 砲卸 裝置 シ方 I 事 = 7 3/ テ未濟 行 フ = ノモ 1 ノハ 至 急卸

(六)左舷前罐 用七百五十噸 喞 筒 ノ排 出 木箱 3 y 枝 管ヲ 設 ケ 第 罐 室 3 IJ 吸 Ŀ E ゲ ダ w 水 7 前 部 糧 食庫

移

2

得

w

ムルコ

1

一潜

小工事

七)各喞筒吸入管ノ「ロ 1 ズヘッド」ラ調べ塵埃付き居レバ 清 掃 ス IV = ト(潜水工事

+

ス

=

1

部浸 水區 ノチ頓 電 働咖 筒吸入管ヲ改造シ テー 本 1 ナ ・シ水雷 頭部庫床マデ達 セ V 4 w ŀ

九)艦前 部懸 部 = 六呎角 ラ鋼 ノ箱ニ木材ヲ塡充シ 及 ルーフェ 2 グ 1 抱 力 セ 方 (近來長濤 頻 y = 大 7 = 依 IJ 用

(メ)(潜・ 水工事)。

十一パルツメー ター」い容易二下降セシ メ得 n 様二釣リ方ラ改メ置クコ 1.0

十一)喞筒 ノ防 塵器ガ尚 亦 充 分床 -屆 ク様 ニス w = 下(潜水工事

(十二)五月三日 後部浸水區排 水 ス ルヲ以テ其 ノ時 通水孔(隔壁下部 開 キタル穴ナリ)ニ 物ガ塞。 ガリ 居ラ 4

n

ヤ ヺ

十三)五月二日主 砲卸シ方竣工 ス ルヲ以テ其ノ「デリッ ク」装置 ヲ撤去ス w = 1.0

子四)左側努ニ高 キ岩カ五 個 所アリ之ヲ五 时 程切り 落スコ ト但シ「ダイナマイト」ヲ使用シ 差支ナシの

防 7% 運

Ŧī. 月五 H 第二回 防水運轉ヲ施行 ス其 ノ成績左 ノ如

一)通水孔 25 利通良 好 ナ y

(二)前後部 浸 水區 排水 ハ六時間 間 = デ充分 ナ y o

(三)千噸電働喞筒 が罐 ノ力量不足ナルヲ以テ鑵室機械 室 一ノ大排・ 水上 同 時 運轉 スル 能 ハズロ

パルソメー B ー」ハ實際 個 グケ ハ順 ニ下降セ V メ得ルモ館口 1 都合上 他 固定シ置 カ ザ w ~ カラズ 後部浸

區 增 水 ヲ 防 JF: ス n = 21 差 支 ナ シ

Ŧi. 本)前 部糧食庫ニ 水ヲ注ガ 1 ŀ ス w 装置 支管ノ栓扉 ハフレ ベー」ニテ開 ク簡略装置 ナ w ŧ 開閉 加 減不都人 合

ノ金物ヲ以テ「スクルー 一装置 改 Z ルヲ要ス○

講

灋

軍艦淺間

ノ離礁並應急修理工事ニ就

三千

四百噸位

ナット

六分外 牛 次 ルヲ モ 第 底防 以テ舷 水ノ 回 防 效力 水運 側 ŀ 轉 艦 い幾分進 內 = 二十 鑑定ス。 ŀ ・ノ水準 分間 步 1 差 w 时 八 ガ 呎 如 割 + 罐 = 时 テ 給 減 水機 = 達 水 3 セ = 故 3/ 次 障ヲ = n 今回 1 生 111 八十 ジ防 而 V 分間 テ減 水運轉時 水增 = + 間 水 时 測 僅 1 割 定 4 合 毛 不完全 時四十 ナ w 徵 分 點 3 今回 7 テ中 y × 漏 w 止 如

演

艦

淺閒

ノ離礁並

應急修理工事

30

3

3

3

有 望

呎 3/ 第一 此 7 デ 減 回 3 第二 1) 水 1 下 iv 回 度見 能 防 水 ١٠ ズ 運 N ヲ得 轉 1-ス 1 成 タル N モ 績 ŧ 肋 = ノナ 鑑 7 ルヲ以テ近日 七 w = 番 今ヤ望 3 y 前 部 ヲ 中一 屬 満 ス 浮揚 N 水 ス = 足 ゲヲ v 15 ル 決行 前 æ 部三 ノアリ今若シ罐室機械室 セ V + 1 Ŧi. スの 呎二 时 後 部 一十六呎 浸 水ガ内底 テ浮 力 F. 得べ +

水運轉心得書(所 在艦船 總員ニ 示 ス

防

效頭 N 防 防 奏ニ 回 ~ 水運轉 水運轉 キ 防 排 水運 ヲ ŀ 付 ナ 水 起 + 試驗 轉 1) サ 浮 防 V 潜 何 揚 於 水運轉ラ行 回 2 水 行 テ 於 n L ゲ有 テー ヲ以テ主 21 ガ 更 外底 110 望 善 時 7 = フ n + 漏 間 3 ツ假防 水減 -ナ -4 五. 當テハ T n 至 1 目 豫 w 水 噸 水ヲ爲スニ 1 知 2 1 的 常 テー 丰 V 漏 ŀ 難 水 25 V = 大排 機ヲ 時 其 ヲ 丰 見 他 モ 間 一當り其 逸七 度數ヲ 三千 水 汉 此 機會 部 w 署並 噸 = ズ 大排 重 第 ノ作 ŀ 於テ成 = 又 ナ 水 業 離礁後曳航轉錨投錨方按ヲ n 回 v 防 程善クナ IJ ŀ 7 の第三回 號 助 シ得ル 水 令シ 運 7 神ニ w 必要ナ テ N 以 ガ爲 其 ノ道 後一 於テ 運轉ヲ メ浸 層 رد --理 w 作業ヲ 水 ナ 繼續 IJ 好 時 圌 若 成 間 7 定メ 排 3 3 績 ナ 四 防 離 T ス 水 人員 舉 礁 水 噸 Æ 3 ヲ 運 テ ゲ 決 轉 漏 漏 F 配置 水箇 行 中 水 スの 俄 ス 1 ス in ナ 所 期 n = 防 v リ第 ヲ 1 水 水

四 防 水 施 行 H 2 海 面 平 穩 ナ w 7 要

ス

H. 防 水 運轉 午前 九時 以後日沒以前 満 潮 7 w H = 行 フ ヲ要ス。

一六)防 水運轉 滿潮 時 Ħ リナニ 一時 間 前 開 始ス IV ヲ要ス。

水 運轉 開 始 後六時 間 7 經 テ罐 室 及 機 械 室 排 水 ヲ 行 フ

水發令 後 適 宜 1 時 機 = 於テ 前 部 注 水 ヲ 行 フ

九

部

及

後

部

浸

水區

其

ブ排

水

ヲ

終

ŋ

久

n

後

1

雖

E

增

水

7

防

止

ス

w

爲

メ適

宜

喞

筒

運

轉

ヲ

行

フモ

1

ス

三回防水運轉

1% in Ti. 7 月 以テ H 大排 防 水 水ヲ令シ 運 **建轉心得** 書一 引 出 基 3/ 方 丰 第二 配 置 P = 就 防 + 水 午後 運 轉 四 ヲ 施 時 行 74 1 ス午前 Ŧi. 分 離 四 礁 時 運 3 轉 及 ラ開 " 始 3/ 午 後二 時 -分離 礁 有 望 1 ナ

IJ

一艦淺間ノ離礁順序

軍

圖 部 當 1 浸 水 水 H 進 區 滿 内 及 潮 底上 か午 後 部 後五 + 浸 呎 水 = 區 時 7 近 25 リ午 午 = 7 ナ 前 加 九 前 V リー 時 七 1 り。 海上 豫 號 定 岩 1 極 如 × テ平 前 7 排 罐 室後 穩 水 ナ 3/ リシ 終 部 1) 艦 罐 モ 午 室 底 後 1 機 岩 械 = 至 ŀ 室 離 7 27 午 テ V 風 前 力增 九 呎 時 隙 加 + V 7 生 分 海 排 面 3 後部 稍 水 7 + 浪 開 艦 始 立 チ 底 V 午 始 # 後 x 次 IJ

キヲ加フ此ノ時動搖次第ニ増加セリ。

(二)午後三 時 三十 分大排 水ヲ 分 3/ 直 チ = 前 部 注 水 ヲ 開 始 七 y

室下艦

底

ガ

再

ビ岩ニ

一當ラザ

w

限度

7

デ

前

ヲ

沈

メ後

ラア湾

力

七

汉

w

後

チ

日

前

部

注

水

ヲ

rp

JŁ.

セ

ッ

四)艦腹(重心點)ヲシ テ岩ヲ離 V テ 充 分 前 方 進 7 V メン ガ 爲 メ午 後 74 時 + 五 分引 + 出 3/ 方 ヲ 始 2, 前 進 容 易 ナ

y 3/ ガ揚 錨 機 ヲ以 ラ前 方縣 維 索 ヲ総 * 約三十 米突前 進 也 3/ x B y

Ŧi. 器翼 出 一今ヤ 3 方 7 破 舵 7 損 中 及 推 北 ス 進器翼 3 iv 危険アリ 且 7 後 岩上 部 又重 ヲ 浮 = 心盟 臨 力 サ メリ後部 2 21 今 ガ 爲 4 充分 × 浮 前 丰 部 = 方不充 前 注 水 進 ヲ 3/ 再 分 B 崩 w 儘 ヲ ス w 以 = テ 時 テ 此 餘 機 y 7 1 上引 引 待 ッ + 摺 出 IJ 3/ テ 過 艦 ガ V 底 110 7 岩 傷 Z = n 觸 ヲ V 要 テ 舵 セ ズ 叉 故 25 推 = 引 進

六)此時 罐 室機械 室 浸 水 增 加 3/ 內 底 E + Ŧi. 呎 ŀ -IJ H. " 後 部 浸 水區 毛 增 水 3 " 1 ア y 其 1 原 因 揚 錨 ヲ

時

使 用 3/ 次 ルガ 爲 メ蒸汽壓 カラ減 ジ噌 筒 力二 影響 3 B N E 1 + りつ

E 暫 時狀 況ヲ 考 排水力 回復 1 满 潮 1 7 待 チ R IV = 排 水 模樣良好 1 -jy タリ 此 於 テ前 部注 水 追 加 斷 行

-

九 八)午後四 深 此 = 時 = 日時 後 流 必部右方 V 四 十五分(豫定滿潮時十五分 出 デ タリ艏 ノ緊維索 ヲ 右 ハ二本共ニ「ブイロ 艉ヲ 左二 前 偏シ)艦 テ ハ宛モ I 浮ミ プレノ 浮 7 元 " キ足 3 IJ ŀ 切 ナリ敷行ノ長濤 獅サ v īfii シテ後部左方 一押サレ 引キ ノ繋 方ヲ待 維 索 此 タズ 本 -)-

前

方

ý

+ 1 = 艦 甚 > 離 2 礁 ク緊張シ 後吃水前部三十 テ残レリ依テ直 五呎三时 ニ緊張ヲ放チタリ。 後部 二十七呎二吋 = ーテ傾斜 -)-" 關東 = 曳 カレ ラ 新錨 地 = 移

浮揚計算卜實際作業

4 7 浸 7 九千五百六十二順ヲ減ジタルモ) 浮揚計 以テ 小瓜區 差引 央二 此 二八呎前 + 11 時 算い 呎 依 離室 誤リ少ナ IJ 浸水重量三千三百九十四 一时二分 浸 十五 水 重 呎四 ノーニ 量 力 ヲ 1) 計 一时後罐室十三 3 2 ヲ 算 認五五月八 テ排水量 3 ノ三千八百四十八噸 タル 結果 噸 一呎七时 1 萬三千 日浮揚 モ ナ 約三千三百 w 然 四 離礁 分 四 w 百三十 1 = 1 船内ノ 此 後實 九十四 機械室十二呎九吋二分 1 噸二 同 側 水重量 3 時 噸 相當 次 刻 + n 70 ス此 吃 實 -}ŋ 水 側 艦內ノ水重 ノ排 3/ 及 前 w 水 部 各浸 1 量 即 1-後部浸 水區 量 チ Ti. 總重 中注 呎三 1 水區 水準 小水重 量 时 後 量四 IJ 部 火呎 船 重 百 自 + 时 五. 底 身 七 吹 F + + 1) 14 重 前 量 噸 部 时

(二)實際作 減 ナ 退ヲ 困 テ 一時三十 引 一逢遇シ 3/ 業 喞 1. 分未 少シ 筒 E タル 前進容易 働作衰 手違アリ ダ満潮 事實ニ就キ三ツノ失アリ記シテ以テ戒 ナラズ塗 1 へ艦内再ビ増 ショ --ラザ 告白 w コス午後 揚 = 己二 水ヲ 錨 機 艦内減水ノ極度 始 Ŧi. = テ引 メタ 時 = . 1) 牛 ,, 張リタ 後部 暫 時 岩上ノ吃水二十八呎以上ニ メト 後排水力回 = iv 達 A ナス(一)十日ニ セ リ満 前 進 復 潮未ダシキヲ以テ艦 ,, 3 + 幸 V タ 離 -)n 礁 毛 V 之レ 110 ス 達 ,v 層 ヲ ガ ス 得 高 ~ 爲メ忽チ蒸汽壓力 ハ浮カズ兵員總立 丰 17 力 滿潮 IJ y ア 7 n モ ヲ 然 以テ Æ IV 此

艦首摩擦損

傷部

=

於

テ

內

底

1

竪龍骨1

屈

曲

3/

微

少ノ

漏

水

7

IV

モ

前

部

浸

水區

內底

Ē

浸

水

ス

n

モ

1

1

主

ŀ

テ

筒

ヲ

使

用

3/

始

テ

高

サ

呎以內

-}-

IJ

居

IV

毛

ノ多シ堅牢

7

מן

ンチ」ト

雖

毛

高サニ

呎以上ニ

テ

存

ス

n

モ

1

稀

v

ナ

IJ

罐

前

內

得

n

所

2

前

方三分ノーノ區域

ノミ其

ノ他

ハ「マン

水

1

ルーヨ

IJ

見

n

=

高

サー

呎

九

14

T

w

~

+

肋

骨

ガ

屈

曲

y

分

假 防 水

付

力

ズ

3/

テ

揚

=

ラ

强

引ヲ

爲

3

京

w

次

メ排

=

影響ラ

汉

n

=

1

丸 Ŧî. x テ 月 押込 八 日 淺 ム等大活 間 離 礁 動 セ 1 2 末 3 y 漸 同 7 漏 + 日 水 減少 V デ引續 3 喞 筒 + 喞 臺 筒 ヲ以 全 カラ テ内底 U ラ排 上二呎 水 2 ツ 深サ 1 外 迄 底 破 浸 孔 水 維 防 持 水 薦 3/ 得 當 IV テ 至 叉 IJ 帆 布

有 喞 筒 0 使 用

古

底 假 防 水 次第 = 劾 果ヲ 現 3/ 艦 ヲ 傾斜 ス V 110 內底 ラ露出 セ 2 . * 得 IV 7 以テ 本 艦 固 有 主 送 小水機 心响筒 及じ デ

船 體 損 所 槪 略

室 抗 前 B アル 罐室 y 隔 部分(罐臺ノ下又ハ石炭庫壁ノ下等)ノ內底隆起比較的 壁 內 . 7 底隆 透 3 起 ラ V 來 同 w 室 モ 1 1 後 + 部 IJ = 至 V 110 第二一口 2 チーニ 沿 フ 小ナ テ 隆 w 起 モ 3 其ノ代リ 高 サ概 ネ = 呎 肋 骨 y 屈 而 曲 3 甚 テ 構造 重 F. 底 内 內 底

隆 カヲ受ケテ緊張 前 方 起 = 部 於 テ罐 21 兩 舷 F 共 サ V = 久 5 數 多ノ IV 所 重 モ 鋲切 ノナ 大 ナ ラ 斷シ「ラップ」開 n 內底 叉 九十 横 九番隔 切 v r ロス其著 ッ罐 壁 下 下 部 V 堅牢 ŀ 牛 内 所 底 ナ 21 長サ十四 1 n 嚙 = 拘 3 ·呎幅二 合 21 ラ E テ内底剪斷 ズ 时 斯 = 横 達 切 セ サレ 1) 7 IV 肋 叉 九十 善 隔 九番 7 善 壁 曲 ノ隔 强 N 丰 壁 所 懕

九拾第

1.

管 裝 置 桃 木 破 損 スの

間

ノ離礁並應急修理

二四

ク突上 突出 呎 ノース 所多シ 水防 後 幅 ス 罐 チ 外 11 室 肋 骨 居 灰 底 7 = 2 至 モ ラ ガ 放 w 10 射器 水防「ロン ザ 如 毛 V ・ラム w 何 1 11 損害 如 用 7 = リ鋲 內 キ 海 隔壁 水管 ٠ -モ之ヲ防禦甲 底 デ」モ最早ャ水防 切 接近 層大ナ 斷 = 艦底「デ 押サレ ノ敷 3 居 毛 スタン 板下面 雄室 亦多シ其他 テークラック」ヲ ルカヲ ノ隆 ノ用ヲ爲サズ○ スピ 想像 3 1) 起 1 計 ス 內 かこ ス」ハ左舷ニ n 底 w 一呎ヲ 生ズ内底 ŀ = 諸 餘 + リア 超 1 所 罐 內底 外 IJ テ 於テ二重 1 底 ハニ呎 諸 m 共 3 ラ 接近シ = テ " 罐下 程 底 プ」開 內底 內 呎位上リ ラテ船ン 强 內 = П 底 突 丰 E ド二枚 構成 右舷 出 居 諸 IV 3 右舷 材料 = 種 長 1 ガ 1 + ヲ 破 呎 = 枚 爲 知 損 テ 幅 w T-1 × 突 凹 四 ナ --时 計 IJ IJ 破 居 + y 程 ラレ n 內 號 見 底 ガ 如 多 タ

四 H. 其下 iv 7 罐 以 罐 此 部 室 室 テ 際遺憾 機械 此 破 中 E 滅 魈 3 室 央縱通隔壁下部 テ 間 隔壁 內底 少ナ ス n 所 丰 1 破損 ナリの æ 1 連 絡切 大破 7 IJ 至 淺間 斷 リテハ更ニ 3/ 腰 2 タ折り 船 此 ノ强 ノ隔 甚 テニ三呎 力 壁 -3/ 單 7 = 船體强 於 = 高サ 外 テ 內 底 7 底 度 1 モロ Ŀ 減 3 = 最 ズ 此附 殘 2 憂 チ」モ n 7 7 近 ~ 1 総通 ŀ 牛 ラ 外 -モ セ V 底 ズ IJ 7 鋲 然 IJ Ш 隔 N 3 テ = 壁 25 行 外 屈 五 呎 + 底 曲 止 甚 テ 超 支 w 7 樣構造 屈 持 w 曲 カヲ + ラ 居 減 2 7 n

7 7 械 檢 機 テ 位 3 曲 サ 械 ス 7 7 n 肱 室 突キ 次 _ 軸 = 肋 等 n 於 内底 上ラズ第二「ロンデ」ヨリ第三一ロ 材縱通材 テ モ 可ナ 1 中 E y 央縱 認 1 大 ムフェ 曲 ム」ノ多數ハ第三「ロ ナ 通 隔 テ高サヲ減ズ N 2 中心移 壁 ジンしモ ガ下 變ヲ 部 三时 in 生 於 3 位 テ 居 屈 ハ突キ上リ ŀ チーノ ンチ」マ 約 in 曲 = 3/ 內側 徽 呎半乃至三呎 居 デ小區域 ス w 居 V 毛 in 於 110 其 ナ ラ 內 他 切 底 ラ 於 斷 ナ モ 內 テ無理 リ主疏水管 セ 少 底 ナ 1) = 此 力 テ ラ V 1 内底 +1r|ı 温平ト 見 央 IV 著 突キ上ゲラ 變 <u>ر</u> 形 3/ ェ T -丰 2 1) w 變 20 或 = 形 > ŀ 7 21 -7 切 7 呈 重 n 知 V 七 爲メ 或 n ズ 左 重 壓 破 シ セ v 底 1. ラ 全 內

機 械室縱通隔壁 並 後方 ノ横隔 壁 E 屈曲 y テ水防不良 ナ リ罐室機械室附 近 大破損 =. " 北 ス ~ 7

王

--

ケ

七

但

3/

强

3

爲メ要スル所ハ鐵條又

25

山形等ヲ以テ鐵筋「

セ

メン

ŀ

Ī

事

1

ス

n

=

I.

IJ

0

八)外底 破 孔 肋 百二 + 五. 番 附 近及 肋 百 四 一十七 香 附近 = 於テ最 毛 多 7 且. ツ其 ア區 域廣

15

E

此

E

可

7

1)

大ナ

w

破

損

ナ

y

ŀ

スの

九)其 所ア リーウネリーニ 他 損害 雜 多ナ 動 搖 w ス 毛 略 n 1 ス防禦甲 丰 船體 變形 ·板以上 ス n 響牛 於テ坐礁中 ヲ 闡 ク所 船首懸 肋 百二 垂 並 + = 五番隔壁 兩側 垂 下ノ影響ヲ受ケ屈 並 = 九十 九番附 近最 曲 叉 龜裂 著 V 七

n ヂ 丰 舵及推進 是器翼 毛 毀損 T 70

關 損 書

機

破 損 關 + 部 損 牛 モ 害 附屬管拿 モ 亦 大 -}-IJ 控條等殆ンド 內底 突上 IJ 完全 結 -)-果 N 罐 モ 据 1 付 ->-ケ 7 歪 「クランク」ハ 3 或 水ド ラ ム」押 中心ノ 3/ 歪 潰 3 3/ 四 就 分 中 1 後罐甚シ 时 ア 主機 IJ 補 械 = 氣第 モ 損 自

理 方 針

修

修 理 -關 2 Ti. 月十六日左ノ如 ク方針ヲ定ム○

船 體 部

外 底 破 孔ヲ 應急 塞 17 = ŀ 0

(二)内底ハ堅牢 ナ w 水密及補强工事 7 行 ヒ艦ノ安全ハ 主 1 3 テ内底ニ 信 賴 ス IV 樣 = ス w = ŀ 0

(三)隔 壁 其 ブル他 ノ損所 2 出 一來得 w 限 y 補 强 ス n = 10

四 屬壁下部其 ノ他 損所ニ V テ鐵 I 事 ヲ 施 3/ 難 キ所 ハーセ メン ŀ レヲ 以ラ充 分 = 積 3 硬 4 w 7 1. 0

五)二項 內底工事 一竣工 ノ後 チ外 底 破 孔當 金工事ヲ 行 7 3 1

六)直接本邦 + E 近船渠 所 回 在 航 地 3 得 方 ル程 七百海里ヲ隔ッ 强 度ヲ 與フ n = ルヲ以テ工事 鑑 3 最 ŧ 遠 航 主眼 性 補強ニ 1 ス 竣 注意 Ĩ 1 ス 後 n チ 已 モ 1 4 ŀ 7 スの 得 7 n ŀ + = 限 リ入渠ス

講

演

六)豫備給

水「タンク」か

Ħ,

六、

七及八番上部庫ヲ使用

ス

IV

=

ŀ

1

3/

相當

ア設備

新設

ス

iv

=

機

渡

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就

二六

(一)前罐七 罐(七號罐缺)ヲ最 大使用壓力百二十 听 = テ 使用 2 得 in 樣 ス n =

(二)後罐 艦 ノ動 搖 = 對 3 顛覆 セ ザル 樣 ニス N = 10

(三)兩舷主機械)右舷主 機械 ハ特 ハ各筩及滑拿內部其他各滑動部 軸 承 ノ偏心大ナルニ 開 リ同時ニ各接合棒及偏心器帶輪 放檢査ノ上手入及修理 ラ行 フコ 10 ヲ取

ク減ズル 10 四

=

曲

肱

3

外

3/

曲

軸

承

偏

Ľ

ラ成

五)蒸汽管排氣管疏水管給水管及罐氣吹用壓搾空氣管 1 豫定 1 航 海 = 必要ナ 應急工 事 ラ施 ス コト

七)推進器翼端 ノ屈 曲 部 ヲ 切 リ除 クコ ۱۰ ٥

排水 裝 部

一)主污水吸入管及六吋污水吸入管共 = 甚 V ク破 損シ 應急修 理 1 見込ミナキヲ以テ本 諸 管 = 依ラズ 各 品 劃 獨 立

水法ヲ行フ様 = スルコ 1.0

二)救難喞 氣管ヲ導キ以テ夫々ノ 筒 ハーペルソメー 區 劃 ター 一大排・ 三三豪ヲ 水二 撤 適 七 去 1 2 其 4 IV 他 = 救 10 難 喞 筒 ヲ 据 置 丰 本 固 有 罐 テ 使用 2 得 様蒸 氣 及

三)內底上 放射機 ヲ以テ、 污水 排 前 罐室 除 = 23 車 後 罐 軸 室裝備 通路及 曲 ノ灰 版坑內 从放射機 ハ機 ヲ 以テス 械 室汚 w 水 喞筒 = ヲ以テシ 後罐室 同室 装置 補 助 給 水响 筒

及灰

船體修理 實 施 方 法

盡サン 一)先ヅ内底工事ヲ行フニ 事業方針ハ入渠 3 īfij 3/ テ先 セ ズシ ッ 左 テ出 差支へ 如 來ル限リ充分ナル工事ラ行フニ 7 修 ザ 理 計 n 程度ニ外底假防水ヲ爲ス 畫ヲ定メ之ヲ實施 スの アリ 航海 ス機械室下ノ 目 的 地 1 何 V 大破孔 ナ w 7 問 此 フ 7 1 的ヲ以テ古帆 7 唯 最善

ŧ

1

ŀ

ノ目

形

=

曲

ゲ

汉

n

毛

1

=

テ

繋が

=

=

ŀ

但

セ

V

汉

1

ライン」

1

モ

1

ハ假令曲

1)

居ル

ŀ

モ之ヲ切リ外

スコ

ŀ

ナ

ク當金叉

ハ鋲直

3/

=

ス

w

7

フ

材ヲ 布古毛布古麻袋古疊等ヲ新帆 ワ 1 Y D 1 プレ = テ密列ニ 布 = 簾 テ 包ミ ノ子 「厚サー = 連ネ **呎五吋** X n モ ノヲ以テ被ヒ船體 位 ノ防水用「マット」ヲ作リ之ヲ大破孔二當ラ六时角ノ木 大廻 V = 引 丰 締 4 w E ŀ スの

- (一)內底 破 孔 當金ヲナシ鋲不良 1 E 1 25 「タッ プレニ 取換 修理 V 京 in 上 = ١٠ 七 × 2 1 7 置 7 = ١٠ ٥
- (三)肋百二十五 屈 曲 甚 3/ 丰 ヲ 以テ外 番隔壁附近 底 3 IJ 補强材ヲ有效ニ 船體强度ヲ失フコ 取付ク ŀ 最 4年大ナ ルコ ŀ n 28 不可 所 ナ 能 ル ヲ以テ是非共之ヲ補 ナ N ヲ 以テ先ヅ主 ŀ 强 3/ テ ス 左 n ヲ要 如 ク艦内 ス然 ルニ 外 IJ I 底
- 1)橫隔壁 ŀ 外底 ŀ ノ連絡破 滅七 ル所ハ「セメント」ヲ塡充スル 7 1.0

事

ラ施

ス

毛

-}-

- U 罐 室內 底 ŀ 横隔 壁 ŀ 連 絡切 ۱. ٥ V 居 IV 所 ハ變形又ハ割 V ノ爲メ再 ピ山 形材ヲ以テ繋グ = 1. 能 ズ 故 鋼 板 7 矩
- か)罐臺 形 _ 曲 ゲ 頂 文 3 n IJ 出 毛 1 " = n 鋼板上 テ 繫 ガ 横隔壁 0 7. 11 1 ノ連絡 25 悉ク切レ居リテ再ビ山形材ヲ以テ繋グ コ ト 能 ズ 故 鋼

矩

- こ)機械室二重 底 縦通材アル所ニ 對 シテ罐室内底上 ョリ鋼板ヲ立テ横隔壁ヲ透過シテ之ヲ総通材 = 取 付 クル
- 水 ナー」ニ取付クルコ)横隔壁 ノ「ス チフナ ŀ 1 1 罐室側 1 屯 1 25 出 來得 IV 限リ罐室内底上ョリ 「ブラッケット」ヲ立 テ コス チ
- へ)(ニ)ト(ホ)トノ間 デブラッケット 」ヲ設 ガニ呎以 7 IV = 10 Ŀ 距 ツ w ŀ 丰 1 别 三罐室內底上及機械室內底 F 3 ŋ 鋼內板 ラ立 一ラ横隔 壁 7

狹

- 1 =)前記各 ブラッケ 10 ット 並 = 一竪鋼板 ハ其ノ上端前 端又ハ後端ニ於ラ堅牢 ナ ル構造ア IV 1 + ŀ. 之 E 取 付
- チ)前記各 ブラ ツケ " 1. 」ニハ諸所 Щ 形ノ「ラグピ 1 ス」ヲ附シ「セメント」ノ抵抗物 トスルコ

軍艦淺間

ノ離礁並應急修理工事ニ就

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就

(リ)雨

端ヲ

曲

ゲ

A

n

多數

ノ山形材ヲ罐室内底上

3

リ機械室

重底内ニ差シ渡シ之ヲ「セメント」

ノ鐵筋トスル

3

۱٠ 0

- ,ヌ)罐 立 ツ n 前 = ハ横隔 壁 3 IJ 約四呎ヲ隔テ、横隔壁 二平行シテ鋼板ヲ以テ高サー 呎半位 一三堅牢 ナ ル「セメント
- ル)以上ノ工事ヲ充分ニナシ メント」ニ「エキスパテンドメタル」ヲ混 タル上ハ横隔壁ノ雨 ジ鐵筋 面 3 スルコ リ固ク「セメント」ヲ積ミ之ヲ包ミ 込 2 屯 1 ŀ ス 但 3
- ラ)機械室内底以上ニテ横隔壁屈曲 シ居ル 所 1 數 多ノ「スチ フ 7 اً ヲ 斜 メ又ハ竪 = 附 ス

IV

7

セ

- 四)九十九番 自在 = 合 7 3/ セ 得ル テ 1 曲 艦 7 ゲ 1 作 中 以テ之ヲ應用シ ルコ 央部 ŀ -難ク之ヲ作 シテ强度上大切ナ ラ補强 ルト ス テ w モ w E 所 强 1 1 3 ナ y ス = 隔 於 ラ満 壁 ハ大曲リ 足シ 難シ山形鋼ヲ曲 = 曲 V ŋ 内底 n 横割 w 7 多ク平當金 ŀ 、工作 船 ヲ破 ノ手ヲ以テ 損 形
- 1 IV ラ)横割 N Ŧ (鋼 1 1 ŀ 板 V ノ上ニ 厚サ ヲ ス 隔 悉ク 四 壁 渡シ 据 テノー 1 下部 т. テ n 一破損 が如 时 ニ於テ内底 ルク取付 プ形狀 其 アノ上縁 クベ ノ切 Щ = シ 形鋤ヲ v モ 次 Щ w 形 部 曲 鋼ヲ 分 チ テ 取 21 隔 付 呎 壁ヲ切 ケ 毎二 ガ 縦通 リ拔キテ 1 A. 1 取付ケ之ニ高サー つが 1 ナ 1 V 九十 7º 1 九番 」ヲ通リ拔 隔壁 呎以上ノ長キ鋼板ヲ 內底 b V 隔 壁 ラーガ 立 ス
- u)隔壁 部 前 記 ガ 1 13 1 ノ取付 力 サ w 所 11 屬 壁 呎 毎 ス -「ブラ ッツケ 7 1 ヲ設 17 ~
- ハ)前記(イ)(ロ)ノ工事ラ「セメント」ヲ以テ積 三里 4 iv モ 1 ŀ
- 三)隔壁裂目 ハ當金ヲ施シ通路 ノ犀ヲ新規ニ造 w = 10
- 五)中央縱通隔 (非)隔壁大曲 壁 y ノ修理方法 部 = 深サー 左 呎 如 ノ「スチ シ 7 + Í ヲ縦横 三取 公付クベ

シロ

イ)罐室縦隔壁 い腰折レ居ル所ニ 全然 ーセ メント」ヲ詰メ込ミテ堅メ而シテ 約 三呎每二 一隔壁ノ বিশ্ 側 3 IJ 木材 支

时

1

ス

1

スの

ノ下

破

損部

ハーボ

n

1

締

x

1

+

V

開口ヲ

增

サ

10

n

樣

=

ス

in

=

1.0

)機械室縦 隔 壁 が下 端ノ「バ ウ 2 120 y 1 7 2 グ N 7 取 換 右 舷 侧 ¥ IJ ブ ラ ツ 5 " ŀ ヲ 取 付 ケ 側

壁 大 曲 IJ 1 所 = 23 斜 メニ コス チ フナ 1 ヲ 附 ス w = F 0

y

コス

チ

フナ

1

ヲ

取付

5

隔壁下

部

=

マセ

×

2

1

7

積

2

=

ŀ

破 損 當 金 _ ラ 補 強 ス ~ 3/

W 如 底 7 也 理 1 想 1 ス 然 3/ ラ V . F 25 凹 æ 海 11 E 汉 w ーウネ 艦 底 リ」多キ為メ到底斯 -肋 骨 ラ並 列シ テ其 ク丁寧 上ヲ鍋 ナ 板三 w 工事 テ ヲ遂行 被比恰七外 3/ 難 底 3 ノ下 但 = 更 部 = 分 = テ 重 毛 底

附

ス

行

ス

w イ)百二十 後 1 1 端 2 側 左 -九 板 Ŧī. 如 25 四 7 番下ニニ ク施 付 分ノー ケ タル長 ス 個 财 1 九 鋼 + 牛 箱 九番下 飯 = ŀ 3/ V 巾三 = テ 艦底 呎 個 深サ三 ŀ 箱 ノ取 形補 付 呎 5 强 (回 材ヲ **ハ**ニ . 3 时三 1 取 形 付 时 狀 7 ルコト 1 -Щ 依 形ヲ以テス取 IJ 增 補 減 强 材 長 底板 サニ十 付用 グ 厚 呎 万 サニ分ノー 1 ツプー 3/ 水 切 リノ 心巨 时 鋼板 約

前

四

17 假防 各 水材ヲ 4 械 室 Щ 形鋼ノ「フラン F 其 並 儘 Ξ ŀ 水 V 雷 上ョ 室 F デ リ大當金ヲ以テ被フベ 大 ニテーボ 破 孔 = 對 n V **▶** テ特 連 = 結 シ機械室下ノ當金 重 1 ナ 底 式理 ルモノニ 想 ラ以 V テー テ施 ハ約二十三呎半角ナリ此當金 枚ヅヽ 行 ス ~ 艦底 丰 モ = 事 運 情 E 許 並 サ 10 ~ テ w 取付 か六 ヲ U ラ現 7 n IJ 在 モ 成

救難罐撤去ニ至ルマデノ 排水狀

-五 ラズ 月八 罐用 H 離 礁 ŀ 後 V テ 最 初 時 間 兩 --三日 噸 間 清 ハ多大 水ヲ 要 ノ漏 ス in 水 有 7 ŋ 樣 テ -}-吸込 y 3 ガ 3 前 甚 1ª 丰 -强 述 17 潜 ~ 次 水工 w 如キ方法ニ E 迂 濶 テ急速ノ假防 破 損 近 能 水 7 ナシテ

然

合已ム 間 百 噸) 7 狀 1, 斷 E E 以 最 7 危 水 モ 7 呈 テア 7 時 7 補 王 1 = 排 意ヲ用 得 3 1 助 ナ 揚 水シ今日 ヲ防 ザ 艦 V 給 w テハ 吸込 用 內增 水機 w 7 E 11: ŀ 假 テ施行シ 3 1 水 H 3 3 置 テ上 臺 7 2 防水材ノー = ナ テ内底 至 IJ 1 + (力量四十五 甲 相 V 7 ラ 內底 當 板 リ六月十 タリ然レ w ヲ以テ然 ノ工事ヲ 手當ヲ 据 部自然毀損 ノ修 付ケ 噸) 1 H 理 行 中 夕 事 7 毛 w ル罐 倘何 行 故 後 及灰放射機响 止 110 ナキ ス チ外 E シテ不意 平常二 內底工 ハ六月十日ニ之ヲ撤去 w 所 = ŀ 3 底 大破 y 1 丰 事竣 復 1 , ア = 艦ヲ傾 漏 简一臺 9 孔 ス 毛 事 水ヲ増 ノ修 n 知 I = 業 v 3 ŀ 斜 ズ 理 テ 1 (力量約 勘 工事 艦 進 7 スレ 3 得 或 继 7 內 カラズ 3/ ~ = 25 バ内底ノ片舷ヲ乾スコト 7 = 喞筒吸入管ニ妨害物吸付ク等突然排 少ナ 畢 ク左シテ憂ラ Ŧī. 行 漏 コフ順序 v + 水 カラザ 漏 y_o 噸)合計千六百九十五 セ 1 水 ŀ n アリ爾來主送 w 也 = ルニ 阻害ト y 至ラバ外底破 假 足ラザ 防 ナ 水 テ得テ 小水機 v 質 n y 然 孔 噸ノ力量ヲ以 = 先ヅ好都 臺 ノ假 F 應急處置 v ヲ 10 (力量千六 確 モ 防 水 水 力 × 合 ヲ 場 放

次

就

三〇

難 啷 筒 据 換

救

七月 事 進 不要ト w 前 懋 Ŧi. 百 部 Ŀ H 噸 浸 之ガ 水區 = + 喞 筒ヲ ルヲ 至 工大ノ便 試 ^ 取 運轉ラ 以テ之ヲ 外 重底內七十 シ之ヲ 宜 行 ŀ 撤去 7 E 後部 IJ 7 京 ルニ セリ 三番隔壁ニ 90 浸 又罐室 成 水 凝積良好 區 = 備 接 備 = フ シテ w テ容易 爲メ 汉 ーセ IV 後 DU 3 個 = -部 2 ノ七 彈 ŀ. 重 藥 首五 通路 底內 塡 充 1 -1-= 水ヲ吸ヒ 噸 据 結 付ヲ 喞 果全然漏水 筒 行 毛 彈藥通路 上が罐室内底 フ īfii V 7 テ 7 後部 7 据 リタ 7 換 浸 乾 水區 ルヲ以 罐 ス = 室 1 ラ同 ノ排 F ŀ 7 噸 得 水 雷 品 タリ = 働 備 喞 I フ 筒

百二十 五番ノ修理竣工

試 -1-験ヲ 五 行フ 於 其 5 ヘノ方法 n I 事 及成 修 績 理 左 工 事 如 中 最 モ 重 要 ナ w 毛 1 ŀ ス 本 工事 ·七月十· 七 H 1竣工シ 尽 n 7 以 テ機 械

)機械 室 內底 諸 孔 閉鎖

(二)罐室救 難唧筒 運轉 25 平常 通 1) 臺 = シテ「ホー ス」一本

1

ス

其他

異

狀

ナシ

水壓ヲ撤

去

3

乾燥

V

汉

n

後

チーセ

×

2

1

ーラ

以テ漏

水個

所

ヲ

T

瓣

=

繕

Ŀ

汉

70

四 救 機械室 難 卿 筒 平 重 常 底 內 通 满 = テ 水 制禦ス シ外壓ヲ受ケ in = ŀ ヲ 3/ 得 2 此 n = 1 增 1. 水 時間 28 -7 ヲ ラ 過ギテ鑵 2 7 ٤. 室二 " ŀ _ 重 底 下 = = 於 少 ラ 3/ 1 增 セ 3. 水 2 傾 1. 问 塡 7 IJ 充 但 堰 止 3/ 罐 x 方 室

方 工 事 困 難 ナ w ダ x 10 ゥ V テモ 充分 = 行 力 7 ij 3 = 由 n 毛 1 ŀ 認

五中 樣 = 1 ス 央隔壁ニ V 250 7 可 施 + 接 ス 1) ス IV 當リ其天井則チ內底下 此 部分 漏 = 水 於テ罐室 2 rh 央隔 壁 內 底下 1 面 百二 = = 十 透 於テ充分ニ 過 五 番 ス w ŀ --水 行カ 文字 ア IJ 但 ザ ٥ 交叉 y シ少量 2 毛 ス 1 w = 部 シテ之ヲ適宜 ŀ 認 分 40 屈 曲 複雜 1 所 3 テ 溜 重 IJ 底 ヲ 作 內 IJ IJ 吸 セ 12

七 就驗 時 間 H. 時 間 1 後主送水機 ノ運轉ヲ 開 始 V 試験ヲ終 10

+ 九 番 1 竣 T

九

百 + Ŧî. 番 次 * 重 一要ナル艦内工事 25 九十 九番 1 ス本工事七月二十六日竣 T.

室 1 修 理 竣 I

罐

停 止 隔 3/ 罐 及罐 室 フー 臺 修 重 底 理 竣 = エシ 满 水 2 前 內底 後罐 = 室 海 22 豫定 面水壓ヲ受ケ 1 應急修理 V × 終 維 y ノヲ告ゲ 持 ス n 7 汉 n 1 Ξ 7 以テ 時 間 水壓試 y 其 八成績左 驗 汉 メ八月三 如 シ H 罐 室排 水

九十 九番隔 壁 附 3/ 汉 IV 「ブラ y 5 ッ 1 取 付 山 形 隙 3 1) 雏 軸程 緩 漫 ナ ブレ 漏 水數 個 所

> r りつ

(二)罐 臺 根 3 IJ 指 尖程 ノ噴 水三 個 所ア "

三)内底「セメン トーノ 肌 3 ŋ 濕 3 w 所 個 所 7 "

機 關 修 理 竣 I

見込立テリ更 離 礁 後 機關 部 = 修 八月十 理着 4 H 進 渉 緊留運轉ラ 3/ ツ ツ ア 行 y 2 t ガ 層其 六月一 ノ所信 - 日 ヲ 强 摺 合運 フ V 神ヲ 兹 = 行 機 關 Ŀ 部竣工ヲ 及 n 結 果機 告ゲ船體工 械 長 途 事竣工ヲ待チ 航 海 モ 差 港外

支

演

演

一艦淺間ノ離礁並應急修理工事

試運轉ヲ ク行フコ ŀ F スつ

內 外 I 事 竣 I

約六时反リ上リテ內部ノ假防水木材ニ押シ當リタリ元來構造弱 八月十五 日 艦 内諸部工事竣工ス八月十八日外底工事竣工 ス機械室下ノ大當金 ケレバ是非ナ キコ 吸と付キノタ F ナ " メ号 形 = 曲 IJ 中 央

罐 室 排 水 装 置

備 溢 個 n 内底ノ「マンホー v 出 7 爲メ少ナク = テタ 圍 w 救難 E iv 7 ル場合ニ 附 亦 ス ŀ 1 此 E ルレヲ ス」ト合計二十本皆內底上ニ ノノ園 堰止 喞 筒 閉シ二重 ノフ ٤ × ŀ 21 萬 ナル 水 1 ・ス」ニ・ 底二 ノ必要ナ モ ノナキト 满 本 水セシム ハーマ ル場合其 キハ 止メ置キ要ス 漏 ルコ 1 ヘノ ファ 水直 水 トハ内底ノ爲メ 1 12 = 2 内底上ニ w 亦 = 差入レ 時 1 IV L 直 汎濫 = 使用 望 ヲ 置 閉 マシ ス クヲ要ス ルヲ以テ之ニ備 3/ ス 得べ = カラズ故ニ罐室二 1 但 支障ナキモ カラシ シ若 40 3/ 漏 フル爲メ「マン 1 水 重 ŀ ス其 底 2 漏 ノ他 亦 水ヲ排 1 ホ ル ヲ 出

港 外 試 運 轉

八月二十 H 港 外試運轉ヲ施行ス 其 ノ成績左 ノ如

一)午前六時二十 分出港午後零時五分歸港投錨

二一早朝驟雨

アリ忽チ睛快

3/

虹

鮮

力

+

リ(サ港百五

十日

雨

-

7

曇

30

モ

+

カリ

キ

我等未

小ダ智テ

此

1

如

牛

瑞

ヲ

見

風 **丛力二乃** 至三 海 面靜 穩 ナ V 下毛 長濤 アリ 高 カラザ iv モ 幅 ١٠, 約 船 長 ノニ 分 ナック

械最高回轉數五十六一 時 間 日繼續 シ此 ノ間速力六乃至六、 四節ヲ示セ リー

(四)應急修 理 測

中)機關應急修 イ)船體應急修 理 理 部 部 異常 異 常 ナ

1

ナ

ハ)船體構造上 一憂フベ 、キ震動 +

Ξ

船

體

强

度

肋

百二十五

一番及

九

+

九番

1

連

結工

事

=

最

Æ

意ヲ

用

Ŀ

X

w

モ

1

-

w

ガ

試

運

轉

結

果

=

見

w

1

+

本

亦 テ容易 浸 漏 水 水 內 狀 底下約 重 況 底內 碇泊中 ノ浸 三呎 = 水 ŀ 制 大差 ヲ 止 V ス テ ナ 內 n 7 罐室 底以 7 ŀ ヲ 下 = 於テハ 得 = 制禦 タ リ罐 時 ス 室 々五號若クハ八號教 w 機械 = ŀ 室共ニ ヲ 得 夕 是 ŋ 機械 レ以上 難喞筒 臺 漏水 = 於 增 ラ 臺ヲ運轉 加 1 主送水機 模樣 ナ 20 一臺百八十 1 ス」二本 回 ・ヲ以

)航走速 力バ五 五 節(五十二回 轉 1 定ム w 7 現狀ニ 適ス ルモ 1 ŀ 認 にム炭費 H Ŧi. 一十五 噸

試運轉ノ成績ニ就キ所見

" 機 械 試運轉 成績 徵 ス in 1 キハ 頗 ルル良好 = V テ 此 E 特 修理 ヲ行 ハズ シテ本 邦回 航 堪 得 E +

理 航 + I 海ヲ 7 ラ 外 事 要 ス 底 兼ネ海岸 萬 仕 七 1 ズ 思 直 2 E 2 場合 テ ヲ 3 本 7 程 ナ 航海 邦回 サ 弱 內底 ズ カ ラ 航 V V テ本 テ ズ マン 堪 海 漏 邦 面 水 水 得 靜 25 回 1 N 航 力 充 ルーヲ 分 程 ナ -堪 度 w = 閉鎖 港 = 此 フ 爲 = x IV 得 V 至 2 Æ 內底二 ーリ潜 得 ザ 1 iv w ŀ 見込ア 水工 判斷 モ 信 喞 賴 筒 ス其 " 手ヲ増 ス ノ備 ノ他 w ノ計畫 充 艦內 V 外底 分 ノエ ナ -ノ追 w w 7 ヲ 事 以テ懸 補改良工事ヲナ 以テ近海 1 仕 直 念 2 航 ナ 7 行 要 + = モ セ サ ズの 1 1 180 差 外底 支ナ 判 斷 モ 3/ ス 入渠修 故 然 試 3

骨ヲ 來)外底 得 有 n 限 ス 1 追 IJ w 航海 堅 補 车 改良工事 批 ->-抗 w 當 ヲ 減 金 ŀ 1 = 七 改 層嚴 4 V 4 w 密 n = ŀ = = 外底不良箇所ヲ ŀ 174 等 個 1 -箱 y 形 補 強 調 材ヲ延長スルコ 査シ 之 當 金ョナ ŀ 其 ノ他 ス 3 總テ箱 F 機 械 室下 形 當 大當金ヲ 金 水切ヲ 取 附 外 3

出

肋

今後 ノ 方針

通り定 假 修 理 成 績豫期以上 ノ好果ヲ收 メタリ今後修 理 ヲ 要 ス N 所 外 底 = 7 9 前記 所 見二依リ今後ノ 方針ヲ左

演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

-)試航 海 ヲ銀ネ 約千 Ŧî. 百 軍艦淺間 海浬沿岸 航海 北 J: ス N = 1.0
- (二)潜· 水工 一増派ヲ 東京ニ 請 术 ス n = 10
- 三)目的港 到着 セ 11 外底 ノ追 補改良工事 ヲ 行 フ = 10

ナ > n E 110 1 w 7 1. V 1.7 1 × 雖 1 俗 毛 氣 = 候温 京 1 ルトロメノ名残 和 1. = n V ~ テ 1 四季 ŀ 稱シ 春 灣內蠵 如 ク年 中 降 1 雨 集 稀 w V 川 == 3/ 樹 テ 7 風 7 土 野 概 = ネ 水 健 ナ 康 31 殺 適 風 景 ス 故 ヲ以 3 テ

試 運 轉

I

作

部

同

モ

1

幸と

苦患

ナ

丰

ヲ

得

タリ

我等今日

此

地

名殘ヲ惜

ラ滞

在

百

五十

人生

慰 安ノ

用

取換ヲ爲ス最 八月二十三 初 H 午前 \exists リ不完全ナ 五時 出發八月二 リシ ---十六日午後豫定 术 w ŀ _ b 認 X X ノ・所 ŋ 其 假 他 泊 異 3/ 狀 淺 間 + ₹ 0 艦底 検査ラ行 フ不良 小水 w ŀ 本

八月二十 九 H 同 三十 H 波荒 3/ 異 常 + 3/ 0

九月一 ·B 長濤 甚 ダ大ナリ 長サ船 1 長 サノ 約 分 1 3/ 左舷 前 方 3 IJ 來 n 淺 間 ガンニ 北 スベ キ長濤 會 3/ 出 征

唯 九 月 = 度 H ナ リト 長 濤 云フ 大 = 船體 3/ テ 九 激 月 動 日 强 以 キ £ Æ 更 ナ 1) = 艦 異 常 1 ナ 17 1

港

=

着

ス

航程千二

Ŧî.

百

浬兹

豫定

1

大

試運

轉

ヲ

終

V

13

回

航

中

機

械

回

轉

數

H.

ナニ

速力六海里

弱 常

約

千

馬力炭費英炭

IJ

2

1

傾

斜

最大十

七度船體機關異

7

V

九月

四

H

無

事.

H

五 + 五. 噸 -}-"

機械 室下 當 金 取 外

白 力 サ ラ ザ 11 w n 結 ŀ 果 u × 7 y = 其 於 グラ行 他 E 2 憂フ ダ N ~ 機械室下ノ キ髪 形 ナ 7 舊大當金ヲ取 且 " 取 付 71. 外 w 3 檢 F ス 1 n 螺旋 = 周 部 圍 毛 1 竪板 異 狀 ナ 20 高 丰 所 於テ挫 ケ居 · 12

21

面

機械室下 破 孔 眞 相

(二)九十

九

番

F

=

於

ケ

ル 二

個

箱

形補

强

材

ハ之ヲ

前

後二

各

八呎

延

長

1

補

强

ヲ

兼ネ

水

切

7

盖

良

-

ラ

3/

水

切

ヲ

善

良

7

ラシ

40

械 室下 破 孔 爾 來真 相 不 明 ナ IJ 3 E 兹 = 始 メテ真實 ヲ 見 取 n = ŀ 7 得 1 IJ 其 他 外 底 般

新

發

見

損

所

7 1) 底 破 孔 ノ眞 相 28 實 21 此 1 時 至 " テ 漸 7 明 力 = -}-1) 汉 n 毛 1 7 y .

「ニューマチツクドリ ルノ 使用

六 罐 潜 H 水 据 I 付 7 4 3 テ 終 1. 3/ 12 0 テ サ 利 7 用 2 1 3/ 118 V 及 n チ ツク IJ 7. V TI 10 E × 潜 = 17 水工 於 N ラ 7 100 21 使用 使 艦 內 用 セ I 七 3/ 事 3/ 2 用 L w 12 F -3/ 7 25 テ 1-充 1 分 3/ = 之 7. 1. 設 1 = 要 備 7 -チ ス カ " n 氣蓋 IJ 7 3 10 IJ 器 ナ in L 空氣壓 7 使用 搾 機 ス 及 發 w = 電 付 機 丰 九 月

底 修 理 追 補 改良方案

艦

軍 艦淺 間 北 J. 後 艦 底修 理 方案ヲ 左 如 17 ス

礁 前 = 行 E 京 w 前 罐 室下 左 舷 = 於 5 w 當 金 24 其 儘 1 太 0

四 首 百 二十 7 Ŧi. 五 番 番 下二 附 近 兩 於 側 5 ルー = 於 ケ 個 w 1 梯形 箱 形 當 補 金 强 材 2 其 ハ之ヲ前 儘 1 ス 後 = 各 八呎 延 長 3/ 補 强 7 兼 ネ

去リテ之ヲ元 ノ通リニ 締付ケ穴塡 × ŀ ナ ス = ŀ 0

五

機

械

室

下

舊

大當

金

ハ之ヲ

取

外

V

取

付

ケ

穴

1

跡

25

今

V

デ取

付

ケ

アリ

3

Ш

形

鋼

ノ下

緣

ノ「フ

ラン

30

トラ

切

方法 大當 スの y 3 ヲ 構 均 金 外 造 塡 7 取 1 ス 板 外 + w = 如 相 ス 3/ 當 キ高 當 A 金 w サト 間 跡 兩 隔 1 大 側 3/ = 其 肋 破 モ 1 出 材 孔 前 來 7 25 設 得 後 出 かか之 端 來得 w 限 ヲ當 板 y n 傾 ヲ 限 斜 曲 金 1) 周 3/ 17 -テ 堅 w 圍 板 1 被 1 困 小穴ヲ平 Ł 高 「難ヲ厭 宛 7 E 船 ナ ラ 當 E ガ -H. = テ 金 箱 重 w = 樣 テ塞 形 底 = 1 = ス ->--)-+" 卒 īfij ス V 當 = w 3/ テ 金不 1 ガ 當 如 7 金 力 1 可 構造 能 w 中 ~ 大破 V ス = 是非 丽 孔 3/ 木 共 テ ヲ 材 傾 艦 修 ヲ 斜 理 底 充實 水 1 ス Ш 切 w

後 部 水 雷 室 F 大當 金 ハ機械室下 夫 如 1 面 積 大 ->-ラ ズ高 サモ 高 力 ラズ 內 部 20 假防 水物 毛 軟 カ + æ

識

演

軍艦淺間

ノ離礁並應急修理

工事二就

其

他

艦

底

回

3

多キ

E

破

孔

21

-}-

3

强

度上

懸

念

部

諸

所

Name .

木

型ヲ

取

3

テ

檢

ス

w

=

補

强

材

特

=

必

3)

ŀ

付

·V

軍艦淺間ノ離礁並

三六

若 7 ズ 2 機 體 械 室 = 少シ 當金改造方 ٨٠ 弓 形 押上リ 法 = 習 居レ 「ツテ 本當 1 Æ 何 金ヲ改造 V ノ部分モ傷メラレ 七 110 寧 T 現 在 居ラズ 一ノ.當 金 且. 3 y 7 此 毛 高 1 所 + モ 20 艦 1 ŀ 底 ナ 1 凹 y 水 抵 甚 抗增 水 大 ナラ

現 在 モ 1 = テ異狀ヲ呈 也 ズ 1 ス v バ當金改造 ノル 要 ナ 1 故 本 當金 1 取 換ヲ 行 ハズ

取 付 3 7 層 確 實 ス w 汉 メ増ータップ」ヲ行 Ł H. " 前後 = 水 材ヲ以テ水切リヲ 作 iv

部 龍 骨 破 損 現在 塡木 ノ上 3 IJ 箱當 金ヲ 行 7 其 前 端 ハ水雷室下ノ當金 = 衝 接 3/ 後 端 板 金ヲ

ラ 水切 形 1. スの

八外底 割 目 裂目又 ١٠, 鋲不良 繼 目 等各 4 肌 ヲ合 也 B N 平當 金ヲ行

九十 九番 並 百二十 五番 附近 ノ外 底 1 以上行 Ł 汉 iv 當 金 ヲ 以 テ要部ヲ 充 滿 ス w ヲ以 テ 此 v 以 外 補 强 取

箇 所 ナ

舵 破 損 部 增 シーボ ŀ ラ 行

内 底 論 七 ズ「ボ ト」又ハ「タッ プ 締 メノ 所及支 柱 至 細 檢 查 3/ 荷 毛 弛 3 7 ラ 、之ヲ締 x 直 ス 叉艦

I I

セ

ント

不良

ノ箇所アラバ之ヲ繕

淺間 艦 底 I 事 方 案 通り十二 月二 1 日 竣工

外底 破 孔 製六十 餘 對 3 當 金 數 H. + 14 其 總 面 積 于 Ó 174 1 14 平 方 呎 達

I 成 績

响 筒 7 先 サ 牛 1 110 n 時 1 間 17 約千 x 出 順宛 港 1 際 ノ排 於 水ヲ要セ 力 w 狀 V 况 モ = 1 比 ガクハ ス w = 約六七百噸宛 吃 水 增 加 3/ 居 ノ排 w = 水ヲ續行 拘 ラ ズ ス 浸 v 水 1111 制 足 禦 N 3 R ŀ 常 b ナ 時 運 リ潜

ス

水

難工 腿 ナ 事 V 25 事 勿 論 1 豫 テ 期 期 待 達 = 達 1 サ 七 n ザ y 毛 1 3 ナ 遺憾 IJ 7 水 ナ ij w 唯以 ŀ 前 本 3 ij 1 雖 2 善 毛 余等 良 + ガ n 思 = 1. 1 7 ヲ 通り Ü ラ満 ナ ラ 足 ザ 七 w 1 屯 1. 1 ス 補 ナ シ 强 28 淺 間 T. 事

主

軍艦淺間横須賀回鯨

淺 間 關 東 21 + 月二 + H 午 前 + 時 出 港 横 須 賀 回 航 1 途 -就 7 淺 間 ヲ 先 頭 單 縱 陣 = 航 行 3/ 其 速 力 及

離左ノ如シ。

原速淺間ノ回轉六十

(約七節)

統約三

節

距 離 六百乃至千米突

徵

速

同

某 島 マ デ

ス + 三十 ·月二十 H 74 H 7 デ 長濤 十五 彌 k 日 大 二十六日 ナ y 其 後靜 引 穩 續 1 # · 荒天風 + w 0 力八乃至 九波浪高 V 淺 間 ジョ P F 9 1 グ 傾斜二 十七八度

某島着淺間檢査(右舷主機「クランクピン」切斷)

十一月七日午後二時其附近ニ着投錨ス。

船體ハ艦內外底共ニ異狀ナシ。

テ當時「 丰 温 圖 3 機 航 關 度高 海 ラ ラ 1 730 1 1 7 JII 右 w 7 ラン 潜水 毁 IJ 舷 所 預 機 = 久 クレニ 第二 I. 3 斯 n ヲ 組 汉 力 低壓 以 疵 長 IV iv 破 テ投 ヲ 毛 1 認 吸付ケラレ 1 損 クランクピ 錨後 メズ 7 カ 發 詮 其後良 見 マメ 議 セ 暫 1) 1 X ン」ガ「クラン 好 此 2 7 w 措 ~ モ 21 1 狀 曩 牛 p 此 態ヲ 修 IJ 1 = 已 理 2 附 グ 持 工事 = 近 7 內 續 + 7 含的 檢 y = 3/ 1 着手 查 及 本 2 龜裂 ヲ IJ 機 然 ス。 目 根 IV 離 7 的 1) = 礁 元 1 布 後 2 V 3 ラ 修 y Æ 哇 切 理 1 着 力 久 ノ 二 斷 -或 1 際 V 居 H = 3 前 嚴 2 前 13 D' ŋ 3 密 I IJ = 此 25 検査ヲ 第八メイ 缺 2 處 温 2 1 外 2 -}-塗 底 力 7 ゲ 破 IJ 損 1 動 汉 ~ モ カ 多 30 1 3 毛 力 ŋ 居 y ガ 此 2 IV グ ŀ 度

演

軍艦

透問

ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

防水作業

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事二就テ

浸水程度 漏 水ヲ一 以前 層 減 ノ約年分トナリ又罐室 少 七 3 2 w 目 的 ヲ以 テ此際木 ノ浸水程度へ以前 楔鋸 屑、 鬻 3 脂 1) 等 約四 ヲ 用 割 E 減 外 2 底 久 70 細 目 防 水法 7 行 Ŀ V

クランク」應急修理竣工

クラン 力五百五 1 + - 回轉五 應急修 十五以内ニラ運轉セバ今後差支ナキ見込。 理十八日竣工ス近隣 ノ島 マデ 試運轉ヲ ナ V 而 V テ後修 理 部 檢査ヲ行 E 汉 N 異 狀 ナ 3

發

出

出發。淺間、關東愈々橫須賀ニ向フ。

横 須 賀 歸 着

十二月十八 日 午前 九時三十 分淺間、 關 東横須賀 歸着 ス航 海中機器 關 檢 査二 回 異 狀 ナ シ

工作部ノ勤務狀況

心共 百六 Ŧi. 島健次郎 H I 航海 作部 + 壯 四 健 名 日數八十二日 28 淺間 B 城谷治雄、 7 救 1 忍ど 就業 難作 善 其里 時 業ノ大部 工手川名常藏、 17 間 耐 程 か十 タリ自讃 萬三千四百六十六浬 タル 四時乃至十六時 I 作 石丸作五郎、 = 似 關 汉 ス 間 V N ドモ 事 ニシ ナリ ラ掌リ其所作大要以上記述 美事 内田 テ苦勞勘 我等 ŀ 清 云 次 ガ 郎、 本 フ ナ カラザ 7 1 憚 蛭 N 所ノ 力 田 ラ y 鐵 技手中 ズ 2 Ti. 力 郎 10 セ 藤倉鐵一 モ 島三郎、 w 聊 ガ 力 如 Ti. モ 郎、 3 板倉庄· 碇泊 緩 4 Щ 心 田 作 太郎、 藤蔵 ナ 業 力 " H 及 、絹川 E 力 職 政 百百 五二 180 身 -

次

n

Æ

一名アリ之ヲ幸者中ノ不幸者ト

但

3/

職工中公務死亡ノモ

ノ二名公務負傷本邦

=

歸

還

1

モ

1

四名公務負傷

時的

休養

1

Æ

ノ三

名懲戒

處分

三八

=

其

結

果

機

半

1

裂罅

7

生

七

"

+

+

=

號

罐

ノ「ド

ラ

ムしい

41

央縱通隔

壁

H

形

ス

チ

フ

+

1

=

押

サ

V

テ

損

害

ラ

被

1)

--

號

罐

1

如

キ

約

时

本

編

=

2

主

1

3

テ

離

礁

後

機

關部

修

理

並

=

救

難

喞

筒

及

罐

=

關

3/

前

編

=

記

載

セ

775

IJ

3/

詳

細

事

7

記

ス

毛

1

1

ス

第一章機關修理

機關ノ損害概略

機 曲 壁 關 後 肱 ŀ 內 局 軸 機 罐 底 部 械 中 室 突 心 E 1 損 損 線 ヲ IJ 害大 害 連 = 爲 歪 絡 主 3 -)-セ x 7 y 機 罐 7 n N 生 管 È 關 機 部 E 七 部 弇 1 1) 械 . 1 7 補 控 損 20 機 記 助 條 害 サ 機 械 損 22 モ 全 > 械 臺 亦 0 部 害 毛 久 ŀ 多 傾 共 破 大 損 斜 = 突 破 3/ 損 且 キ 3/ 也 " E テ 機械 罐 w ゲ ラ E 1 据 1 臺 V P 自 四 付 y 身 周 歪 艦 モ 1 隔 底 歪 15 內 × 壁 外 w ラ 毛 爲 4 -亦 導 3 7 筩 突 ケ 押 in 牛 1 3/ 諸 筩 Ŀ 潰 管 1) 1 3/ 變 龜 25 間 全 形 裂 部 7 1 3/ 破 控 女 生 損 條 n 30 所 ス 承 文 今 モ 7 iv 全 IJ 3 毛 IJ 部 而 小 破 7 3/ 2 損 テ 1)

隔

殊

17

歪 3 1 最 モ 甚 3/ 丰 1 + Ŧi. 十六 號 罐 = 3/ テ 突キ J. IJ 約 呎 六 时 = 達 ス

罐 前 室 罐 = 室 至 罐 ツ 27 ラ 後 罐 21 罐 室 罐 25 勿 = 論 此 修 ス 理 V , 110 見込 損 害 + 少 ナ 7 蒸汽主 3 其 、內七、 管 使 用 號 不 罐 可 1 能 損 叉 害 1 1 大 可 Þ ナ 的 IJ 修理 大 ナ 7 w 要 毛 ス 應急 n モ 修 1 理 七 本 見 ア 込 y 補 + 助 2 **奶蒸汽管** 1 七 ズ 後

安全弇蒸汽捨管切 呎 突キ E IJ 切 斷 斷 又 墜 1 落 變 曲 3/ Ŀ ス。 部 通 風 路 1 六 时 位

1

Ш

3

ヲ

生

ズ

w

所

多

約

機械部ノ損害

離 JU 月二十 礁 後 Ŧī. 月 七 1 H 114 4 礁 H 及 中 六 排 月 水武 --驗 H 1 際第 兩 p 計 1 上 測 部 3 露 度 出 1 セ 計 IV 測 1 4 # 法 防 ヲ 禦 此 甲 板 較 叉 七 w 2 隔 = 艦 壁 3 曲 IJ 計 y ガ 測 坐 3 礁 ラ 筩 中 1 1 離 狂 礁 也 當 位 置 時 7 1 離 計 礁 ŋ

讚

演

軍艦淺間

ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

後

更

數 H 7 經 過 3 7 n 1 + ŀ 漸 k 相 違 七 2 ガ 狂 e 1 最 Ŧ 甚 3 力 y 3 1 筩 ガ六时 四 分 1 突キ上リ 3 1 中 央隔 壁 間

距 四 时 四分 擴大セ n ŀ ナ y

演

艦淺間ノ離礁並應急修理工事

四〇

側 面 = 蒸汽管膨 テニ 时八分ノー 脹 接手ハ 平面 中心線 テー ノ狂ヒ 时十六分ノ十三ナ 右舷 モ 1 側 りつ 面 = テー 时八分ノ七平 亩 ニテ 财 十六分ノ十 ·一左舷 Æ

左舷主送 其他 主 水機械第 機械第控條及同 控條取付部等破損頻 承、 右舷機械室ノ Þ -1-中 2 テ發見 -間弇取: 付部、 サ v 久 " 主加減拿、第二低壓筩排出管伸縮接手、復水器吐拾管、

左舷 機械室 1 モ 消防 1 傾斜 卿筒 セ 1 右舷ノ IV モ 應急修 モ 1 理 ハ甚シ ノ見込ア ク傾斜シ " 其 1 支柱 バ三本根元 = 於テ切斷サレ 吸鍔二本共 〈彎曲 3 役 立 タズ

右舷推 進 器 1 翼 端六吋乃至十 四 时 折 V 曲 リ左舷 1 モ 1 ١٠ 翼端八时 屈 曲

七

"

機關 ノ運轉能否決定

7 停輪ヲ以テ「リ 棒)機 E IJ 偏 = 尙 械 心器帶輪及主軸承上 述 水 接合棒 五月 ~ 京 八 w 2 如 ノ上下雨端ヲ艏艉 日 クレヲ 離 7 多 礁後 前 7 ノ損所 後進 部 畫 裏金ヲ 夜防 = 水排水 r 動 取外 V 1 セ 方 ۴ w ・シ曲 向 = = Ŧ 何 努 何 = 肱 同 × V V Ŧí. 軸 モ 所 モ 運轉 間 重 1 月 歪 隙 力 --ヲ 1 ラ 六 檢 不可 許 ズ 日 查 叉 ス = 限 回 能 到 ス w 7 IJ 轉 1) 遊 决 機 漸 = 定 動 械 7 ŀ セ 浸 ス = テ數 七 3 水減 n りつ 程 -此 回 3 1 致 回 曲 v 命傷 モ 轉 肱 又案外重 セ 軸 ニア 水上 n = ラズ 兩 = 舷機 露 力 ラ ŀ 出 ズ其 認 共 セ 3 IJ 回 直 他外見上 依 ス テ 各 直 w 接合 ヲ 得 發

(二)翌日 (五月十七日)各開放終 y 檢 查 結 果 左 如 シ

ズ。 中 蕳 左舷機械各軸 鍔 間 ラ千分ノ三十三时 接合部 於 ケ n 鍔 ノ隙ヲ下方ニ有シ ŀ 鍔 ŀ 間 隙 差 又中間軸 前 後 曲 肱 1 推進 軸 鍔間 軸 鳄 = 間 テ 下 = 部 テ 2 = 千分 間 順等 + = 2 五. テ 时 差ヲ 推 力 認 軸 × F

(B)右舷機械 八各軸 接合部ニ 於ケル鍔 1. 鳕 1 ノ間 隙差 21 前後曲肱軸 ノ鍔 間一 テ下部ニ 千分 ガ五 十六时! 推 力軸

1 # 間 軸 鍔 間ニラ千分ノ二十五 叶ノ隙ヲ下方ニ有シ又中 間 軸小 推 進 軸 1 鍔間 _ テ下部二千分ノ十时ノ間

隙

7 有 セ "

(三)罐 Æ 前罐 七欠(七號罐)公 割 合ニ損害少ナ ク使用 狀 態 = 修 理 3 得 ~ 20

以上 機械及罐 シ狀況 = 鑑 低速力ニテ運轉 ス ルニ 差支ナ 牛 7 デ 28 修理 3/ 得 n ト鰤定ス。

機 關 部 修 理 方 針

-)前 罐 t 罐 號 罐缺)ヲ最大使用壓力百二十听ニ テ使用 3/ 得 n 樣 = ス n = 1.0
- (二)後罐 ハ艦 ノ動 搖 = 對シ轉覆セザ ル様 ス ルコ
- 三)兩舷主機械 ハ各第 及滑倉内部其ノ 他各 滑 動 部開 ŀ 放 檢 査 ノ上手入及修
- 四)右舷主機械 ハ特 = 曲 版軸承、 ノ偏心大 ナ n = 3 IJ 同 時二 各接合棒及偏心器帶輪ヲ 取 外 3/ 曲 肱 軸 承 偏心ヲ 成

理

ヲ

行

フ

=

~ 7 滅 ス n 3 1.0

Ti. 一六)豫備給水「タンク」五、六、七、及八番上部炭庫ヲ使用)蒸汽管排氣管疏 北 管給 水管及罐 氣吹用壓 搾空氣管 い豫定 ス n = ノ航 1

1

3

相當ノ設備ヲ新設ス

iv

=

海

=

必要ナ

iv

應急工

事.

7

施

ス

= 1.0

Ł)推進器翼端ノ屈曲 七 n モ ノハ出・ 來得 ル限リ 其 ノ屈 曲 部 ヲ 切 斷 ス N = ١ 0

水及污水排除装置工事

排

一〕主汚水吸入管及六时汚水吸入管共ニ甚シ 1 破損シ應急修理 ノ見込ナキョ以テ本諸管ニ 依 ラズ各區 劃獨立排 水

法ヲ行 ラ様 = ス w = 1

重底內 :ハ排 水法 ヲ設 ケ ザ in = 10

汽及排氣管 救難用唧 ラ導 筒 **介二號、** キ以テ夫々 + 號及十二號ヲ撤去シ其 ノ區割 ノ大排水 = 適 セ 2 1 他 4 w 1 救 = 難用喞筒 ŀ ヲ据置キ 本艦固有 罐二 テ使用 2 得 n

樣蒸

四)内底上汚水 ノ排除 = 1 車軸通路及曲 版坑內 ハ機械室 汚 水喞 筒 Ħ リノ直接吸入管ヲ以テシ後罐室 ハ同室装置

演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

註、

罐

1

成

績右

1

如

1

良

好

ナ

IJ

3/

=

3

IJ

前

編

=

已

=

記

也

IV

如

1

救

難

罐

21

六月

+

H

迄

=

全

部

撤

去

七 "

+

モ

1

1

認

メタ

助 給 水 喞 筒 及 灰放 射機 ヲ以テ V 前 罐室 1 後 罐 室 一装備 1 灰 放 射 機 ヲ 以 テ ス

演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事

Ti. 一)救難 用 罐 1 本 艦 固 有 , 罐 復 舊 セ 110 全部 撤 去 ス w 7 10

I 豫 定 期 B

回 航 爲 × 絕 對 = 必要ナ in 工事 シ外 21 嚴 = 施 行 セ ザ n = J. 1 V 竣 I 一期ヲ 六六月二 一十五 H 1 豫定 ス

修理工事ノ概要〈武運轉施行迄ノ工事〉

一)前罐七 關部 修 罐(七號罐缺)ハ何 理 方針 = 基キ六月二十一日 V モ 良好ノ成績ヲ以テ使用壓力百二十听 第一 回試運轉施行迄 = 實施 セ 12 I = 對 事 ス 1 IV 主 水壓 -)iv 試驗 モ 1 ヲ ヲ 終 列 學 V 7 ス V 110 左 1 如 シ

一一各罐 月二十 四 共 H 罐 臺 3 y 位 一六月七 置 = 歪 ヲ 日 生 = 日 20 リ焚試及安全拿 文 n 爲 メ火床ノ棧受臺 調整 ラ行 <u>ハ</u> ^ 时 IV 乃 = 滿 至 = 足 时 ナ w 四 結 分 果ヲ 三 得 切 タリの y 取 y 大床 面 ヨアエ V タ 12 後五

(三)前 記 七 罐 中八號 90 罐 21 罐臺 1 狂 E 最 毛 甚 タ V 7 從 テ 火床 棧 受臺 切 斷 æ 最 老 甚 V 力 y 3 力 使 用 J. 何 等 差 支 ナ

火 床 棧受臺 頂 部 切 覽表

向	向	向	向	
テ	ラ	ラ	テ	
左	左	右	右	
後	ifi	後	前	
11/2	11/8	1	11/8	第一號罐
11/8	11/4	11/4	11/4	第二號罐
3/4	11/4	5/8	13/8	第三號罐
11/4	2	15/8	21/4	第四號罐
11/4	21/4	1	2	第五號罐
1	2	11/4	13/4	第六號罐
$2^{1/2}$	23/4	31/4	13/4	第八號罐

四

一)假

設豫備

給水裝置

四二

n

=

1

0

在 w 來 7 以テ全然使用スルコト 豫備 給 水タンク」い何レ 能 モ ズ 外 大 テ上部炭庫五、六、七、八番ヲ豫備給水「 底 破 損 3 且 ッ内外底板 ハ殆ンド 相接觸セ タンク」ト 2 計 y = 屈 3 デ 曲 使用 3/ 常 ス iv 潮 = 水 1 世 1 3

左

+

記 要 領 3 ŋ 諸管 一裝置 7 改 造急設 セ ッ。

A)各舷 側 假 設豫備給 水 タン ク」間 ニ各連絡管ヲ設ケタリの

B)假設豫備給 水 タンク」上主給水「タン ・ク」間 = 連 絡管 ラ設ケ H. 一ツ補助 抽 氣 喞 筒 ŀ モ 連 絡 七 V メ以テ給 水 昇

降

=

充

"

C)主復 水器 疏 水 が補 助 復 水器 1 = = 排 出 ス n 事 ŀ セリの 從來 ハ二重 底內豫備 給水 次 V 7 = E 導 丰 T y X

D

給

水吸

入管

ハ主給・

水

タンク」ノミ

ŀ

接

續シ

豫備

給

水

タン

クート

27

接續

セ

3/

×

ズ

而

3

テ

吐

出

管

在

來

1

モ

>

セ

りつ

E 7 前 蒸汽管疏 後罐 室間 水 急設管 テ 遮斷 シ使用 = 3 IJ ス N 助 復 7 水器 1 1 3 = 以テ 導 ケ 前 IJ 0 罐 1 各 罐 = 何 v 給 水 喞 筒 = テ 毛 給 水 3/ 得 72 2 ŀ

補

註 氣管疏 水 25 在 來 管裝置 ラを 理 ノ上使用 セ y_o

F 罐 水戾管 ハ蛇管接合ニ 3 IJ 前 罐室給 水喞 筒吸 入身筐 = 接 續 3 同 喞 筒 = 3 ŋ 1-甲 板 排 出 1 × w 後 更 = 蛇

Ŧī.)後罐 ヲ Ü シテ假設 変 ヲ 使用 セ 豫 サ 備 n 給 結 水 果同 タン 室 クレニ 內 給 水喞 導 7 筒 = 及灰 1 1 放 七 射器 y o 用 喞筒 ラ左ノ 如 ク「ビ w ヂ 响 筒

(A)主給水唧 筒 船 體損害最 E 大 + in 百二十 Ŧi. 番隔 壁 = 沿 フテ据付 ケア IJ 2 = 3 IJ 同 隔 壁 補 强 材 特 ノ為

=

利

用

セ

70

外 2 使 用 七 ザ IV = ŀ ŀ セ リ。

B " 此 補 外 助 給 前 水 喞 罐 前 筒 部 20 所在 何 V モ E 後 罐 in デー 室 前 弇 部 筐 F ŀ n 接續シ以テ七十三番隔壁 ヂ 排 出 用 ٢ 3 テ改 造管 装 3 置 y 7 前 設 方諸 5 Ш 汉 劃 y 丽 排 2 テ フト 右舷 = 使 用 補 ス 助 n 給 7 水 1 喞 ŀ 筒 七

C 灰 放 射器 用 喞 筒 2 何 v 毛 前 罐 室 及 後 罐室 ノービル ヂ 上排除 用 = 供 ス n = ŀ ŀ 3 前 罐 室 E" n デーニ 限リ 舷

喞 筒 = テ モ 兩舷 1 E IV チー 7 排除 3/ 得 n = 1 1 せ 70

室 內 於ケ iv 蒸汽主管 十五、 十六號 罐 平 均 管 = テ 押 上ゲラ V 損害多大ニ V テ使用 不 可 能

ŀ

ナ

IJ

因 テ

罐 室 3 IJ ノ蒸汽主管二本丈ケ ハ特製管ヲ以テ取 換 タリの

註 後 罐 使用 也 715 ルニ 依 リ後罐室蒸汽主管二本ハ其 儘 ŀ 3 工事 7 施 サズ。

同 樣 他 蒸汽主 管二 本 破 損 七 w 二日 y 其 內 前 罐 室 3 IJ ノ蒸汽主管二本 1 左 如 ク工事 ヲ

甲

水壓力二百

四四

+

听ヲ五分間以上

一持續

ス

w

1

牛

1

變形

部

1

點

3

IJ

僅

力

=

水滴

カ現

25

w

w

位

此

少

漏

水

各

部

異

施

七

y

汉 T w IJ 因 モ テ同 尚 亦 安 管 全ノ 壓 潰 13 部 * ヲ 全 其 部 部 r セチ = 帶 IJ 鐵 7 2 施 瓦斯 セ リ 鍛 接 法 = 3 IJ 塡 充 3 汉 w 後 更 = 水 壓試驗 7 施行 良 好 成 績 ヲ

乙)管 狀 ナ 力 ハニ百 y 2 = 74 + 3 ŋ 听 别 = 一テ水壓 = 應急修 試驗 理ヲ 施 施 行 サ 七 ズ IV 其儘使 結 果 良 用 好 ス -n IJ = 3 ٠ = ŀ 3 セ 1) 更二 りつ = 一百六 十听迄水壓カラ 上昇 セ

Ti. 罐 安全弇蒸汽捨管ノ 回 メル 所 全部 打 出シ ノ上蠟付ヲ行 ヘリの

t 同 金 樣 : 舷共主 7 + 施 ラ サ 3/ 膨 y 加 減 脹 3 接手 弇 次 側蒸氣主管膨脹 × 此 = ノ二弇 鎕製 7 連 歪 接手 絡 × n ス 管 n 2 百二十 切 膨脹 V ヲ挿 接手 Ti. 入シ 番隔 破 損 應急修 3 壁 叉主 後 罐 理 加 室機 ヲ 減拿 施行 械 = 室 セ E 間 y o 裂罅ヲ生ゼ 隔 壁 取 IV 付 = 中 3 間 IJ 弇 主 1 加 主 減 加 弇 減 弇 = 鎕製 位

八)主機械第 外側 右舷 中 壓 接 外 續 側 控 右舷 條 承 第 左舷 底壓中 第 側 底 壓筩內側 E 1 總 1 モ テ鑵ヲ以テ新規 ノハ 當 金ヲ 施 製造換裝 3 其 他 セ 破 " 損 セ w 左舷 中壓筩 內 側 左 底

九 底 破 テ使用 損 械 狀 ŀ ス n 態 中 -央隔壁 7 3 得策 ŋ 考 間 ナリ 7 in 控條 ŀ = 考 更 1 工事 全 主機 部 ヲ施 械 破 損 ノ舷 セリの = 付 外側 キ夫 = 々應急修 平 控條 ラ設 理 7 ケ以テ船體完全修 施 セ y Mi 3 テ中央隔 理 施行 壁 强 至 度 w 安全 迄 間 ナ ラ 臨設控條 ズ 且 ッ外

A 一右舷 曲 版軸 中心線 八主軸承中心線下合 セ ズ即チ第一 主軸 承二於テ軸面 ハ裏金ノ右舷側 = 接 3 第 八主 軸

承

〇)主機械開放檢查概

要

- 時 於 **ルラ左舷** = 第 八主軸 側 = 接觸シ 承 = 於テ 其 1 = ノ反對側 下方 二千 ニテ第 分 1 四 主 + 軸 承 时 = 間 ハ千分ノ八吋、第八主軸 隙ヲ 有 ス 承 = ハ千分ノ十 时 間 隙 有
- B)兩 或 舷 1 1 機 共滑動 間 軸 承 部腐蝕 1 冠 = 對 1 程度 七 w 部 ٠٠ 曲 分等 版軸 <u>ハ</u> 推 力軸 面 = 腐蝕シ其深度干分 中 間 軸 及滑頭栓 1 ノ六 何 v 时 モ 浸 ョリ千分 水中裏金 1 + = 时 接 = 觸 及 セ サリ ~ n モ 3 1 部 T 分 IJ 即 0 チ 揷
- C E)兩舷 1 認 機 共第 × ラ n 內 n 部 Æ 21 概 未 ダ完全ナ 2 テ良好 ル検査ヲ 狀 態 = 行 r フニ 1) 2 至ラズの Æ 高壓滑拿 發錆甚シ 7 又中壓 低壓 滑 弇 1 割 合 = 良態 7 n
- (D)兩舷機共吸鍔棒滑拿 棒リ 1 ク」装置 一發停軸
- E)兩 舷機 共滑 坐 20 何 v モ 滑 動 面 1 約 Ti. 偏心器 割 1 腐蝕シ 深度最 1 槪 シ Æ 甚 テ良好 3 丰 + 部 " = ァ テハチ 分 1 +

9

时位

=

及

~

N

所

ア

ŋ

Ilii 2 ラ滑 金 前 後 進 面共 良態 = r 90

一一)主機械 運 動 部 修 理 調 整

(A)右舷第八主軸 承 下部裏金 ノ背部 厚 サチ子分 ノ四 + 时 當 出金ヲ施 3 其 他 主 承 裏 金

1

何

V

モ

當

IJ

1

程

度

- 應ジ摺合セ調整ラ行 ~り0
- (B)兩舷機共各筩滑 頭 栓 1 腐蝕 部ヲ 擦 IJ 落 セ 1) 0
- (C)曲 肱栓腐蝕部 1 目 下鑪仕上 ガ 中 ナ IV 屯 割 合 -H 數 7 要シ 全部完全ナ w 仕 Ŀ. 7 終 w = _ 倘 亦 週 間 7 要
- w + ランの
- D 推 力軸 及 4 間 軸 腐蝕 部 擦 リ 落 也 IJ
- E)滑坐腐 蝕 面 1 到 底完全 ナ w 滑 動 面 ヲ 得 難 + モ 單 = 輕 石 磨 # 7 行 9

0

(F)其外中低壓 滑身 7 除 ケ w 總 テ , 滑 動 部 相當 三調 整手 入ヲ行へリ。

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就

二)試運轉ヲ

別

チ

テ

次

種ト

ス

理工事二就

適 力軸 テ然 部 切 大要 7 ŀ 1 狀 力 中 n 右 E 判 況吟味及滑動 間 断ヲ下 翼端切斷 軸 1 如ク工事 7 絕 縁シ ス 或 1 約七十回轉以內ノ速度 進 部 屈 助 挑 摺 七 曲 タラシメン 合セ セ N w 付兎モ 推進器ヲ以テ安全ニ ヲ 行 ハン 1 角モ ス ガ爲 īſīj 來 V = テー テ * ル六月二 船體 先ヅ 時 一繼續運 部工事: 間 各部 + 摺合 --轉 竣 復 H セ 運轉ラ Ī = 3/ 舊 得 2 セ 主蒸氣管其 Jt. n 110 嚴密 行 速力ヲ確 左記次第 ヒ以テ今後ニ ナ n 港外試 實 書 他 關 = = 判斷 依 聯 装置 施行 リ繋 運 韓ヲ 七 ノ汽密 スベ 留運轉ヲ 1 行 1 キ工事 ス 4 船 檢 施 查、 底 屈 行 折多樣 對 主 終 機 3/ 最 テ推 械 E 運

一回主機械試運轉次第書(大正四年六月二十一日施行豫定)

一)試 摺合 目 的 セヲ 運 F 轉 3/ 行 左 = 3 E 方法ニ 以テ本運轉 リ主蒸汽管其 因リ之ヲ行フ。 結了後 他 關聯 ノ短時 装置 H 1 間 氣 = 密 施工ス 檢查及主機械 ~ キエ 事. 發停並 -對シ 最 = 運動 E 適切 部 + ノ狀 n 判 態ヲ 断ヲ 仔 下 細 ス 吟味 1 助 13 併 ラ テ 滑 3/ Z 動

w

部

(イ)繋留運轉

(口)摺合運轉

(三)繫留 運 轉 ... 現覊 泊 ノ儘 錨 索等 = 不當 1 緊强 7 加 # w 範 圍 内 = デ 徐 4 = 前 後 進 = 運轉 ス w Æ ŀ スの

四)繋留 加加 3/ 運轉 各 虒 結了後 加 [11] 轉 推力軸 數 7 各 Ti. 1 分 中 間宛持續シ 間 軸 ŀ ノ金男 約 ノ接手ヲ 七十 B 絕緣 轉 -達 3 セ 前 18 進 = ラ 時 間半 最 小回 連 [續運轉 轉 數 7 Ŧi. 3/ 以テ各 分 間 繼續 回 轉數 運轉 = 3/ 爾後七 對 ス n 振 P

大小 ヲ 認 定 3/ 以テ 回 航 際、 = 於 ケ ル参 考二 供 ス w モ 1 1 ス

摺合 後進 運轉 七 運 轉 1 中 際 必要 單 = = 應 徐 30 4 指 = 壓 回 轉 圖 7 ヲ 撮 增 取 加 ス 3 七 w æ + 1 回 1 轉 スの == 逹 V 久 n 後 約十 分間運轉 スルモ ノト

(五)使用罐數四罐(各舷二罐宛)トス。

(六)當日點火

1

罐

1

點

火時

∄

リ主塞止弇ヲ微

開シ置・

キ以テ主蒸氣管系及主機械ヲ可

成徐々二煖機使用壓力百

四六

備

考、

繋留

運

轉

開

始

時

刻

比

較

的

遲

*

21

單

=

高

潮

時

ヲ

選

E

以

ラ

推

進

器

=

依リ

攪

亂

セ

n

濁

水

ガ

主復

水器

內

入

12

同

右

終

7

7

試 運轉 關 ス n 豫 定 時 刻 左 如

+

听

達

七

110

補

助

罐

1.

併

用

7.

n

モ

1

1

ス

罐 點

水

午 前 九

時

同 +

時

午 後

华

0 時

同

時

同

同

摺合

運

轉

始

1

紫留

運

轉

始

x

同

右

併

用

同

右

終

四 時 华 時

ヲ 回 成 避 ケ 1 1. 企 テ 3/ 1 777 = 3/ テ 他 = 深 + 理 由 ア IJ 3 -7 ラ ズ

第 三試運 轉中 0 狀況

皆 繁 ケ 無 所 留 僅 2 運 少ノ漏汽ア テ各舷高 轉 約 = ; 壓 + IJ 吸 回 鍔 轉 X w 棒 = 塡 ラ モ [n] 坐 前 3 後 V E 1) 進 其程 僅 = 數 カノ 度輕微 回發停シ 漏汽ア -左 IJ IJ 2 3/ 舷 ŀ 機 = 後 S 3 1) IJ 罐 其 室 始メ各十 儘 = 於 運 轉ヲ ケ 五. n 繼 主蒸汽管 分 間 續 宛運 七 リー 接 手 ス 起 3 1) 動 右 操 舷 縱 自 = 在 か = 所左 振 動 舷 毛 亦

B)繋留 **分終了引續** 午後二時二十 運轉終了 + 分回 後 進 後 轉數 直 = テナ チ = ヲ 四 分 兩 間 舷 + 七十 推 九 = 力 整定 回 軸 轉 1 = 3/ 中 テ運轉 爾 間 後次第 軸 ŀ 3/ 1 同 接 -四 回 手 時三 轉 7 數ヲ 絕 7 緣 增 Ŧî. 3/ 加 分 午 無 シ七十 後二 心學終了 時 乃至七十 \exists y ス 兩 舷 四 機 回 共 轉 同 時 = テ = 運轉 摺 合 3/ 運 同 轉 四 開]時二十 始 ス

渾 轉 1 狀 況 艞 3/ テ良好 = 3/ ラ前 後 進 共振 動 極 × ラ 少 ナ 7 左 = 列 記 ス W 外 異 狀 ヲ 認 メズロ

兩 ヲ終 舷共 推 in 7 力 デ灌 軸 後 水 部 ヲ 軸 此 承 2 運 w 程 轉 度 1 = 初 至 期 ラズ 擦 熱ヲ Mi 3/ 生 テ 兩 to 軸 w 承 = 1 H 中 ij 左舷 灌 水 右舷ニ 施 3/ 約 比 三十 3/ 稍 分間 ヤ 擦熱烈 3/ テ 擦 3 力 y 漸 3 次 モ -E" 1 w 認 モ

軍艦淺間

ノ離礁並應急修理工事

二就テ

四

(二)兩舷共第八主軸 者共擦熱減ゼ w モ 承 運轉ヲ終 運轉始 ルル迄灌 × 3 リニナ 水 ラ止 A 分乃至四 程度 一十分 至 ラ シテ擦 ズ 熱ヲ生 セ w = 3 1) 灌 水 ラ施 3/ 約 時 間 テ兩

(三)右舷第六主軸受 10 IV モ 運轉ヲ 終 ル迄灌水ヲ繼續 ハ運轉開 始 後 セ りつ 時 間 四 -分 ニテ擦熱ヲ生 ゼ in = 3 y 灌 水 ヲ施 約 一 ·分間 テ擦熱大 減

四)右舷後部低壓 轉開 增 始後二十 n = ŀ 分間 ナ ク無事結了セ ŋ = 2 テ擦熱ヲ生ジタル ク」引手ト「リンク」トノ接合栓 ッ Æ 其程度些少ニ ケ所及同 2 テ即 かき浸水セ リン ク」引手 in 布片ラ 1 以テ冷 發停軸 却法ヲ行ヒ運轉終了迄 1 接合栓 二ヶ所 運

C 3 滑 置)要之ニ 頭、 ハ良 牛 1 懸 曲 隔 滑 好 肱 推 ア 坐、 軸 狀 w H カ 軸後部 ~ 曲 態 心 線 牛 胧 = 栓 7 = IJ 偏 推 3 軸 リ今回 ŀ 心 力 承 認 軸 = ノ擦熱ハ摺合 メラ 起 承 因 ノ摺合運 航 v ス 海 此 n 1 ノ儘 モ 轉 際、 運轉ニ ノト 1 = 異 摺合運轉 テ 認 狀 モ 有 4 大ナ リ勝 ナ w ヲ 力 y 1 IV 至 1 發生馬· 當 兩場合ヲ考フ 3 = ŀ ŀ ナリ ニシ 放ヲ以 カニ 1 テ深ク憂フルニ ス 堪ユルナラン〇 、筩、吸鍔、滑弇、滑弇筐、 ルト テ未 が完全 牛 1 其 足ラザ ノ滑 調 整 動 IV サ 面 v = モ 偏心器及 於ケ 主 次 IJ 軸 1 w 承 受壓力 信 IJ 擦熱 ズ n ヲ得 クレ 甚 n 裝 モ

A.

良 船 w 好 體 21 加 抵 論曲 狀 抗 態 增 = 大 肱 點蝕 7 七 n n 部 爲 モ メ受壓・ ŀ 2 大ニ 認 力大 × ラ I 事上 -增 加 1 注 ス 意ヲ要シ ~ 丰 推力軸 叉滑 承 坐面 1. 共 腐蝕部 運 轉上至大 比 較的 注 良滑 意ヲ 要 面 ス 1 ~ ナ 7 V Thi IV 3/ E テ 航 滑 海 頭 = 際、 割 シテ 合

摺合 ガ今回 勿 論 運轉中主 + 成 10 績 機 モ 參考 械 層其 摩擦 次 メ馬 抵 ノ差大ナリ之レ 抗ヲ知ラ カヲ算出 2 ガ 七 爲指 右舷 w = 右 曲 壓 圖ヲ 肱軸中心線ノ 舷 撮取 從 來 ŀ 七 テ IV 偏心大ナ ガ E 適當 左舷 指 iv 北 ガ為ニ 壓器 3/ 同 發 起 條 回 因 ヲ 轉 有 ス 數 w セ = 所 對 サ 最 ス in Æ IV 爲 多キ 發生 Œ 確 モ 馬 ヲ 力大 期 1 ŀ 認 + ŋ

第 回試運轉ノ成績

船

(三)曲肱栓

ノ鑢仕上ゲ未濟

ノモノハ(右舷高壓丈ケ仕上ゲ濟)仕上ゲラ行フコ

1 ヲモ

充分ニ調

整

ス

IV

=

如

海 ケ月間 ス 六月二十一 ルガ如キ長途ノ運轉ニモ ル工事ヲ行ハントス○ ニ左記二項ノ目的ヲ達 H 施行繫留及摺合運轉 堪へ得ベシトノ見込ヲ有 セ ンガ爲メ主機械滑動部 ノ成績概シテ良好 ス -リ即 ルニ至レリ而シラ更ニ今後船體部工事竣工ニ ノ摺合調整及第七號罐復舊工事其ノ他重要ナ チ機關 21 直 接本 邦ニ 經濟速力附近 低 速力ヲ以 ル補 至 ルマ 助 デ約 ラ航

此 目的ヲ達センガ爲メ今後ノ事業方針ヲ左 ノ如ク定ムの

要ナ

第一回試運轉後ノ機關部修理方針

一)推力軸 々承ハ前後部共調整 スル 3 ŀ o

(二)主軸承 ハ擦熱 IV ŧ ノヲ調 查 シ要スレバ 他 擦熱セ ザリシ Æ

(四)「リンク」装置一 部ヲ調 整 ス w = ١ 0

Ŧi.)右舷高壓吸鍔棒衛帶 調

(七)蒸汽管接手漏汽部衛帶

(六)主送水機械

ハ充分ナル

修理調

整ヲ行フコ

八)第七號罐復舊工事

回試運轉後ノ修理工事概要

(六月二十二日ョリ七月二十五 H 7 、デノエ 事)

記修理方針二基キ七月二十五日迄二(第二回二豫定セ ル竣工期日)實施セル工事ノ主ナルモ ノヲ列擧スレ NE

兩般推力軸々承前後部共分解調整。

(二)右舷第八主軸承分解下部裏金ノ背部 = 厚サ千分ノ十二时 ノ當金ヲ施セリ乃チ第 回 試運轉前 = 施 ル當金千

四九

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

理

調整ヲ

行

りつ

工事

分ノ四十时ヲ千分ノ五十二时ニ増セリ

(三)左舷第八主軸承分解下部裏金ノ背ニ厚サ千分ノ四十时ノ當金ヲ施セリ。

(四)右舷第六主軸承分解調整。

(五)左舷第一低壓「リンク」調整。

六)兩舷機曲肱栓 ノ腐融部擦り落シ仕上ニハ鎕金ニテ裏金型ヲ特製シ充分ナル仕上ゲヲ行フ。

七)右舷主送水機 w ガ運轉中自然属車 軸承ヲ新設 シ以テ車軸ノ軸線 械 側 21 扇 ニ片寄ラン 車十一 扇車 主室間 三沿 ŀ ス w 1V 遊隊過大ナ 1 推力ヲ受ケシ 傾向ヲ防 ŋ 止 3 セ 2. 2 = w ガ 3 = A IJ 扇車ニ メ屍 þ 1 セ 車 軸 1) 厚サ八分ノ三时 其ノ他勢車 軸端二 ッツ ノ取附及軸系等 ガ ノ當金ヲ施 ナ 2. 110 1 テ 3/ 1 同 = モ 時 適當 7 装備 曲 肱 修

八)救難喞筒第三、 フルタメ後部彈藥通路ニ 四、 五、 一移轉セ 八號ヲ夫々第 " =; 四、 罐室上 ガノ 彈藥通路 = 叉一 號喞筒 ハ後部浸水區

備

右 ノ外蒸汽管接手衛帶換裝給水吐 # 管漏 水部ヲ鍍鑄物 管 ニテ換 裝スル等諸種 ノ小工事ヲ行 ヘリ。

七月二十五日後ノ機關部修理方針

竣工期限更二八月中旬ニ延期トナルニ付今後ノ事業方針左ノ通リ定ム。

(一)第七號罐復舊工事。

且工 事ニ著手セルモ同罐下内底工事ノ爲メ中 止シ製罐 I ۱۷ 主 ŀ シラ船體部工 事 う助 力二 從事 3 京 リシ

日 後 リ更ニ 此 復舊工事 著手シー 週間 以內 三竣 I 七 3/ 4 N = F O

7 行 主軸承等主機 Ł 同 時 要 スレ 械 滑 バ調整ヲ行 動部 ノ主要部 フコ 10 シテ然 力モ 機械室内でメント 工事 ニョリ 汚損セラレ タル 部分

(三)右舷高壓吸鍔

棒衛帶調整○

5.

五 四)左舷主送 力程態第 心水機 一低壓リン 械 吸鍔 新製 ク」装置 フ上右 部 舷 調整〇 1 モ 1 ŀ 同 樣完全 ナ w 修 理

室 兩舷灰放 射器喞筒(目下「ピ ルヂ 响 筒 トシ テ使用 ノモ ノ)及機械室 施 兩舷 F ルデー 喞筒 = 小 修 理 7 施

7

ス

7

10

右 外 百二十 Ŧî. 番 隔 壁 補 强 1 爲 X 機械 室 兩 舷消 防 機 械 移轉及之 = 伴ァ管工事等ニ シテ何 V E 八月十 日 迄 = 竣工

2 w 7 ŀ 0

3

1.0

修理工 事ノ概要(二回試運轉施行マデ アノ工事

右記 修 理 方針二 基 キ八月十日施行第二回 試運轉前二施行 七 n 主ナ ル工事 7 列舉 ス v 110 左ノ如

一)第七號罐 修 理

(二)機械室内

セメント」工事

ノタメ汚損セ

n

=

3

IJ

各主軸承及曲肱栓裏金分解手入ヲ行フ第

主

軸

承

如

牛

殊

七月三十 H 1應急修 理 竣 I = 付假水壓試驗施行終 テ焚試及安全身調整ラ行 E 3 = 何 v E 結 果 良 好。

セ メント」ノ浸入甚シカリシ ニョリ充分ニ手入ヲ行へり。

(三)右舷高壓吸鍔棒衞帶解放摺合ヲ行 フつ

四)兩舷第一、第二、 低壓リン ク」い船底突キ上リノ影響ヲ受ケ多少ノ狂ヒヲ生 一ジ居レ iv = 3 IJ 何 モリンクー

引手 1. 發停軸接合部 = 四分 1 时宛前方或 1 後方 = 挿片ヲ 加 へ調 整 セ ッ

五)左舷主送 同 7 装備 時 = 曲 セ 肱軸 n 軸 一水機械い扇車 承 ガ運轉中自然扇車側 ラ新設 シ以 **卜扇車室間** ラ東軸 ニ片寄ラント 軸 ノ遊隊過大 線 = 沿 ~ w ス -推 IJ N ノ傾向ヲ防止 3 力ヲ受ク = 9 IJ 扇車 n 7 1. セ 兩 1 2 七 ガ 側 70 タメ扇車軸々端ニ「リグナムバイテー = 厚 サ合計約 三分 时 ノ當金ヲ施

近 鍔 3 3) ハ鑄鐵 破 損 製 七 y = 因テ多 シテ解放檢査 少 重 量 增 ノ際衞帶環溝下緣 加 ス n モ 止 4 ヲ 得 1 ズ鎕製鑄物 部缺損 七 ニテ n = 新製シ要部 ョリ豫備品 = ト換装セ ハ鍛鋼製嵌輪等ヲ挿入セ n = 是又眼付螺 用 Æ

用 Ł 汉 りつ

六)後罐室兩舷灰放射器喞筒(目下「ビ 其 他 曲 肱栓裹金新製滑頭栓 ハ新製ノモノヲ燒嵌シ尚ホ車軸中心線ノ調製等必要ノ工事ヲ行へリ。 ルザ」喞筒トシテ使用ノモノ)及機械室兩核 ビルザ」喞筒 1 總テ喞筒弇及弇

スの

然

力

Æ

所要ノ目的ヲ充分達スルモ

ノト認メタルニ因ル從テ本邦二於テ完全修理ノ際

坐摺合ヲ

行

E

倘

水

响子

ノ如キ摩粍甚シキ

æ

ノハ白色合金ヲ鑄込メリ是レ完全ナル修

理

ニア

ラ

ザ

n

毛

迅速

ニシテ

-

換装ス

~

+

E

7

y

七)「テルテー ル」使用 不 可 能 トナリシ = 3 ッ軸 室內中 間軸接手 ・二仕懸 シケヲ施 3/ 回轉方向 指 示 電燈ヲ機械室及艦

設 ケタリロ

工事右ノ 如ク進捗セリ依テ八月十日左記次第書ニョリ第二 回試運轉ヲ行フコ 1 1 也 y

第二回主機械運轉次第書(八月十日 施行

一)本運轉 外試運轉 ハ主機械各運動 對ス IV 準備 タラシムルヲ 部調整後ハ狀態良否ヲ確 月的 ŀ 2 左ノ 方法ニ メ併ラ滑動部ノ摺合セラ行と以テ八月十七日頃施行豫定ノ港 ョリ之ヲ行フ。

(二)試運轉ヲ別チ テ次ノニ 種 1 スロ

イ)摺合運轉

)繋留運轉

三)摺合運轉 推 力軸 1 11 間 軸ト 鸳 ノ接手ヲ絶 緣 3 前進 = 次第 = 轉數 ラ増 加 2 約 七十 P 轉 = 達 セ 210 時間

連續運轉 ス n Æ 1 F スの

摺合運轉中第一 前 項 (ノ運轉 終ラ 回 110 試運轉 徐 後 進 ノ際指壓圖 = 回轉ヲ増 ラ撮 加 取 3 七十 セ 2 時 回 轉 ŀ 同 = 達 回 轉數 3/ 久 w 1 時指壓圖ヲ撮 後數分間運轉 取 ス n ス w Æ E 1 ŀ 1 トスの スの

四)摺合運轉終ラバ推力軸

1

中

間軸

ŀ

ヲ

接續

シ覊

泊

ノ儘錯索等ニ不當ノ緊張ヲ與

ヘザ

n

範圍

ニテ徐々

=

前後進

五二

二)前記

ノ外何等故障ナク總テ次第書

通リ

施

行

セ

IJ

Mi

テ第

[11]

試

運

轉

比

較

ス

w

1

丰

働 作

頗

n

圓

滑

1

+

IJ

指

七

3/

4

w

Æ

ノト

認

五 = 關 ス ル豫定時 刻左 如 シ

合 運 轉 始

摺

午 前 八

時

午

前 + 時

右

同

繫

留

運

轉

始

午前

+

時

74

+

分

同

右

IE.

第二回試運轉中ノ狀況

力輔ヲ上下ニ極メテ少シク遊動)右舷第四 五 主軸承ハ 少シ ク擦熱 ノ傾 [4] メタリ。 アリ 同第 八 主 軸承 擦熱セ ザ n モ 働 作稍 面 白 力 ラズ 爲 头 = 推

ヨリ 算出 セ n 馬 カラ比較セ n = 摩擦抵 抗 æ 亦 减 せ y 0

第二回試運轉後開放檢查狀況

二一方舷第八主軸承)右舷第四、 ル當金千分 五 ノ五十二时ヲ五 六主軸承分解檢查 ハ特製計器ニ 十八 依 リ詳 时 ス裏金ノ當リ = 增 細 加 = 調査 セ 1) 0 V 下 2 部裏金 少シ ク油 ノ背部 道 埋 = 厚 7 サ千分ノ六时 v n 所 7 y 3/ ノ當金ヲ増 モ 甚 3 力 ラ セ ズ 摺合復 9 即チ已 舊

附記、 前二項 ノ外 ハ更ニ異狀ナ ガ IJ 2 = 3 IJ 解 放 セ べの

放檢查部調整復舊終リ八月十九日 港外試運轉成績 八八月二十 船體部工事モ 一沖二於テ施に 全部竣工 2 同二十 H 港外試運轉ラ行フコ

ŀ

-

ナ

v

yo

試運轉方案觀 測 檢視部署其他當日 狀況 1 前 偏 審 力 ナ in = 3 IJ 略 V 此處 ニハ専ラ機關 關 ス w 成 績 ラ記 ス

Æ ノトスの

軍艦淺間 ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

演

認

ナ

7

直

接本

邦

回

航

3 得

w

=

ŀ

確

五四

(二)當日 最 大 回 「轉數五· -1-六回轉 ナリ V E 機 關 1 倘 水 多 數 13 轉 數 テ運轉 3/ 得 w = ŀ 確 力 + ŋ 認 力

應急修 同 ガ 時 試 高 運轉 = 充 2 理 n 分 ŀ = ナ 結 3 y テ 果 P 水 艦 7 = 得 切 3 外 ~ y リ實際發生 底 ヲ當 7 = 爲 施 メニ 金 七 ノ前 w 長途 箱形 馬 後部 力 當金 1 航 大 施 差 ノ横 海 ス 7 = 對 丰 3 斷 3 1-3 面 盆ス 7 y = 受ク 得 考 n in 7 所大ナ w J. N 七 1 直 丰 衝 10 抵抗 n 抵 1 差 ~ 抗 カヲ算出 一支ナ 減 3 ŀ ジ從テ炭費ヲ 信 + 限 ズ 2 y 坐 確前 箱 形當 減少 ノ實馬 金ノ ス 橫 力 IV ŀ 斷 = 共 tin 加 積 算 經濟 ヲ セ 減 IV 速 實馬 ズ 力 n

١

豫定港ニ於テ本邦回航前ニ行フベキ機關部工

)離 礁後 E IJ 沿革

ヲ行 機關 充 也 直 " 施 認 分 = w チ = 行 E Z ナ 從 モ 層 應急修 事 其 五 12 3/ 厚 後引 月 = 其 月 3/ 味ヲ 良 -至 成 頗 八 成績ヲ 績 續 H 理 H V w 殘存 更 離礁 多 1) 良 7 牛 好二 精 施 數 = Imi 學 第一 也 查 3 後 3/ 運轉 7 時 畫 テ 3/ 3/ 1 其後 夜防 結 n 回 テ = H 緊 直 ョリ 果主 = = 留 船體 ŀ 接 亘 適 水排 運轉ヲ 比較的 ヲ 本 機 IJ ス 運轉 得更二八月二十三日 邦 械 工事 w 水 p 21 行 經 短時 特 竣 如 努 セ メ五 ٤ 濟 定 何 I w 盆 期 速 修 H = 7 力附 々良好 調 限 モ 理 月 間 係 延 後 查 + 期 近 = 七 六 1 1 應急修 1 ラ 年 1 -日 3 成績ヲ得次デ八月二十 伴 低 ズ 月 = = 速カラ 當 リ九月 滑 至 4 長 完 理 動 力 時 IJ 全 7 ラ 部 短 獑 U. 24 修 距 ズ 終 17 浸 H 理 ラ 狀 H. 離 N 航 = = 態 ツ 水 至ル 場合ヲ 某港 良好 昨春以來 減 海 1 7 ス 3 北 得 w 曲 = V E 日 考 ガ 即 V デ 肱 練習 運轉 回 慮 如 テ 軸 チ六月二 主 航 船 牛 3/ 水 中 長 航 體 ツ 軸 E 3/ 何等故障 ツ 途 I 承 海 得 -事 + 裏金白色合 出 1 露 = w 運 引 竣 來 = 出 轉 H 續 I 得 ŀ セ ナ 後 第 丰 25 IJ w = 今 因 1 丈 翌 屯 頗 港 回 テ機 堪 P 金 日 一繫留 修 直 iv 戰役行 試運轉 得 關 理 如 良 運 决 調 丰 ~ 態 3 定

(二)大要右 1 如 狀 態 アリ且 ツ豫 テ懸念ヲ 有 屯 3 主機械 中 心線 悪影響ヲ 來 タス ナ ラ 2 ŀ 想 像 セ ラ V

力

y

3

毛

ナ

取 此 メト ナ V 12 = 付本邦 スの ニ向ケ出發前ニ 施行スベキ機闘工事 ハ皆無ナリ因う造機部残留職工ハ 主 h

V

テ造船工

本邦ニ向ケ出發後某洋中島迄

事

從

事

セ

3/

4

w

モ

1 ŀ

右舷第一 一低壓曲 肱栓 切

云 着 日 メ 午前 ノニ日 17 大正 w ヲ 74 豫 年十 定 故 前迄運轉狀態概 障 地 點 ·月二十三日愈 = 初 投錨直 V リト 3/ = V 推力鍔 冷本邦 爾後次第 テ良好ナリシガ五 ノ調整ニ着手 = 三右舷 向ケ出港原速回轉六十、 機械 H 午 ノ動 セ 12 前 = 作 五. 第二 諸 時右舷機械第八主軸承帶熱 所不良ト 一低壓 六十三ニテ某洋中島 曲版 + リシ 栓 小熊方腕 ガ兎モ 角 ŀ モ ノ傾向ヲ生ジ 間 運 直 轉ヲ 航 切 ス 斷 + 繼續 せ in 月 小 7 3/ Ŧi. " 1 發 H 該 見 -1-灌 七 水 月 7 13 島 七 始

右舷 第二低壓曲肱栓切斷前ノ來歷概

此 離 礁 後曲版 曲 版栓 栓 ハ坐礁中上 何レ 老 腐蝕 部思案點 セ w -3 リ約九十度右舷 3 IJ 充分腐蝕 面ヲ 側 摺 = 倒 リ落 v V B 尚 n 位置 亦 特 殊 = r 型 1) 3/ 7 作 モ ツ優 1 + " 秀 ナ

w

職

I.

四

名

3/

- H 間 毛 = + 亘 リ眞圓 n = 3 y IJ = 仕上 内含的裂疵ガ其當時已ニ存在セシャ否ヤハ 七 V 3 京 IV 毛 1 3/ ラ即 チ斯 in 長 時 E 知レ 1 間 ザル 精細 Æ ナ 何等表面 n 仕事中 = 肉眼ヲ以テ識 モ何等損所ヲ 一發見シ 别 3/ 得 得 12 裂 ザ ŋ
- (三)「サンバルトロ 九月 四 H 豫定港二入港迄航程千五百浬何等異狀 メニかケル應急修理終リ八月二十三日同港發回轉五十二 7 7 運轉繼續セ 90 速力六海里弱約千馬力(兩舷合計)
- 四)豫定港淀泊中へ 同 港 回港中 ノ狀態良好 ナリ 3 = 3 ŋ 特 記 ス ~ キ機關 部工 事 ラ施行
- 五)今回八二千五百浬續航 X フ今此航海 中 運轉狀 況 シ投錨後曲肱栓切 H 記 的 記 ス 斷ヲ發見 v. 110 左 如 セ シ n E 1 = 3/ テ而 Ŧ 投 一錯二日前迄ハ運轉狀態良好

9

3/

-	
л	
-	
1	

司同同同同同	同 同	同同同	同同同	同同	同同	同同大正四年	年
上 月	十一月					十十十月月月	月
七	关 目					五十二日日	· 日
F 同午同同午 前 後 〇	同 午 前	同同同四四	午同同後二一一	同同	同午前		時
年前 九—〇 同一〇—〇 同一〇—三〇 年後 ——〇	八一〇	五 一 〇 〇	五〇〇〇	九一〇	六一〇		刻
高矮由広寮県・見食するとも遺産とよう。 引きててなるようによるな機械第七、八主軸承中胚偏心器、高、中、歴曲版、高医滑座前日ニ引續を左舷機械の右舷機械の響減少・補フタメ回轉六五ニ増加スを放機械が方 、回轉増加ニ付中壓偏心器流水・再始ス中壓偏心器灌水・中止ス中壓偏心器灌水・中止ス中壓偏心器灌水・中止ス中壓偏心器灌水・中止ストリー・ (1) (1) (1) (1) (2) (3) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4	常熟ヲ幾分緩和セントス常熟ヲ幾分緩和セントスを対テ之ヲ實施シ此ノ回轉減少ニ依リテ「リンク」滑金増熱ノ傾キアルヲ認ム而シテ増温ノ傾向最モ多キ高壓滑座高壓にリンク」滑金増熱ノ傾キアルヲ認ム而シテ増温ノ傾向最モ多キ高壓滑座高壓高壓第一低壓滑座下部前方及上部後方漸次常熱増進ノ傾向アリ又高壓、中壓高壓第一低壓滑座下部前方及上部後方漸次常熱増進ノ傾向アリ又高壓、中壓高壓第一低壓滑座下部前方及上部後方漸次常熱増進ノ傾向アリ又高壓、中壓高壓第一低壓滑座下部前方及上部後方漸次常熱増進ノ傾向アリ又高壓、中壓	生ズルヲ以テ灌水部ハ總テ其儘癥續スルコトヽセリ第七、八主軸承中壓偏心器帶熱ノ傾向滅却セズ試ニ灌水ヲ中止セバ直ニ增溫推力軸第一、二、三、馬蹄少シク浮キ上リタルか如ク認メラル中壓偏心器ニ灌水ヲ行フ	中壓偏心器漸次帶熱ノ傾向アリ滑動部ニ於ケル觸接ノ狀況ヨリ判斷スルニ曲肱少シク前方ニ推移セルモノト高、中第一低壓曲肱帶熱ノ傾向アリ	高、中第一低壓滑座帶熱ノ傾向アリ第七主軸承帶熱ノ傾向アリ為念灌水ヲ行フ	帶熱増進ニ付灌水ヲ増加ス右舷機械第八主軸承帶熱ノ傾向アリ少量ノ灌水ヲ行フ	十一月五日迄運轉狀態概シテ良好増加スニ、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回轉六三、三回車	記事

少

就

牛

水

7

滅

ズ

回

轉

36.

Æ.

芝

復

丽

テ

左舷機械

回

轉六

五.

モ肱向運 錨 周栓ヲ中 圍卜生右 後ジ舷 約方々主 四腕ル機 分トニ械 ノ付軸 一間推前 ==力方 灌 ル斷整分 ヲセニノ 認ラヨー ムレリ时 アテ偏 ル軸移 ヲチシ 發後滑 見方座 舊整定 ŋ 更移

二動

査ン装

スト置

ルス曲

ニル肱

同二等

栓際何

13/2

前第七

方二帶

二低熱

於壓ノ

77 精セ

同

+

百 同

後

曲 肱 栓 切 斷 面 狀 態

其 切 他 斷 切 位 斷 置 25 面 第 生 疵 圖 --3 示 デ ス 曲 如 肱 3/ 力 栓 1 1 部 全 思 周 案 1 點 約 = 孙 T n 1 ŀ 牛 = 對 栓 ス N 頂 切 部 斷 H IJ 面 右 23 疵 舷 側 面 = 幾 寄 分 摩 V n 耗 生 3/ 疵 稍 滑 1 部 力 7 2 疵 n 面 面 粗 ŀ + 慥 1)

3/ テ 結 品 性 組 織 7 顯 出 七 n 所 7 ŋ 0

修 理 前 1 方 次 腕 x ŀ 同 栓 所 ŀ 穿 接續 孔 = 際 部 3 -檢 生 査 3 七 居 w V 結 w 裂 果 疵 = 7 25 栓 V 11" 栓 全 1 周 外 周 分 1 111 1 空 部 ŀ 耳 IJ 4 其 途 1 迄 深 اد + 裂 栓 5 居 中 12 空 モ 部 -達 1 認 七 4)2 2 0 w E 急

肱 栓 切 斷 J 原 因

曲

ラ 質 浮 切 3/ モ 力 亦 約 斷 4 n 餘 七 原 IJ 1 白 良 因 助 好 7 推 7 ナ 噸 IJ ラ 究 超 ザ 3 過 ス Æ IV セ IV 7 n -曲 ŀ 1 = 認 7 7 肱 認 IJ 軸 4 IV x 此 1/1 7 得 in 線 隔 至 IV 當 モ 壁 1 此 附 狂 1 等 E ス 近 0 及 21 -於 積 何 テ 荷 v 船 毛 關 曲 體 ガ 係 肱 軸 13 上. + 石 切 斷 力 炭 ラ 满 1 + 原 載 n 因 無 當 1 理 信 初 ヲ > ズ 機 受 n 能 ケ 械 居 至 2 ズ 後 IV 只 部 = x ŀ 隔 幾 並 壁 分 -3 切 栓 1) 斷 後 切 斷 7 方 速 面 = 於 力 1 ナ 材 テ

擴 in 加 E ガ 因 大 7 サ in テ ス 如 1 切 能 IV 7 11 出 斷 = 1 12 足 發 ズ ŀ 後 爲 原 IV D 負 因 直 x × 荷 = T 7 數 44 3 IJ 礁 加 Ŧī. H 北 當 間 フ 百 w 浬 E 時 荒 航 = 1 = 長 IJ 天 海 至 離 航 中 y = 遭 礁 H 程 發 7 遇 Æ 迄 追 何 生 1 3/ 等 期 馬 且 フ テ 間 ツ 異 力 發 益 狀 -= 生 テ 於 4 ナ 裂 馬 テ 7 運轉 此 力 已 疵 擴 2 前 裂 內 大 3/ 來 疵 航 含 3 遂 的 7 海 V IN 速 或 比 切 E カ 1 斷 3/ 更 肉 ** 大 擴 眼 セ = IV ナ 出 大 7 IJ 以 E 發 セ 1 3/ 3 3/ テ 7 其 識 ŀ 1 以 判 列 IV 別 斷 デ 島 = 3/ 发 足 得 ス = ザ 至 w = w 7 初 n 丈 w 航 最 5 裂 x テ 毛 海 疵 裂 1 負 ヲ 至 荷 當 疵 前 生 ヲ + 編 7 33 速 此 1) 居 = ŋ ŀ 力 記 部 認 = 七 3/ =

講

演

軍艦

間

演

透問

ノ離礁並應急修理工事

五.

曲 肱 栓 應 急修 理

セ 3/ ŀ 日 切 力 細 斷 ۴ 徑 心 曲 九寸半 モ 肱 此 注 栓 意ヲ 應急修 テ 鋼材 所要ノ U テ 理 = 着 手 目 加 淺 的 I 3 間 7 中 同 救 達 所 + 難 ス 4 八日 着手 = w 疵 = 良 以 來最 ヲ 好 1 敢テ 發見 ナ w 重 差 2 出 要 支ナ 一來上リ 他 ーナー = n 代用 V I 1 7 事 認メ大部分ハ 以テ ス 1 ~ 竣 丰 -鋼 I .2 材見當 テ是ヲ セ 9 其 切 ラザ 機關 斷 儘 曲 使用 IJ 胧 部 2 栓 最 セ ヲ 後 ッ 以 心 ラ 努 棒 力 1 時 2 ŀ テ 思 困 淺 Ŀ 却 ·間 定 汽 1 X テ 思 艇 -グ ヲ 月 F.

右舷 主機械第二 低 壓 曲 肱栓應急修理圖 (第 圖 參 照

造

-UI 斷 曲 肱 栓 應急修 理法 第 圖 = 明ラ 力 + V ۴, 毛 今少 3 7 解說 七 110 左 如 2 0

ヲ 念 毛 ナ 個 サ 3 皷 4 形 w 楔 Ė 主 F 2 テート 1 3/ 3 2 = 堪 3/ 4 N 7 ŀ ŀ V 同 時 = ~ 2 デ 2 グ = E 堪 V × 切 斷 部 結

1

ラ 此 ~ 3/ 21 1 寧 因 楔 テ 17 本 反 栓 對 圖 滑 如 栓 動 1 滑 面 造り 動 3 IJ 面 運轉 中 方ヲ 空 部 伴 大 = E 牛 至 楔 7 n 造ラ 21 = 次 從 第 210 4 次第 = 可 締 7 二大 v w ŀ 1. 牛 E E 運轉 " 弛 造 7 ザ = V N 際 IJ 樣 單 3/ 遠 = 計 心 劃 力 ŀ セ = 1 テ次第 IJ 2 3 2 楔 = 堪 拔 キ 3 出 4 ス w 目 7 F 的 1 -ナ 對

此 實 = 楔 IE. 1 當 底 面 位 置 圖 = = 居 示 ・ラ ス 3 如 2 7 何 IV F V 同 モ 時 栓 中 ~ 空部ヲ貫通 2 デン グレニ セ 堪 w 八叶 ユ n 力 1 鍋丸 E 幾 分 棒 增 F 加 密 + 接 3/ セ 2 V w 2 樣 iv 企 樣 テ I. タ 事 りつ 7 以 ラ 楔

ス ŀ 同 時 栓 亚 七 鈴形 118 IJ = 温度高 此 中 此 目 空 楔 的 部 7 114 I ŋ 達 丸 揷 事 弛 ス 棒 入 E 2 n セ 皷 1. 傾 Ξ 曲 n 形 E 20 肱 徑 楔 栓 r 八时 腕 施 IJ 1 是非 中 3/ 空部 鋼 間 得 共固 丸 ザ 前 = 棒 n 丰 揷 後 = 21 入ス 端 主 モ 3 各二 1) 1 ~ 單 3/ 打込 本 キ八 テ = 宛 切 形 时 斷 狀 ザ 鋼 九 部 7 w 鋼楔 丸 ヲ 换 丈 棒 I. 夫 7 次 中空部 ラズロ 揷 = w 結 スシ 1 合シ「ベ 77 以 -杯 テ 3 1 テ ŀ 2 æ 目 デ 1 1 的 3/ 2 京 皷 グレニ 3 ラ 形 2 ザ 楔 1 iv 堪 1 ~ 老 全 力 堪 3 然 ラ Z 同 ズ 2 n 殊 L ヲ + 主 w y 運 = ŀ

1

7

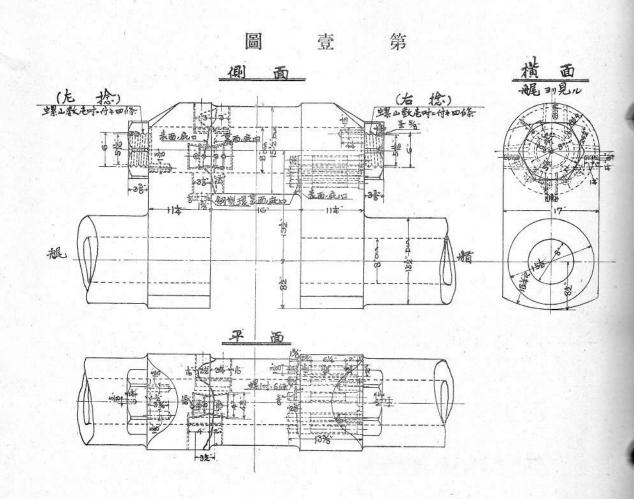
7

~

力

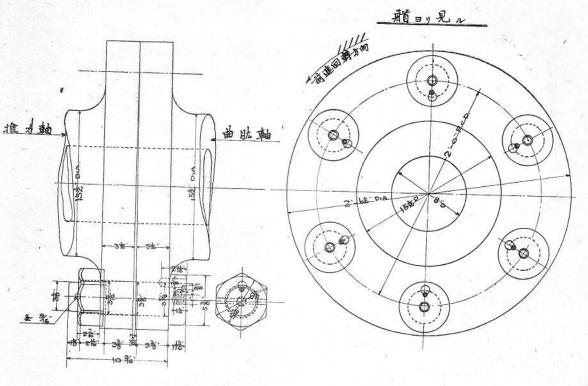
轉

ŀ



右舷主機械第二低圧曲肱栓應急修理圖

尺度 四分三叶 · 意吹八 備考太 · 線、福州 · 示 · 、



右船主機械曲脏軸推抽器接手應急所置圖

尺度 唐叶二分一》声叹了人

一浅間」附屬

拾

九

其

儘

復

舊

ス

E 此 出 ノ八时九棒打込ミニハ「バラスト」ヲ使用シ約七時間ヲ要セリ即 來上 9 大ニ 满 足スベ + モ 1 1 + V リ八时 鋼丸棒 7 打込三 タル チ割合ニ 後丸鋼 時 楔ヲ 間ヲ要シエ 前 後 端 = 事 本宛 少 揷 2 入シ 困難 次

九棒

ノ兩端ニ母螺ヲ緊締セリ。

(四)栓ノ前端裂疏ハ五本ノ長キ螺釘ヲ以テ緊締セリ。

得 n 馬 事 カヲ 槪 算定 右 3/ 如 7 3/ ルニ 因 テニ 回 轉五 個 ノ鼓 十五 形 發生實馬 楔 及 亚 鈴 力五 形 楔 百 箘 Ŧī. + ガ 主 ヲ最大限 ŀ 3 テ 剪斷 ŀ 3 應力 テ 運 轉 = 堪 ス IV 7 ヲ w 至 毛 當 F + y V 1 テ今後安全 認 發 生

生實馬 思 註 萬 力 力 = ラ 對 1 必要二 サ V テ應急修 所ア 迫 ラパ 110 理 安全 回 部 轉六十三 受 + IJ 2 1 n 一發生實 斷定 負荷 ス 1 曲 馬力七百 in 能 肱 軸新造當時 ハズ〇 Ŧī. + 迄 2 短時 認 可 應力 間 運轉 約 ス 九割 n モ मि = 達 + ŋ 3/ 1 且. ツ 思 前 考 記 ス n モ 如 C 7 使 用 此

發

當 y 部拔 且. ~ 第一 右 減 * " 金 = 緊張 應急修 於テ 螺 ラ除 應 y + 摩擦 急修 釘 圖 取 頭 _ 1) 三十二 適當 除 理 示 理 ŀ 面 檢 施 增加 母 查 部 去 ス 如 7 ス 螺 行 七 1 調整ヲ 檢 分 in 底 3 w 7 際右 又螺釘 部 同 = 查 = 1 鍔 螺釘 七 ŀ 七 1 1 接手用 行 舷 1 时 w 間 曲 ノ受クル 孔 -~ 七 1 間 隔ヲ三 肱 曲 IJ ŋ 1. 隙ヲ 螺 摺 īfij 此 軸 肱 1 釘 1 栓 v 2 テ近 處 自 力 十二分ノ七时增 全 推 合 修 長 力 置 Æ ٤ 理 由 1 平均 軸 多少擦傷ヲ 隣 部 -= 關 約 有 1. 島 聯 何等 半 3/ 1 ス 接手鍔 得 10 ~3 7 第 큠 異 デ試運轉ヲ n 7 様接續 加シ以 從 生 常 八主軸 IJ 次第 1 テ せ ナ 下 7 同 3 シテ同鍔! 良 承 3 _ 端二於テ千分ノ二 部 モ 細ク 好 行 F 以テ 1 3 部 ij r E 接手 削 裏金 發 1) 狀 原 曲 速五 y 2 態 ス 肱 即 1 ハ運轉中常ニ n 毛 = 栓 音響 底 アリ 7 甚 海里乃至六海 應急修 螺 部 京 百十 又應急處置 糸 3 = Æ 次第 施 部 力 理 5 = 时 3 部 F. 間 r 至 ズ = 部 減ズ 1) 數 IJ 隙 里 此 直 2 7 H 7 = 航 施 テ 厚サ千分 於 徑 有 ~ 接手 約 テ -1-也 シ 海 七 1 八十 ,, n 1 iv 分 1 兩 ヲ 認 後 軸 鍔 哩 歪 鍔 1 發 × 航 接手 Ŧī. 見 汉 相 E 自然 十六 接 时 10 n 海 7 IJ n 1 = 後 14 來 减 = 3/ 3 釘 = 擦 F ŋ 直 3 全 w

出發横須賀回航中

演

力

F

ナ

1)

想像以上ノ

良態

ニア

n

モ

認

メラ

n

從テ吳回

航

前

横須賀

於

テ修

理

必要ナ

7

益

4

良

態

テ

運轉

續シ

吳ニ

到着

2

得

w

モ

ノト

信

セ

y ノト 演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事二就

一)十一月二十 如 二十七日右舷機停止 + 良好 ノ狀態ニ H 出港 7 v ノ上 バ最早本 後 一接手鍔 回轉五十三ニテ繼續運轉應急修 邦到着迄 螺釘四本拔取り檢 ハ開 放檢 查 查 ラ强 七 w = 理 E 各擦面 テ 部 行 音響 フ必要ナ 約 モ 止 平方吋増加シ滑ラ 3 + 益 一々良好 E ŀ 認 狀態ニ 40 力 r ナ y IV 面 3/ ŀ 毛 ナレ ッ右 月

1

應急處置 應急修理 7 施 部 セ 何等異常ヲ認メザ IV 主軸接手螺釘 全部 ルモ十二月六日 (六本)取外 2 爲念再ピ 檢查 七 開 IV 放檢查 = 螺釘 ス 殆ン 曲肱栓修 ド半周 理 部 = 當 ハ異 リヲ 常ナ 生 ジ其 7 良態 1 部千分 7 ij 同 十三 時

时 摩 粍 面 頗 n 滑 ラカ + y .

丁リ 横 航 ~ 須賀 7 海十六日 益々良態 同 時 到着前 = 應急處置ヲ施 間 日(十二月十七日)房州湊村沖假 ノ摩粍如斯少ナク残り テ運轉ヲ繼續シ セ in 主 軸 得 ベン 接手螺釘 + 1 H 信 間 全部 せ 航 70 泊 ノ好 子 海 = 本 の時機ヲ > 取 (横須賀着迄 外 利 3 檢 用 查 3 曲肱栓修 セ)摩擦 n = 摩 面 擦 理部檢查 æ 增加 面 前 セ ヲ ル事 P 行 檢 故 查 n 時 層 = 異 摩 3 IJ 狀 耗 E ナ 割合減ズ " 層滑 良態

棤 須 賀 發 吳 着

時 三十分早潮 十二月二十三日午前十時 水 道 西入口 = 假 吳二 泊翌二十八日 向 ケ横須賀出 午前 一發海上 九時 拔 頗 鑑 n 平 同 穩 H 午後 3/ テ恰 時半吳 毛 鏡 = 入港 面ヲ 滑 ス船體機關異狀 走ス n ガ 如 シー + 十七七 日午後五

月二十 九日(吳入港 ノ翌日)應急修理 部 精 細一 檢 査ヲ 行 フ 其 狀況 左 如 シ

邊 曲 千 肱 低 ガ 前 壓 曲 進 + 方 肱 五. 向 栓 时 修 理部 回 遊隊 轉 ス ŀ ヲ生ゼル外何等異狀 n 皷形楔二個 ŀ + 壓力ヲ受ケ ノ内曲 ~ 肱 ナク頗 丰 ガ上 邊ニ千分 部 思案點 in 良態 ノニ十 = アリの 7 IV 五 ŀ 时 + 內 遊隙ヲ生ジ上部 側 1 E 1. ガ 曲 肱 腕 鼓形 ŀ 嵌 楔 合 = 七 23 w 同 部 樣 於テ

前

方

腕

1 栓

ŀ

間

發見

セ

2

裂傷

ハ應急修理常時

ラ儘

=

3

テ

少

3

E

擴

大

七

y

ŀ

認メズ應急處置

ラ施

セ

3

曲

肱

講

演

軍艤淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

六

I

时ナリの

百七十六萬四千五百)ヲ運轉セシ後ノ狀況ヲ示セルモノニシテ檢査ノ結果 以上ハ十月十九日某島出發以來昨日投錨迄ノ航程四千二百四十二哩 (航海日數三十日十 ョッ判斷 スルトキハ應急修理部ハ今後 四時間機械總回轉數二

推力軸トノ接手螺釘ハ摺レ合ヒノ面積各約十六平方吋ニ達シ概シラ良好ノ滑動面ヲ有シ摩耗寸度千分ノ二十

更二長距離ヲ航海スルモ安全ナリト斷言スルニ足ルモノト認ム

註 此 ノ航海中ノ回轉數ハ主 ŀ 1 テ毎分四 + 九回轉 ナ リシガ時 1 3 ラハ五 十一 回轉 = テ運 轉セ シコト 毛 アリ

一章 雜 件

爲メ附記ス〇

救 難 喞筒準備

救難用 ŀ シテ約 萬噸ノ排 水力量ヲ得 2 ガ爲 メ準備シタル喞筒大體要目次ノ如シ。

救難响筒大體要目

间	同	パルソメー	ンウグオトト		同	同	遠心唧	形
		Ø I	ンシ				筒	式
								量每
八〇	八〇	八〇	四〇〇	000,1	七五〇	100	国"000	畴
_	_	_	_	Ξ	四	_	四四	臺數
þď	四	正味馬力四	三五	100	七五	五五	四回に	劉スル算定馬力總水頭三十呎ニ
1 .	Ŧ.	<i>3</i> 5.	1 =	11		八	二七	徑排 水 吋管
			二时八分ノ三	二时四分ノー	二吋二分ノニ	=	35.	蒸氣管徑时
= -	三一四	三一四	m-10	五一六	四一八	三二六	六門八吋	機械ノ幅
=======================================	1-10	11-10	- 四 - 0	ハーハ	六一八	六一六	七一六时	機械ノ長
四一六	四一六	四一六	五一八	六—0	六一八	四一六	一〇一六吋	機械ノ高
								備
							Z I	考

思

E

-

牛

7

得

ズ

今後

此

種

喞

筒

試

驗

=

21

吸

水

1

最

大

水

頭

7

决

定

ス

w

=

足

in

試驗

7

施

行

2

置

7

N.

要

r

IV

ヲ咸

ズ

救

難

喞

簡

用

罐準

備

7-

3/

T

1)

テ

吸

水

水

頭

25

僅

力

=

DU

呎乃至八呎牛迄試

驗

七

IV

E

1

1

3

+

1)

救難卿

筒

1

成

績

表

1

2

テ

物

足

ラ

ザ

w

咱

筒

要

目

概

3

テ

確

-}-

ラ

ズ

或

要目表及

試

運

轉

成

結

表

7

有

ス

w

モ

多

7

が排

水

1

水

頭

,

1

+

Ŧi.

呎

以

J:

試

驗

形

式

數

使用

厭

力

火

床

面積

寒

止

拿

罐

本

體

1

寸

法

推

定馬

カ

燃普

燒通

燃最

燒高

備

考

度

度

Ę

罐

大

體

H

用壓力ニ高低

差

IJ

不

便

7

v

10 IJ

毛

加

論

無

+

=

勝

w

~

17

例

冷低壓·

力

=

テ

モー

IV

2

×

1

次

1

用

叉

蒸氣送風

用

罐

萬

集

=

大

E

=

困

却

3

及

已

2

ヲ

得

ズ

前

表

如

17

過

大

7

n

罐

マデ

搭

載

セ

#

n

~

力

ラー

775

IV

=

至

v

"

丽

3

テ

使

戾單單 汽 直 汽

重

立 車

罐罐罐

00

Ŧì.

一时四分ノニ

Ŧi.

0 16

四四五

时

二分

三。徑

124

九〇

八、六 八 九

ノニモ时

で八分ノ二個

170 1

0 0

三〇 五 二〇所

四〇

四〇 三〇町

火面面

圓

罐

六〇三二、三

四吋四分ノ 五吋八分ノ三

-6

罐

九〇

三九、三五

0

Ò

=

四〇 五〇 八〇

0

三〇 二五

Ħ.

3

テ案外有效ニ

働

力

2

x

得

in

=

1

Æ

7

ルベケレ

バ蒸氣管及給水管装置複雑トナルハ忍バザ

ルベ

カラズ〇

電働 遠

PU

000,1

00

八

 \equiv 四

pu

六 Æ.

00

5

时八分ノ七

四四

四 五

四

同

= 3 右

內

Ju

干

噸

响

筒

船渠排

7K

用

モ

1

+

IJ

3/

ガ

其

1

後

Fil

船

渠

=

電

働

喞

筒

備

~

B

iv

爲

×

不

用

1

7

1)

R

in

E

得

n

見込ナ

力

1)

2

モ

單

=

豫備

1

3/

テ

搭

載

セ

N

モ

1

ナ

り。

テ

其ノ

後數年

間

使

用

2

11:

IJ

V

モ

1

--

V

18

働

作

如

何

7

考

慮

3

DU

臺

中

臺

蒸氣力及電

力ノ都合上全然使用

C 喞 篙

演 軍艦 温透間ノ

謹

一)汽車罐 ۱در 百噸喞筒一臺ヲ辛フジラ運轉シ得 ~ 3 他 ハチ 噸喞 筒 臺ヲ運 轉 ス in = 適 スつ

罐

蒸發力ト喞筒ノ蒸氣消費額

(二) 直立罐 臺 ハ七百五十噸遠心喞筒一臺ヲ運轉ス ルニ 適ス。

(三)單面圓罐 2 × 1 汉 1 25 八十噸 .21 蒸汽消費量非常 パルソメーター」三臺及同四 = 多ク時 = ر --馬カニ 一百噸一 千五 臺合計四臺ヲ受持 百听 モ要ス n 毛 汉 1 3/ 7 4 V n 210 ... ナリ) 小 V 1 無 理 ナ w ~

四 單 14 Ŧ 臺叉へ此 アノカ量 = 相 當ス N 喞筒ヲ運轉スル = 適 スつ

力量 以上ノ 種 4 ラ發揮 1 如ク 點 割當テ ŋ 2 得 餘 器 w 前 毛 モ ノト 存 表 七 罐全部 見積 ザ w ~ ルヲ至當ト ラ使 力 ラズ叉時 用 ス ス w ŀ 1 キ 3/ テ ハ合計七千二百四十噸 ハ煙突低部ニ蒸汽送風 ノ喞筒力量ヲ モ 行 フ必要ア 發揮 w ~ 七 3 V 因 得 ッテ先ヅ六千 w 次 第 7 噸 F

罐 保温ト 3/ テ石綿製 布閣 厚 サ 約 时半) ヲ 用意搭 載 セ リー

發電機及電働機準備

罐 ラデ 1 力量充 筒ヲ運轉セ 矛 ナ ラズ更ニ ン考ニ テ次表 少シ ク増加 ノ如 ク發 3 廣 電機及電 + 毛 搭 載 働 2 機 得 7 w 搭 モ 載セ ナ りつ ケレ 110 I 作 船 -於テ發電 3 水上 一電送 = 3 y 電

發電機及電働機大體要目

同	同	同	直流電働機	同	直流發電機	形式
六五	五〇	六〇	六	八八八	近る	ハ電 馬力
_		10		=	EL .	數
100	11110	01111	11110	= 0	八〇	電壓
三五〇	九00	八五〇	八五〇	五五〇	₹	回轉數
五一六	三一八	四 — 〇	11-10	四一六	三呎	幅
九ーニ	五十六	五一六	五一八	10-5	八一六时	長サ
三一六	<u></u>	ニース	=-10	4-0	六四〇時	高サ
						備
			deg with X on Calle Line 30			考

7

六四

右ノ發電機三臺ヲ工作船ニテ運轉シ水上ヲ送電シ淺間 電纜及約二百呎ノ調革(喞筒四臺用)ヲ用意 り。 ノ喞筒据付位置マデノ距離五百米突ト見積リ之レニ必要

七

汽働喞筒ヲ電働喞筒ニ改造

置シ此等汽働喞筒ヲ電働機ヨリ調革仕掛ケニテ作 横須賀ヨリ「サンバルトロメ」ニ至ル航海中七百五十噸遠心喞筒二臺千噸遠心喞筒 動 セ 2 メ得ル改造準備ヲ行へリ。 臺ニ豫テ準備 七 N 滑車ヲ装

量 九千五百噸ヲ排水シ得ルベ Æ 以上ニョリ(工作船が淺間ノ近傍二百米突以內ノ處ニ覊泊シ得ルコト、ナラバ)電力ニテ三千五百噸 ノニテ二千五百噸外ニ千噸電働喞筒一臺合計三千五百噸トナル) + = ŀ ŀ ナ w 0 ノ排水力量ヲ得ベシ即チ蒸氣喞筒ト合計力 (前記改造

主ナ ル 管 類 準

蒸汽用屈曲自在銅管ハ出來得ル丈ケ多數ヲ搭載 蒸氣用屈曲自在銅管搭載表 ス IV = ŀ 1-3/ 搭載前 應水壓試驗 グラ行と セリっ

同二	同	时二	一时八	同	八	吋	一时	=	內
		分ノー	分ノ三		分ノ三			分ノー	經
一 - 本 本	· 一	一本	二本	一本	一本	一本	四本	二〇本	數量
四五〇〇〇		四、五		五、〇	四、五	四五五		五、火	長一本ノ
九、		九、五		一七、五			二四、丘米	11100	總長サ
1000 多國內不歸於 1100 景下面轉成了				一、徑別及長サハ接合鍔部ニ刻印シ置ケリ	前五次 山門 明年 医天下 七五十十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	智力圏移指名金星ア全部ノ手スラ	一、管ハ全部二百听水壓施行良好ノモノ	(備
									考

品

(二)吸入用護謨蛇管ハ千噸喞筒二臺七百五十噸喞筒四臺並 ル距離六十呎ト見積リ五时護謨蛇管ヲ準備セリ。 三四百噸喞筒一 臺 = 對シ各々吸水倉函ヨリ吸水口 = 至

三)百噸遠心喞筒及四百噸「バルツメー ター 川用ト シテ八吋及十吋護謨蛇管ヲ用意 セリの

護謨蛇管搭載表

內徑	長	數	15
五.	一五	一 四 〇*	百
£.	一六	六同	+
	11111	mı	千四百八呎
	- 六	三同	
八	一六	二〇司	三百二十呎

(四)四千噸喞筒吸入管其他 时乃至十二时ノモノ二百呎準備セリ。 ブ喞 筒ノ排水管用トシテ八分ノ一时鐵板ニテ製造セル 徑十五时ノモノ二百八十呎、

以上ノ外蒸汽排氣給水管用トシテ多數ノ銅管ヲ用意セル

=

ト左表ノ如シの

銅管受拂明細表

目 無 管	4	名
五时	內	Ā.
1750	徑	十
=	厚(ゲージ番號)	
- Q	ž	度
八	5	搭載數
八	1	佛
0	.3	碊

演 軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

銅

蝍

六五

同銅同鍔同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同

六

			付												調									
	管		銅管		新美国省					72														維護
八吋二分ノー		五吋(四本/全長三十二呎)	六吋ニ十二本ノ	五时四分ノ三	八分ノ三	二吋ノー	八分)五	四分ノ三	時	一時四分ノー	一時八分ノ五	二时	二吋二分ノ一	二吋二分ノー	二吋二分ノー	三、吋	三时	三吋二分ノ一	三吋二分ノー	三吋二分ノー	四时	四时	四吋ニ分ノー	四时四分ノー
八时八分ノ七	十二时四分ノー	(三十二呎)	全長(百九十八呎)	- 11	<u></u>	<u> </u>	JR 1	111	10	<u>.</u>	010	10	H I	III I	八八	11	10	日本では4月のの	10	ተ	111111		は、日本物質	111
Ξ	-	- 1 国内教育		.10	1.5	二六	一 五	五.	五	元	ハーナ	五五	10	一五	五.	1,5	五.	五.	五	二六	H H	五 五	- -t	1 21
-	1	四	1111	六	E O	一六	五.	ナ	九	10	三〇	==	_	九	九	五五	五	-	=	九	Д	<u></u>	=	六
0	-	24	1111	四	一八	一六	九	六	一九	10	HO	===	-	一九	九	四四	£.	-	=	九	八	三		11
_	0	0	0	=	=	0	六	0	0	0	0	0	0	.0	0	_	0	0	0	0	0	=		pu

7

1

罐ハ全部上甲板ニ据り	淺	シテ離礁前ニ使用セルモノハ	備考、拂ハ離礁前排・	间	同
付ケ喞筒ハ蒸汽力	同二据付ケノ事ニ	セルモノハ全部ノ	水装置ニ使用セル	四分ノ三	山
全部上甲板ニ据付ケ喞筒ハ蒸汽力ニラ運轉シ得ル範圍內ニラ可成具	淺間ニ据付ケノ事ニ決定セル罐及喞筒	全部ノ約六割トス。	離礁前排水装置ニ使用セルモノ及離礁後諸管装置ノ	111	一时十六分ノ三
軽園内ニテ可成		n i	官装置ノ一部復舊	3 i.	五.
具人			售		

ニ使用セ

n

モ

ノ、合計ラ示

セ IV モ

1 = 0

0

0 0

四二

同同同同同

八时

七时十六分ノ九

八时二分ノー

八时四分ノ三

七

八吋二分ノー

八时十六分ノ三 八吋四分ノー

七时

七时二分ノー

七时四分ノ三

七时八分ノ三 七时四分ノ三

一据付ク n 70 可成具合宜キ多數 ノモ ノヲ防禦甲板非浸 小部

救難罐番號表(作業ノ便利ノ為メ番號ヲ附ス)

六	Ŧi.	四	Ξ	=	-	番
號	號	號	號	號	號	號
		直	汽	直	汽	名
屈	面圖	立	車	立	車	
	圓罐		罐	罐	罐	稱
						使
-60	.1.	10	J.			用
八〇	0	0		0	五〇脈	题
	,					力
						備
						考

講

演

軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

六七

.倩考、 火床面等ノ 詳 細 ハ救難喞筒用罐準備ノ項ヲ参照スベシ。

演

軍艦淺間ノ離並礁應急修理工事二就テ

難喞筒番號表(作業ノ便利ノ爲メ番號ヲ附ス)

百噸遠心喞筒 八十噸「バルソメーター」 五八十噸「バルソメーター」 五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 千噸電砂遠心喞筒 二二 五	-1-	- -	十	+	+	九	八	七	六	Ti.	174	Ξ	_		11
百噸遠心喞筒 八十噸「バルソメーター」 五八十噸「バルソメーター」 五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 七百五十噸遠心喞筒 一三 千噸電働遠心喞筒 二二 五	四	Ξ	=	-							ŀ.				
□ 日 「	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	3
機 明 筒 一ター」	五噸石油發	噸電働遠心唧		十幅パルソメ	百噸ウオジン	頓遠心 即	百五十噸遠心	噸遠心喞	ルモノトセルタメ配置憶ニ便ナラシムル爲メ	右右	百五十噸遠心	百五十噸遠心	十噸「バルソメ	噸遠心喞	3
ン競リナ 左一 一 一 舷 二 二 二 転 二 三 五 八 五 五 三 二 三 二 元 据 付	機响			久	トン」・喞		筒		六號チ缺クコト、数番號チ右舷偶数		筒		3		
	二、五		五.	五	111		Ξ	Ξ	號チ左舷ニ据	=	1 = 1	111	<u>Ті.</u>	八时	

備考、 要目 詳 細 25 救 難响 筒 滩 備 項ヲ 怒 照 ス ~

罐 運 搬 据 附

續キ五號、六號ノ大罐、爐筒及罐管等、全部官板及木栓ヲ施シテ水防シ木材及ビ浮箱ヨリ成ル筏ノ浮力ニ依ツラ 號迄ノ罐(何レモ五順以内)ヲ先ヅ据付ケ「メーンデリツク」ヲ使用スルコト、シ三月二十九日着手四月三日竣工引 五號罐 ハ二十噸六號罐ハ十八噸ノ重サアレバ人カニテハ淺間上甲板 = 取入ルト 能 ハズ |因テ重 量輕 丰 號 3

y 四 用

意

セ

ザ

n

~

力

ラ

ズ

註

大排

水

總

响

筒

運轉ヲ

+

時

間

繼

續

ス

n

ŀ

セ

11

JE.

味

百

Ŧi.

+

噸

1

罐

水

7

要

ス

~

2

從

テ

小

7

ŀ

æ

百

噸

罐

水

海

J:

=

浮

~

テ運

搬

3/

四

月

Ti.

H

搭

載終

n

斯

7

V

テ

罐

1

Ŀ

甲

板

充

分

=

固

定シ

豫ラ準

備

七

n

石

綿

製

布

團

厚

时

給水喞筒及給水「タンク」

不 時 水响 給 水 故 筒 喞 障 筒 1 働 = 1 對 作 號 ス 確 w 實 3 補 y = 五. 助 3 テ六 装 號 置 = ヲ 號 至 兼 罐 ル五 3/ -2 要 罐 w ス 1 夫 = w 力 1-4 1 量 固 七 有 / リ 1 附屬 倍 7 給 給 水咖 水 3 筒 得 ヲ n 搭載 モ セ 7 進 3 ガ 備 六號 3/ 此 罐 1 餘 = 對 力 7 3 以 テ ハウ テ 他 工 給 水 式

y 水 豫 約三十四 備 2 貯 給 水 噸 得 ジー罐 タ ~ 2 2 叉給 水ヲ貯 クートシ 水 フ テ上 A n 2 3 クレト 部石炭庫四、六、七、八番ヲ使用 1 7 得 V テハ 京 IJ 給 水 喞 筒 働 作 考 セ ŋ 慮 給 セ 水重 w 結 果上 量 ガ浮揚り 甲 板 左舷 作 業 釣 = 床格 差 支 納 ^ 所ヲ ナ 牛 水防 ŀ + 3/ ラ 五 百 噸

給 水 給 水 タン タン ク」ニ導ケ クレニ 水量缺乏セ IJ 110 優力 ナ n 給水 响 筒 叉 1 消 防喞 筒 = 依 1) 補 充 ス n モ 1 1 ス排氣蒸氣 管 疏 水 可 成

ザ 難 ナ 供 ラ 罐 ス /ズ千五 ~ 給 24 1 力 2 海 勿論自己ノ 量 船 水 ガ 百 ヲ 1 使用 眞 浬 餘 ヲ隔 水 裕 1 也 ナ 消費量 供 ザ + ツ 給ヲ ヲ以テ大排 N n 方 地 受ケ ヲ 針 = 補 運 ŀ 次 フ 送 V 水中罐 船ヲ 豫備 in = 毛 = 派 1 不 給 足 モ V 水 水濃矛高 テ運 ア = タン IJ V 珍 テ 搬 クーモ 是亦 5 ス 7 2 n ラ 大容 + 他 = J10 申 = ŀ 3 IJ 1 譯 Æ 積 供 ナ 7 1 + 給ヲ ラ V Æ 3/ ズ 11 1 故 僚 4 仰 7 萬難 準 ガ 艦 ザ 備 助 IV 3/ 7 忍ど タリ 力 ~ 力 7 仰 絕對的 ラ 罐 ズ グ 水 其後時 3 1 供 ŀ 最 モ 給 後 4 7 1 = 必要 遭 IJ 淺 難船 T. 作 間 = 淺 船 迫 1 間 苦 n 心 3 他 = IJ 艦 非 救 通

唧 筒 据 附

號 3 IJ 號 = 至 w 排 水 喞 筒 74 月 日 据 付 着 手 3/ 同 + H V デ = 1 全部据 付 終 3 必要 ナ n 蒸汽管等

满

12

7

減ズ

IV

=

ŀ

ヲ

得

~

7

又响

筒

起

動

際

向

e

水

ラ

送

w

=

甚

A

便

利

ナ

りつ

聯諸 ズ 漸 装置 7 四 月 E 亦竣 --日 T. 3/ = 排 至 リ第一 水 運轉 準備整 回 排 水 試 ~ 驗 12 7 モ 施 最 行 毛 困 V 難ヲ威 タリ 排 水武 -te" 3 吸入蛇管取 驗 結 果後部 浸 付 水區 非 常 = = 對 困 難 3/ テ = 更 2 テ未 第十三 1x Ŧ. 一分通リ 號 電 働 E 遠

演

軍艦淺間

ノ離礁並應急修理工事

三就

七〇

終ラ

Ď

大

筒 註 据 付ヲ 此 電 要 働 機 ~ 100 ス トヲ發見シ ボ 1 IV 四月 トーノ 十八日着手同二十 Æ ノヲ 用 ヒ淺間 八十一ボ 据付竣 I I N ト」後電 機 3 IJ 送電 セリ 吸入蛇管取 公付工 事 E

H

数 力 結 果四 月二十 H 全部 竣 I ス 排 水 裝置工事 兹 = 初 × テ完備 七 ッ

吸 7 筒排 入弇 防禦甲 用 (高 ヒズ) 水管ハ 涵 サー 板 が干 更 ハ極 一呎六时、 夫 潮 -此 々相 時 メテ少量ノ ヲ選ピ ノータンクーヨ 幅二 當 1 鐵板製 一呎 機 漏 械 一时、長六呎七时)ニ 水ア 室 管ヲ リ鐵 ۱۰ ŋ ツチ 用 2 板管 Æ E 圍 何 喞筒据付ニ und. 板 テ V = E 中 又罐室通風 排 喞 押 水 筒排 板 1 舷 セ 最良ノ 側 3 水 メ(但 口 -路 排 1 位置 直 水 園板ニ シウ Ŀ + ナリ = 3/ テ中甲板ヲ貫キ中 才 2 穴ヲ穿チ弇一 依テ總 2 w = 1 7 ŀ テ ŀ ŀ 1 1 セ 函ヲ夫々內 " 喞筒 喕 筒 甲 排 此甲 板 水管 側二 特 板ニ = 設 突出 据 セ 木製 付 セ 木製 7 3 「タンク iv メタ タ 7 ŀ 90

註 (二)木製 n n 此 E 排 1 タンク」ノ 排 水上ノ 水管 利 1 病室、 益 利 ハ多大 1 ス 次室、 N 所 ナリ が排 分隊 3 毛 水管 1 長室等所々通 ŀ 曲 認 屈ヲ 減 過 30 以 セ テエ 3/ X 事 汉 w 7 容易 == 3 IJ ナ ラ 居住 V 4 者 iv 1 不 ŀ 同 便 大 時 -)-= IJ 喞 1 筒 = ŀ 揚 B 水 察 水 頭 せ

ラ

ヲ

(三)向 E 水 2 小形消防喞筒及二十五噸 石油 發動機 喞 筒 ヲ以 ラジ V **y**

吸入護謨蛇管導キ方

餘 八本、 屈 ŋ T 7 曲 噸 喞 ŋ 如 五. 筒 特 何 11-= 蛇管 = 苦 臺 7 心 通 ス 一付五 吸 風 IV 入倉筐 路等 モ 一时蛇管八本、 所 = 狭隘届: H 装置 IJ テ シ以テ接續ヲ容易ナ 1 曲 七百五 蛇 セ 管 w 鋼 屈 --壁 曲 7 噸 所 及 意 四 4 百 如 = 噸 7 切 ŋ 喞 7 メタリロ ラズ 破 筒 IJ 到 導 10 底 7 臺 直接吸入算筐 25 rh = 付七本、 k 困 難 宛導 V 接續 テ 潜 力 7)" 3 水 能 N I 1 ~ 苦心 カラ ザ w ズ七本、 察ス 所 7 IJ iv 因

七

iv

製鋼管ヲ

=

ラ

3/

同

樣

ナ

1)

成 ·釘 續 孔 製 收 通 3/ × 7 滑 1 IJ 蛇管ヲ 車 特 ヺ 以テ索引 = 接合 百 噸 喞 ス ルー 筒 3 締 及 ,, 電 付 働千 銅 螺 管 釘 噸 孔ヲ ノ鍔 响 筒用 出 フ 合 固 定二 八叶 V 造リ 護 メ以テ接 謨 蛇管 蛇管 績 1 はヲ容易 鍔 蛇 管 7 自 通 ナ 由 路 ラ = 廻 = 2 15 2 12 3/ 樣 w 装置 = 1 テ 方 モ 法 3 柔軟 曲 ヲ y 採 r 1) 鋼 n X 線 F n 鋼 + ガ 7 非 兩 取 常 鍔 締 付 ナ 付 私 N 好 螺

-}-W 毛 1 = 3/ テ 若 3 此 1 方 法 = 3 ラ ザ 3) セ 11 或 ۱۱ 到 底 取 付 ケ 得 +7 ŋ 2 + ラ ン

n 所 七 4 90 隔 壁 7 Tiĝi. 切 1) 破 IJ 罐 室 內 底 機 械 室 曲 胧 抗等 -導 3 iv -E 1 ナ V 110 要 所 = 1 木 材等

7

置

*

蛇

管

損

傷

7

避

管 装 置

請

1

h

蒸汽排 氣 給 水等 諸 管 恭 置 = 付 丰 1) 2 7 解 說 ス v 11 左 1 如 シ

管 ŀ 鍔 1 = 27 1 石綿 殆 1 板ヲ 10 全 部 卷 北京 牛 付ヲ 汉 w 行 E. = 25 一荒毛氈 ズ 折 1) 迈 ラ彩 2 法ヲ 牛 其 U Ŀ ヲ薬 テ 迅 速 繩 = = テ I. 事 卷 ヲ 半 施 X 七 w 所 in ガ 毛 結 7 1) 果良好 帆 布 + = ij テ 卷 丰 + 排 X w 氣 管 所 給 モ 7 水 1)

排 氣管 難响筒以外 數 ケ 所 = 一蒸汽 1 モ 管ヲ導 1 ヲ 合同 ケ 2 n X 11 揚 w 1 艇 機 後 前 揚 後 錨 機發 部 煙 突 電 機 內、 -りつ

外

筒

間

=

放

氣

セ

2

×

X

IJ 0

當 應 IJ 給 艦 水管 3 豫備 內固 , 罐 有 給 装置 水タン = 夫 管ヲ 4 附 クレノ 耳 屬 成 セ 水ヲ 利 n 用 給 給 七 水 喞筒 水 2 1 及 七 = > n テ クーニ 給水 Æ 全長 送 3/ リ 1 得 百 或 w 分 21 1 舷 1 同 Ŧi. 外 時 モ 3 = 利 IJ 他 用 清 給 水海 水 ス 喞 iv 能 水 筒 7 21 = 773 取 テ IJ 入 E +0 給 V 得 水 in 3 樣 得 装置 iv 樣 導 セ y ケ 諸 IJ 其 管 7 導 外 必 7

註 (二)弇、 (一)唧 用 數 筒 嘴 約 四 = 1 割 意 R 外 × 淺間 特 = 多數 設 艦內諸 七 ヲ w 蒸汽管 要 セ 所 3 IJ 9 即 1 全長千 取外 チ ,拿二十 3 使用 四 74 呎 排 個、 七 90 氣管六百 嘴十 = 個 九十 了 下 了 四 呎 給 水管四 スニ十二個 一百八十 ヲ 使 呎 用 + 1) セ

"

īfij

3/

ラ

此

使

罐 力 量

軍艦淺間

ノ離礁並應急修理工事ニ就

1

セ

四

號

罐

直

立

罐

=

+

听

(月九 年五 正大)

初 計 畫通リ千噸喞筒二 臺、 七百五十 噸喞筒四 臺 四百 噸及百噸喞筒各 臺、 八十噸 パ w ッ x 1 ター 三三臺 ハ裝

備 七 n 罐六個 ラ以 テ汽醸 セ 110 先ヅ辛 フ 2 テ運轉繼續 シ得 タリの

註、 高 罐 温 度ニ 力量充分ナラザ 加熱シ 置 7 7 N ヲ F 以ラ咖 ŀ 七 " 筒運轉前或 中 途 部 分响 筒 止動 1 × × 餘 カヲ生 -F. V ŀ + 1 給

水

7

成

n

機ヲ運轉シ 來 排 京 サン 水防 場合ニ多カリ 水 運轉中 久 ル場合若シ 二時 2 々蒸汽壓 クバ Æ 1 1 給 認 力著 水管 4 が灰爐 n 3 ク下降 Æ 叉一 = 方 3 セ ŋ IV 3 過度 IJ = 考 1 7 = r 熱 v y 2 110 セ ラ 罐 ハ前 v 1 力量 記 B 計 in 結果 畫以外 = 此 給水 少 = 餘 千 意 裕 噸 1 電 如 E 働卿 ナ 7 力 ナ 筒用 IJ ラ ザ 3 毛 w 發 1 X メ 1. 電 云フベ 時 叉 混 ハ 揚

罐 氣 醸 中 最大燃燒度ヲ記 錄 3 y 拔萃 七 左 如 シ

但 3/ 離礁當日 21 記錄 ヲ取 iv ノ暇 + 力 y 2 = 3 IJ 當 日 1 最大燃燒度不明。

罐 罐 軍 粟 橋 面 汽 圓 車 罐

五.

號

=

號

+ 七

听

+ 七 听

+ 八

石炭 六 第一 號 種 和炭ヲ使用シ給水温 罐 單 面 戾 度七十二 火 罐 八度ニ シテ平均蒸發水量石炭 听 噸

喞 筒 能 力

喞

筒

吸

水

頭

左記

1 高

サマ

デ

少

V

E

差

支

+

7

排

水

3/ 得

> A ŋ

Iffi

3/

テ

百

噸

喞

筒

如

丰

倘

亦

餘

力

アリ

ŀ

認

× 久

"

=

對シ

七、

Ξ

噸

ヲ得

タリー

七 百 首五 噸 十噸 喞 喞 筒 筒 + + Ŧi. 呎 呎

+ $\mathcal{I}_{\mathbf{L}}$ 呎

. + 呎

八

+

噸

ルツメーター

T

噸

卿

筒

セニ

次

淺

間

北

Ŀ

V

テ後

チ

1

I

事

=

潜

水工

用

=

1

1

7

チ

ツク

1.

y

ル」三送氣

七

2

ガ

A

メードリ

n

用

空氣壓

搾機

7

淺

百

『噸喞筒

ハ動作頗

n

良好二

V

テ回轉

數六

百迄

何等異默

ク運轉シ

得タリ又排水量モ優ニ百順以上ヲ排水

得

七百五十噸、千噸喞筒何レモ良好ニ働作セリ。

ズ 喞 百 子 噸 喞 ウオ 筒 ハ艦 3/ ング 底 1 1 溜 2 水 喞 ヲ 引 筒 ク 1 働 = 適 作 ス 先 n " ヲ 良 以テ遠 好 ナ IJ 心 V 喞 モ 機 筒 1 體 3 稍 = 大 テ = 過 モ 不 +" 便 運 搬 ナ w 1 × ~ メ通路 ケ V 1. 機 ヲ 切 體 ŋ 過 開 大 7 等 ナ 不 IV 喞 便 T 勘 喞 ナ 筒 力

罐 = 1 餘 n 力 > × + 丰 1 場合 B 1 於テ然リ 1 低 壓力蒸 1 氣 ス = .

テ

モ

能

1

動作

3/

便

利

+

V

ドモ

蒸汽消費量多大

-

IV

۱۱

缺

點

+

y

殊

=

今

回

如

丰

隨

分不便

空氣壓搾喞筒使用(「ニ

空氣壓搾喞筒使用(「ニユーマチックトリル」用トシテ)

數百以 掃 除 喞 1 離 3 筒 F 礁 用 內 甚 後 口 IJ 空氣壓搾喞 轉數ヲ二百 ル 13 最大回轉數二 サ 好 2 都 ンド 送 合 風 筒 7 1 ド ヲ = 七 U 使用 保 2 |百)ニテ二臺ノ「ドリ メ」ニ ット ガ リル」ハ十 大 2 + + 於テ罐室 = 便 、三十听使用壓力ニ 號 利 罐 ヲ Ŧī. 7 一內底 氣蓄 听 y + = テ 殊ニド 機 修 ル」ヲ完全 モ 用 理 等 頗 1 w 3 = リル」ノ空氣管接續金具 テ四臺乃至五臺ノ「ド 良 際、 同 = 7 罐 V 働 回 水 鋲若 面 作 轉 七 ス 計 2 3 IV 臺 1 管ヲ氣吹掃除用空氣 110 4 E 螺釘用 此 w 装置 = ŀ IJ 7 = F 孔 ル」ヲ使用シ 得 テ 氣吹掃除空氣管ノ 鑚 ۱ر タ リ而 使用壓力三十 揉 ヲ 主管 要 3 得 テ ス 别 w ~ = シ 連 所多 = 接續 試 听 絡 驗 3 1 3 定 金 セ 依 120 具 テ x 喞 所 1 工 罐 管 同 = 筒 1 3 回 7 氣 チ 轉 -欧

間 Ŀ 甲 板 据付 ケ タリ 其 ノ要目左 如シー

電働機附空氣壓搾唧筒

電働機二百二十「ボルト」五十五馬力

喞筒ハー分間「フリーエヤ」五百立方呎ヲ發生

講演 軍艦淺間ノ難礁並應急修理工事ニ就

唧筒壓力八十听

此 電働機 = 送電 ス n 爲 メ百十「ボルト」八十八「キロ 上發 電機二臺上 一甲板 = 据付ケ 良好 結 果ヲ 得 タリの

鋲打ノ速ナリシ事

4 速 n 特 7 = = 徑四分 IJ 鋲 造 船工 3 鑪二臺製 新記 ノニ F 錄 競 时 ŀ 罐 爭 **鋲千二** 見 職 た 做 I V スベキ + 4 百本 ル為 四 名 左 メ艦外 毛 = テ午前五時年ョ 1 3/ ナラン ダ w 底 不良 補强用 参考ノ爲 1 成績 ガ リ午後七時十分マデ即チ十三 . 1 メ附記 7 势 1 1 打チ終 5 ス 九十九番肋 V y 必 死 材 ŀ ラ左舷 7. リテ働 一時間 1 毛 ケ 四 ノ)組・ 一十分 110 隨 分 ニテ(畫食夕食 立 一鋲打ヲ 早 + モ 製 1 離工 ナ リ鋲 時 打 間 チ ヲ 3

業工事ニ用ヒタル主ナル材料

救

鋼 百 板 重 Ŧi. 左 = 必要缺 十 表參 7 时 3 袋二百二 テ急 照 7 Щ 7 ~ + 形 七 ノエ 四 五 力 チ 分ノ + ラ リン 事 ザ 順ヲ = n ニハ適セ 及酸素瓦斯 时 T. 上業材料 使用 ノ鋲又ハ「ボ ズの 3/ 久 ----y iv 1 又離 使用 = N 1 1 礁前 モ 1 + 頗 異 " ル多額 數 3 ŀ リーセ ŀ ラ 謂 用 フ = × 昇 ~ 2 ント」七千袋ヲ準備 2 y w 次 及 = ŋ ŀ = 主 船 = 體 修 定 3/ 理 V ラ 用 切 思 斷 鋼 Ł 3/ 材 次 1 = 儘 使 n 1 ガッ 特 用 應急 使 别 3/ ノ箇 汉 用 修 w セ V 所 理 ガ 溶 1 1 × 外 爲 汉 接 メ逐 IJ 1 = 必 厚 モ ス 丰 亦 一六千二 + 鋼 使 封 用 3

救 難工 事 船 體 機 關 用 3/ 久 n 主 ナ N 材 料 表

品	目	數	量	備	考
鋼	板		四八、九三〇	三百二枚主トシテ厚サ四分ノ一吋	四呎八吋ノモノナリ
加	形鋼		二六、〇二九	延長八千五百五十呎主トシテ三时三时七	二时七封半ノモノナリ
鋲	10年間時間円	. 1312	六、六〇〇	二萬六千五百本主トシテ徑四分ノー	カノ三吋ノモノナリ
ルト	ナット一及「タップ」		一〇、五六四	二萬九千九百七十本主トシテ徑四日	ートシテ徑四分ノ三吋ノモノナリ
木	材		一三三、四〇〇	角材挽材丸太各種尺人八百九十本	ナリ

七四

亞錫銅鍍丸鍔

石石石煉煉石一內白

一、七〇〇版 三、六六二 一、五〇〇 000 徑五时六时二时半ノ三種總長四百七十呎 徑八分ノ五时乃至十一时八分ノ七ノモノ總長三千七百 周一吋乃至四吋ノモノ九十八房 周一吋乃至三吋半ノモノ七十三房半 八分ノ三时ョリ四时マデニ三七本 一、二、三號各種百二十五反

三五一、〇〇〇

四十五瓩入六千二百五十一袋

古 綱

目毛

管布類

付

七五

四卷

四二枚

同拍手

シテ御禮ヲ申シ

タイ

1

思ヒマ

ス。(一同拍手)

當事者各位ノ御盡力ニ依ツテ無事ニ離礁ガ出來テ內地へ歸航

御禮ヲ申上ゲマス、淺間遭難ノコトハ

國家二

取ッテ非常二大ナル出來事デアリ

マシ

ダ

ガ

御 兩 君

初 *

殊二遠隔ノ地二於テ非常二御苦心ニナ

y

タ御話っ

7 詳

細

承

ハリマシテ、

會員一

同大二利益ヲ威ジマシ

V タト

云フコト

ハ國民ノ大ニ威

謝

ス

ル所デゴザイ

テ御兩君ニ

カ御尋ニナリタイコト

ガゴザイマスレバ極簡單ニ願ヒ

タイト

思ヒマ

ス.....

別段御質問

ŧ

ナ

ケレバ皆サンニ

代

〇會長(寺野精一君)

唯今岩野、

浦田、

橋口ノ三君カラ種々有益ナル御話

ガゴザイマシ

A

ガ此救助工事ニ付テ何

演 軍艦淺間ノ離礁並應急修理工事ニ就テ

講

蠟絲線真

入鍁 石

綿 製

織

燭屑物

後編終り

ゼ六

會報第拾八號を手にして

協同員

田齡

だと存じます。 た點がありますから、之を書いて御送りして、それによりて先輩諸氏の高数を受ける事が出來れば非常に仕合せ あります、 近來會報の內容が大に充實せられて、生等後進を稗益する事は少くありませんので、非常に感謝して居る所で 所で今回會報第拾八號の送達を受けまして、 相變らず興味を以て讀みましたが、中に幾分不肖の感じ

ます。 見られて居る様であります、多數の軸を御取扱になつて、 る様であります、それで郵船會社側は六年遞信省側は八年を一般に軸の衰弱、 様でありますし、 信省側の御意見も出て居ります、所が小生が見ました所では、柴田氏の御説は折損の直接原因を論じて居らるく の誠に感謝する所でありますが、弦に小生は使用者側から、 第 一は螺旋軸折損の原因でありますが、先輩柴田敏千代氏の講演がありまして、それに付て郵船會社側及び遞 而して郵船會社側及び遞信省側は「ザーヴェーイング」と云ふ方からの御意見が主として出て居 如斯有益な數字を御示し下さいました事は、吾人後輩 直覺的に感じた所を申上げて見度いと思ふのであり 從て危險程度に達するものと大略

すが、 とは其直接の原因それ自身が分らねば、其程度は明でないことになります、 れる事もあり、 グ」側からして不合格とせらるしに至ると云ふ事は、「サーヴェーイング」の真意味からして尤な次第ではありま それで螺旋軸は全體に於て海水に接觸する所が悪くなる、 併し衰弱して居るから直にそれが危險であるであらうかと云ふ事は、私は少し疑があると思ひます、即危險 所謂社外船杯では隨分古いものを使つて居つても、折れずに濟んで居るものも少くない、從て必 從て或る程度に衰弱したるものは、「サーヴ 即ち丸で新しい疵のないものでも、

會報第十八號を手にして

から見て直覺的感じと照合して見ること、致します。

3

至

客

稿

會報第十八號を手にして

ら出發して、 海 水作用の副原因とか云ふことは分りませぬから、 以上を考へ合せて見れば、 そして自身操縦して見て、 材料それ自身が非常な關係を持つて居ることは明でありますが、小生には材料とか 又船の上で感じた所の直接原因らしいと思ふ所を述べて見度いと思い 先づ一般に强力として差支ないものとは見做せると云ふ點か

述べることは出來ませんが、 ら折 が殆んど皆の場合の様であります、それで之以外のもの それ 元 來私はあまり螺旋軸の折損に付て研究しては居りません、であるから、 れるかと云へば中央部の黄銅卷の雨端である、 で螺旋軸で折れるのは如何う云ム種類が一番多 唯方面が違つて居るから兹に駄足を添えて見るのであります。 又如何なる場合かと云へば、 V かと云へば、 は不聞にして餘り多く耳にしませんから、 黄銅卷が二ヶ所にあるもので、 ほんの直覺的な感じそれ以外の事 荒天航海中又は其後に折れ そして何 重に此三 3

と思ふのであります、数字の處は慥かではありませんが、併し彎曲することは慥かな事實で彎曲の狀態は舳艫 お拾數呎の二つ波の上に乗ることは少くない、隨て斯る場合や波の模様によりては、 の相 うかと思 ば、小生の推想では三百呎の長の中古船で、「シャ けると云ふことし、 荒天航 違が一吋以上に及ぶことは往々にして珍しくない事でありますが、 ひます、 海 中には螺旋軸は果して如何なる有様になるかと云へば、 それは何で左様に思ふかと云へば、船が入渠した時と出て貨物を入れた時と、「シャフトライ 又螺旋が波濤の衝撃を受けると云ふことがあります、 ット」全體の長さが受ける彎曲が、 船體が非常に届 波濤 そして其程 の中では船體の前 曲する從 最大振幅一 度は 隨分二吋位 如 何程であるかと云 て軸が彎 部と後部とが、 は曲るであらう 曲 作用を受 部

併し一時的には隨分停止せらるくことは稀しからぬことであります。 及ぶこともなく又「ブレード のは「プロ 全面を波が衝撃する場合は追波の時しかない、 であると思はる しめらるしてとになります。 次にププ ラ ~ ラ 1 」は其全面に對して、 」を波が衝撃する力、 即ププロ ペラー 」が曲つた角度を持つて居る、 所で波の力は彼の 」は機關の馬力或はそれ以上の力を以て衝撃せらるへのであります。 平均三四 之は極めて不判然でありますが兎に角存外偉大な力に 追波の時には船の速力が之を緩和するし、 防波堤等の勘定から見れば、 一磅の壓力を加 從て機關は容易に波の為に停止せらるしてとはない へらるれば、 普通の機關では回 慥かにそれ以上或は 其外の場合には 轉中 相 のもの 遙かにそれ 違 と云ふ 止せ 面

殊に黄銅卷の 他 それで以上の二つの力が「シャフト」に及ぶ時には、其二者の結合又は衝突によりて、軸の彎曲 側 は延 長さるしと云ふ作用を起すことしなります、 雨端は激しく之に抵抗することしなります、 所で此彎曲に抵抗するものは船尾管 荒天航海中に軸に及ぼす變化は之が重もなるものであ 兩 即一 端 及 CX 側 黄銅 は壓縮せら 卷で、

强力の あります。 では彎曲 それなれ 弱い方の端又は力の中心に近い方の端に働くと思ひます。 作用 其 ばニ 處に黄銅 の爲めに鐵又は鋼質が伸縮して、 個 0 黄銅 卷 総の内、 南端の抵抗が「ストレ あるものが何故弱 ツス」を起こして之を助 其反覆作用によりては外面は元より内組織 v かと云 へば、 其内一ケの 長することになるのであります、 黄銅卷は軸の も脆 中 央部 弱になり易 にある、 其處

なけ 厚さ次第では隨分質量として大きいものとなり、 斯く申 n ば軸 ・せば黄銅卷の强力が、 に影響を與 へないとは云はれない、 軸材より強い様に聴こゆるのでありますが、 ifii 其影響の及ぼす所が少ないとは云はれないと思ひます、そして して黄銅卷は軸 0 外周の外 黄銅卷の强力が必ずしも 部に於て厚さを以 て居るからして、

かろうかと思ふのであります。 黄銅卷の方が延びて軸に密着して居らないとか、 の力と二種の力が加算せられたものが、所謂所要强力の數倍となりて軸の力を超過し、玆に於て折れるのではな あつたことを知ることが出來ると思ひます、自然衰弱に反比例する彎曲の增加が自乘的計算となり、 割れて來るとか云ふこともありますから、慥に其抵抗の非常で 外力と機關

バー

「シャフト」の「ケース」が比較的多くなつたのではなかろうかと思ふて居るのであります、そして所謂社外船は船 とも「ケース」が少いのではなかろうかと思ふのであります。 の古いのが多いし、從て航海も無理が少ないと云ふ點もあり、速力を除り出さぬから扭力が少い、 けれども其大さが太くなつて居る爲めに、 で「レーシング」が少い、從て「ガバーナー」は廢せられ「スロットリング」をすることが少くなつて居ります、 てとが多い、即怒濤を乗り切ることが多くなつて居ります、それから一方吃水が深いのに双螺旋になると云ふ風 それで小生の所感を押し擴げて此以外にも及ぼして申上げれば、 所謂耐海性が多いのと、 航海時間切り詰めの爲めに無理な航海をする 近來汽船は漸次長いものが多くなつて居る、 從て軸は古く 從て

螺旋軸の様に長くしないで、 て、 れば折損部分の鐵又は鋼の「グレイン」の狀態を研究して見ては如何かと思ふのであります。 及び機關の操縦に注意することでありますが、此方に充分には行き兼ねるとして、 それで小生の意見は唯所感に過ぎませんが、此所感上から見ての防禦法を云ふて見れば、 軸の中 央部即强力上の弱點に「ストレッス」を集中せしめない様にすること、 新造船の時に可成太さを太くしては如何がであらうかと思ふのであります 叉防腐蝕法を充分に施 直接的には黄銅卷を通しにし 間接 的 には無論 叉出來 或る 船

が も考へなければならね事ではなからうかと思ひます、それなれば古い船は軸が直ぐ痛まなければならない筈です 序に申上げ度いことは新造後七八年で軸が悪くなると云ふ事柄に就て、 それには「ゆとり」が充分に出來て居りもしませうし、又中間軸目身も彎曲し易くなる爲めに、螺旋軸の方に 船體と云ふものが漸次に强力が弱くなるのと、波に揉まれて彎曲する程度が漸次に大きくなると云ふこと 軸それ自身も悪くなるに相違ありませ

間 船尾管の兩端の抵抗を受くる場合も、 力を及ぼすことが少くなるのでなかろうかと思ふのであります、現に古い船では最後の「メインベアリング」即中 へ最も近い「ベアリング」の上の「ブラス」は、充分に締付ると焼けて來るので、締められないと云ふ様な事があ 何れにしても彎曲と云ふ事は重大な問題だと思ふて居るのであります、從て柴田敏千代氏所説の様な 往々にしてあり得可き事と思ふのであります。

以上はボンの所感に過ぎません。

た關係から思つた儘を申上ぐるのであることを諒として頂き度いのであります)。 付いた一二の不利の點のみを擧げて見ることと致ます、(私は伊東博士の成功を希望するものでありますが りませんでしたので、之を附ける為に受くる利益が附けない爲めに受ける不利より大きいとは思いませんでした。 頃と記憶して居りますが、 ファン 東博士の計畫及び希望は可能不可能の域は既に之を超越して居ります、故に殘る處は其便不便利益不利益の 一伊東博士の船舶操縦装置に就ては、私も亦之に就て工夫を凝らした事がありまして、 當時の私の工夫は頗る簡單なるものでありまして、伊東博士の案出せられたものの様に用意周到ではあ ション」としては不利の點を考察する方が順序でありまして、又不完全ではありますが自分で工夫し 其價値の判斷は百の理論よりも之を實驗するのに若くはないのでありますが、兹に私の氣 私が苦心中に米國だかで其發明があつて、 發表せられたのを聞いて中止したことがあ 慥か明治三十

ならない點だと信じます。 ば船長に監視的に腦力を費さしめると云ふことは云ひ得らるくことと思ひます、此點は大に考へて置かなければ 自分の思ふ様にならねので、 とによって、 しめることは餘程深慮を要することであらうと思います、元より船長は斯る際に船橋に居つて、 船長と云ふものは衝突とか坐礁とか云ふ様な危難が迫つて來た際には、 大事件を惹起すに至つたり又はせずして終るものでありますから、 焦慮する場合も少くありませんから一概には云はれないけれども、 其判斷力の餘器が少し許りあるとない 之に機關操縦をも兼ねて思慮せ 船橋操縦にすれ 機關室の操縦が

てとが出來るかどうかと云ふてとも考えて置かねばならね所でありまして、それは一つは人格及び心理の問題と に斯う云ふ場合になって船橋に居る人々が、 眼前に危険の迫るのを目撃しながら、 冷靜に機關

なることであります。

な外部に知れないで擠んだ錯誤は慣れて居つても決して少くはないのであります。 た場合は往々ありまして、幸に監視者が多い爲めに一二回轉で直つたとか、塞汽弇の開閉を間違へたとか云ふ様 て冷静の程度に相違のあるのは明白でありますが、それにも係らず機關室でさへ吾人の實驗によりますに、 狼が之に伴ふことが少くありませんので、現に沈没の危険があると云ふ様な報が來ると前進と後進とを間 斯う云ふ風になった時に船橋に居るものと、 間接に此危難を悟る所の機關室の機關士との間 12 機關操縦の上 佝ほ

と思はれます、 的陪審的地位を守ることは出來ません、自然操縱者は一人になつて間違があつても容易には分らないではないか とかの注目に熱中しまして、船橋の末端が最上船橋に立つのを常とします、 それでありますから機關室では操縦は一等機關士が之に當つて、 危嶮が迫つた際には船橋上では人手の不足を感じますのが常であります、 そして油差や他の機關士やも皆陪審的な地位に居るのと同様になって居ります。 つまり機關室と船橋と何れが冷静が保てるか、 何れが監視的注意が充分に行き屆くかと云ふこと 機關長は監督的陪審的地位 從て斯る際に特に必要な冷静な監督 又船長は自然船首とか船尾とか に居ることになっ

とが 來ないことはありませんが、 何故かと云 又機關室では船橋から機關を操縦せらるしてとになると、 出來る様になつて居りますが、 從て此期間には一等機關士が無言で頤を以て差圖をしても、順序上習慣上直ぐに他の人が之を了解するこ へば機關室では操縦には中心と配置がありまして、操縦中は相呼應して働作する様に訓練されて居り 腦の中に準備がないから咄嗟に判斷する必要が出來て來て、各自獨立せる判斷力が 突然不用意に操縦せらる、様になれば、 各自が極めて鋭敏に動作をせなければなりません、 中心と配置とは之を定めることが出

又大に考えなければならぬことであらうと思います。

準備が此裡に生ずるものであると云ふことをも考えねばならぬ事と思はれます。 つまり機關室では「テレグラフ」が鳴つて皆が之を見る、そして順序を踏まれるのを見乍ら秩序的に習慣的 入用になつて來る、從て從來の樣な下級機關士又は油差では間に合はない樣になりはせんかと思ふのであります、 判斷力が出て來るので、 機關室操縦が遅いと云ふことはそれ自身弊害であつても、 機關室では大事な判斷力の

概して損傷を大ならしむる場合は船橋操縦の方に多いと見なければなるまいと思ひます。 機關室よりは船橋の方で早く危險を感じて、之を停止し得ると云ふ樣な場合もないではありますまいけれども、 船橋では自然停止の時機を失つて、災害を過大にならしむる場合も少くないことと思はれます、尤も之に反して な場合など、即突然停止を要する場合には、機關室では瞬間にして停止して其害を免かるへことが出來るけれども 叉推進器が 何かに當たとか、プライミング」や「ドレーン」で危險だとか、機關の一 部に異衆が出來たとか 云ふ様

ばなりませね。 を行うとすれば、 出 又通常三千噸乃至五千噸の汽船では出入港其他の際には船橋には、 來ません、 さうして三等運轉士は船長の使命を帯びて奔走する場合が澤山あります、 責任上熟練した運轉士と生徒の様なものとを増員して、 船長と三等運轉士と文けしが配置すること 機關の操縦と日誌の記録をさせなけれ 斯う云ふ風で船

以上の樣であるから此裝置は使はれないと云ふのではありませね、前にも申す如く實際の判斷は實驗の上で定め は参りません、 それで使用區域も決定するのでありませうが、兎に角以上を記して博士及び先輩の一顧に供へることしするので 以上は氣の付いた點の一二でありまして、最も不便な場合と不利な點許りを撰み出して見たのでありますから、 操縦や日誌の勞を省かれたからとて、 それなれば機關室の方では操縦や記錄の用事がなくなるから、 機關室の人員は當直に割り當て、必要な人間文けしか居らない、それであるから當直以外の用事 其爲めに人間を減らすと云ふことは出來ないのであります。 人員を減らしてもよいかと云ふと決して

あります。

Some Hints Regarding Deflection of Ships due to Temperature Difference.

By

Dr. K. Suyehiro, Member.
T. Inokuty, Junior Member.

(Read before the Spring Meetings of the Society of Naval Architects, Japan. April 10th, 1916.)

(The importance of investigating the present subject was first noticed by Prof. Purvis who suggested to one of our students to study this as a topic for his graduation essay. However, most likely due to lack of time, the student was unable to solve the problem set to him. So we have endeavoured to investigate the subject sufficiently to get some hints in this direction. Under such circumstances, several points involved in the present paper—for instance the relation of stresses in heated and unheated portions and the assumption (2) as to temperature distribution—are due to the suggestion by Prof. Purvis.)

Deflection of ships is undoubtedly one of the important problems connected with the structural strength of ships and its actual measurement as well as theoretical investigations thereon are reported to kindred Societies from time to time. As far as our knowledge goes, except one paper only, written by F. S. Smith of U. S. Navy, the papers deal with the deflection caused by loading. In the paper just mentioned, it was reported that in the Neptune, an American Collier $(L520' \times B65' \times Drft. 27' - 7\S'')$ maximum increase of hog of 1 inch was observed on a rise of temperature of 7 degrees F (temperature of air?). If such an enormous amount of deflection caused by temperature difference is really possible, all the information with regard to deflection of ships so far obtained—especially the deflection after launching, an operation in which temperature distribution

^{1).} Read and Stanbury, "On the relation between stress and strain in the structure of vessels" I.N.A.

Siemann, "Elastische Formänderung des Schiffskörper," Schiffbau, 1910. Cornbrooks, "Data on hog and sag of merchant vessels." Am. S.N.A.M.E., 1915.

^{2).} Smith, "Change of shape of recent colliers," Am. S.N.A.M.E., 1913.

is likely to be totally upset-will perhaps be of no value.

The object of the present paper is to see mathematically to what extent a ship may experience deflection under an assumed mode of temperature distribution. Evidently the temperature of a ship will generally be distributed in a very complicated manner (see the end of this paper), and consequently the resulting deflection will not permit of being attacked mathematically. As a preliminary investigation, we attempt here to find only the qualitative value of the deflection, with which actual observation should be compared.

Throughout this paper the following nomenclature is used (refer to Fig. 1-3.):-

L = length of ship.

 $\Delta x = \text{small portion of the length.}$

 $\partial x = \text{uniform elongation of } \Delta x$.

 $\partial \hat{\xi} = \text{elongation}$ of the top of the structure due to pure bending of Δx .

Y =distance of the top of a section from its neutral axis.

Y'= ,, , , bottom of a section from its neutral axis.

y =distance of a point in a section from its neutral axis.

z = amount of hog (or sag).

a =sectional area of a section.

da = infinitesimal sectional area.

 $\partial \theta$ = angle through which one end section of Δx is turned relative to the other.

I = moment of inertia of a section about its neutral axis.

h =distance between water line and neutral axis.

E =stretch modulus of steel.

k =coefficient of thermal expansion of steel.

t = temperature.

Now if a ship is heated by the sunshine or other agent, the heat will be conducted through the hull to the sea water and surroundings. When the flow of heat becomes steady, a definite distribution of temperature will be attained in the ship.

Let us suppose, for the sake of simplicity, the distribution in a section is the same at both sides of the ship and put

$$t=\!f\left(y\right) .$$

In consequence of such a non-uniform distribution of temperature the ship will be subjected to change of its shape, which may most likely be analysed into a pure elonga-

講

演

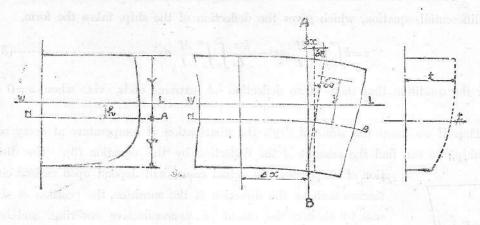


Fig. 1.

tion and a pure bending. As these deformations are caused by internal strain, not by an external force, stresses in the ship will be so distributed that the resultant force of the stresses in every section of the ship is in equilibrium in itself.

From the condition that the resultant force of the stresses in the section AB (see Fig. 1) vanishes, we have

$$\int \frac{E}{\Delta x} (\partial x - kf(y)\Delta x) da = 0 \qquad (1)$$

Similarly, as the resultant couple of the stresses must also become zero, we have

$$\int \frac{E}{\Delta x} \left(\frac{\partial \xi}{Y} y - kf(y) \Delta x \right) y da = 0 \dots (2)$$

Of these two equations, the former has no importance in the present problem. From the latter, we obtain

$$\frac{\delta \hat{\xi}}{Y \Delta x} I = k \int f(y) \, y da$$

Now if we put $\int f(y)yda = M$ and make Δx indefinitely small, this equation is transformed into

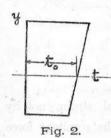
$$\frac{d\hat{z}}{Ydx} = \frac{d\theta}{dx} = \frac{d^2z}{dx^2} = k \cdot \frac{M}{I}$$

where z is the amount of hog as already described. As is well known, the integral of

$$z = k \int_{0}^{x} \int_{0}^{x} \frac{M}{I} dx^{2} - \frac{kx}{L} \int_{0}^{L} \int_{0}^{x} \frac{M}{I} dx^{2} - \dots$$
 (3)

under the condition that there is no deflection at extreme ends, viz. when x=0 or L_{s} z=0.

Thus if we know the value of f(y), the distribution of temperature at every section of a ship, we can find the amount of the deflection by the equation (3). The distribu-



温度の差異に基づく船體の變形に關する研究

tion of temperature, in actual cases, will depend upon various circumstances such as the direction of the sunshine, the position of shadow cast by shelter, the extent of nonconductive covering, and heat of engine and boiler space. Consequently it is not only very complex in its nature but never attains a constant state. However it will suffice our present purpose, if we assume a simple mode of distribution of temperature, which may not be far from actual occurrence.

(1) If temperature is so distributed throughout a ship that it changes linearly with height and attains extreme value at the top and bottom.

Distribution of such a nature may occur in a shallow draught boat when she is heated by the sunshine from right above. In this case we may assume

$$t = f(y) = \tau y + t_0$$

in which τ is temperature gradient per unit height and t_0 temperature at neutral axis. Then

$$M = \int_{-Y'}^{Y} (y) y da = \int_{-Y'}^{Y} (\tau y + t_0) y da = \tau \int_{-Y'}^{Y} da = \tau I$$

As it is assumed that the distribution of temperature is the same throughout the ship, we have from (3),

$$z\!=\!k\!\!\int_0^x\!\!\int_0^x\!\!\tau dx^2\!-\!\frac{kx}{L}\!\!\int_0^L\!\!\int_0^x\!\!\tau dx^2\!=\!\frac{k\tau}{2}\cdot x(x-L)$$

The amount of hog is evidently a maximum at $x=\frac{L}{2}$ i.e. at midship, and it is

$$z=\frac{L^2}{8}k\tau$$
,

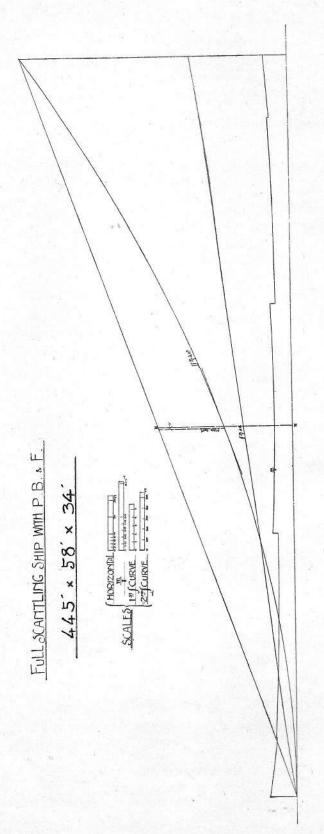


Fig. 4.

Therefore, when the temperature gradient is 1° C per foot

z in inches=
$$1.25 \times 10^{-7} \times L^2$$

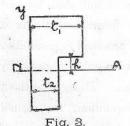
A few examples are here shown:—

Length of ship	Maximum deflection for a temperature gradient of 1° C per 1'
580′	4.20"
445′	2.48"
370′	1.71"

The parts above and below the water line are at different, but uniform temperatures.

Temperature distribution of such a nature may occur in a ship at night or on a cloudy day when the upper part assumes the temperature of the air and the lower part

that of the sea water; in certain other cases it is also conceivable.



Now let t_1 be the temperature of the part above the water line and t_2 that of the part below the same. Then,

$$y = \text{from } h \text{ to } Y$$
 $f(y) = t_1$
 $y = ,, -Y', h$ $f(y) = t_2$

in which h is the distance between the neutral axis and the water line. In this case,

$$\int f(y) y da = \int_{-Y'}^{h} t_1 y da = t_2 \int_{-Y'}^{h} y da + (t_1 - t_2) \int_{h}^{Y} y da + t_2 \int_{h}^{Y} y da = t_2 \int_{-Y'}^{Y} da + (t_1 - t_2) \int_{h}^{Y} y da = t_2 \int_{-Y'}^{Y} da = t_2 \int_{-Y'}^{Y}$$

where $t=t_1-t_2$, the temperature difference and $m=\int_{-y}^{y}da$, the moment of the sectional area above the water line with respect to the neutral axis.

Therefore, under the assumption that one and the same temperature distribution exists throughout the ship, we have from (3),

$$z = kt \left[\int_0^x \int_0^x \frac{m}{I} dx^2 - \frac{x}{L} \int_0^L \int_0^x \frac{m}{I} dx^2 \right]$$

This integration has been performed graphically in a well known manner for three different ships (one of the graphical integrations is shown in Fig. 4 as a sample) and the results obtained are shown in the following table:—

講

演

		M	Max. deflection due to				
Type of ship	Dimensions	Draught	a temperature difference of 1° C	Position where max. deflec- tion occurs.			
Shelter dk. with f'cle	$580' \times 68' \times 46' \ (\mathrm{to} \ \mathrm{S.D.})$	31'-10"	0.153''	13'-0'' abaft			
Full scantling with p. b. and f	$445' \times 58' \times 34'$	26'-3"	0.092''	1'-0" ,, _			
Spar dk. with p. and partial shelter deck.	$370' \times 47' \times 30'$ (to S.D.)	21'-6'	0.087"	3'-9" ,,			

Putting aside the enormous values derived from the assumption (1), we can see from this table that if a temperature difference of say 10° C, which is not improbable, exists between the parts above and below the water line, we might expect the occurrence of a ma ximumdeflection of somewhere about one inch in a medium sized boat. This amount is evidently comparable with the extent of deflection which is generally observed due to loading or after launching. Therefore, it seems that in measuring deflection of a ships—especially in the case of launching—it would be well, if possible, to measure the

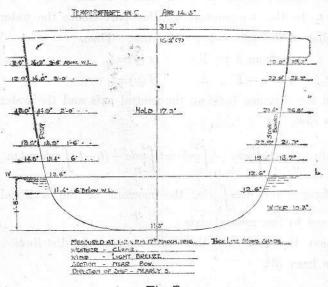


Fig 5.

temperature of hull and its surroundings; unfortunately this is a matter of practical impossibility when she is irregularly heated by the sunshine. Though, without further information, we cannot assert it, yet the discrepancy of the permanent stresses in the two sister boats Yasaka Maru and Suwa Maru recorded by the Terano-Yamamoto strain-meter, (3) may perhaps be traced back to a temperature deformation.

Actual observation of temperature distribution.

In order to see how temperature is distributed in an actual ship, we measured temperature of a barge at various spots along the line of a frame by means of a thermo-

⁽³⁾ 寺野山本兩氏著(新案「ストレインレコーダー」ト其應用)及今岡氏質疑 造船協會々報 第十四號

electric junction. The observed distribution is shown in Fig 3. As the diagram shows, temperature of this ship had a mode of distribution intermediate between the assumptions (1) and (2). However, we could neither measure the distribution of temperature throughout the ship nor the actual deflection that occurred. Therefore, we must hesitate to draw conclusions from such an incomplete observation.

Throughout this paper, we are only theorizing. Unfortunately we have not often the chance of making actual measurement in a ship and cannot say to what extent our investigation holds good in actual case. We should be much gratified if somebody who is interested in this problem and is daily occupied with ships would test the validity of our results by making further experiments along this line. 識

演

On Dr. Yokota's "General Expression for Stress Components in Two-Dimensional Problems of Elasticity."

By

Dr. K. Suyehiro, Member.

(Read before the Spring Meetings of the Society of Naval Architects, Japan. April 10th, 1916.)

I am not qualified to discuss a paper written by such an able mathematician as Dr. Yokota; the paper is far beyond my mathematical knowledge. But, by nomination of our Chairman, I was designated to write the present short note.

Dr. Yokota's paper is the most severest mathematical paper ever put before the Society, and ought perhaps rather to be put before a mathematical society. His method of solving elastic problems is altogether original, and he is to be congratulated on his success in introducing a new method to the mathematical theory of elasticity.

However, so far as its practical applicability is concerned, it seems that the method is not without inconvenience. The expression found by him has too much of a fundamental form to be applied to solving elastic problems. As is described below, the nature of the expression is just as if a potential function, or the like, satisfying the equation were said to be expressed by V=f(x+iy) in general. No doubt such an expression of the potential function would be the most general in a purely mathematical sense. But in practice the expression is, with a few exceptional cases, generally much developed for solving potential problems. In a similar manner his general expression has room for much interpretation before it may become surmountable by us who are not generally trained to manage such higher mathematics as the theory of functions. If the expression be discriminated according to various systems of co-ordinates and put into a more feasible form freed from complex quantities, we should obtain those expressions given by Love ("Treatise on the theory of elasticity," Vol. I, Page 334.) As Dr. Yokota starts the solving of each problem from its very source, the operation, in some cases, may become unduly complex, for instance, while his first example can be solved after Love's method in a few lines, it takes a comparatively prolonged and rather difficult process in Dr. Yokota's hands. This I say from an engineer's stand point. Apart from its practical applicability, his method has many strong points—in that the expression is practically independent of the sort of orthogonal co-ordinates; besides it has a novel nature. It may be added that a solution of mathematical or physical interest is not necessarily to be expected to have also an engineering interest. With regard to the bearing of the paper on practical questions, I can say nothing, because, so far as I can guess, he lays no stress on practical questions; although he shows several examples he does not tell us how they are to be applied to the practical questions of naval architecture.

It may not without interest to a few among the members, who do not absolutely refrain from mathematical formulæ, to show how his expression and Airy's equation are connected each other.

As is well known among mathematicians

$$\frac{\partial^4 F}{\partial x^4} + 2 \frac{\partial^4 F}{\partial x^2 \partial y^2} + \frac{\partial^4 F}{\partial y^4} = 0.$$

in which F is Airy's "stress function" having the nature:-

$$X_x = \frac{\partial^2 F}{\partial x^2}$$
, $Y_y = \frac{\partial^2 F}{\partial y^2}$ and $X_y = -\frac{\partial^2 F}{\partial x \partial y}$.

Expressing symbolically $D = \frac{\partial}{\partial x}$ and $D' = \frac{\partial}{\partial y}$, we have

$$(D^4+2D^2D'^2+D'^4)F\equiv (D^2+D'^2)^2F=(D-iD')^2(D^2-D'^2+2iDD')F=0\;.$$
 Now put
$$(D^2-D'^2+2iDD')F=X_x-Y_y-2iX_y=V.$$
 Then, as
$$(D-iD')^2V=0\;,$$

$$V=yf_3(x+iy)+f_2(x+iy)\qquad \cdots \qquad (1)$$
 Again put
$$(D^2+D'^2)F=X_x+Y_y=V'.$$
 Then, as
$$(D^2+D'^2)V'=0\;,$$

$$V'=Rf_1(x+iy)\quad \text{or}\quad If_1(x+iy)\qquad \cdots \qquad (2)$$

in which R and I are written after Yokota's notation.

講

In these equations (1) and (2), f_1 , f_2 and f_3 are arbitrary functions connected each other by the following equation:—

$$(D^2+D'^2)V=(D+iD')^2V'$$

As $(D^2+D'^2)f_2$ is evidently zero,

$$(D^2+D'^2)yf_3(x+iy)=(D+iD')^2\{Rf_1(x+iy) \text{ or } If_1(x+iy)\}$$

Therefore, by the elementary principle of a function of a complex variable, namely

$$(D+iD')^2Rf_1\!=\!\frac{1}{2}\,(D+iD')^2f_1\ \ {\rm and}\ \ (D+iD')^2\,If_1\!=\!-\frac{1}{2}\,i(D+iD\,)^2f_1\,,$$

we have, when R is taken,

$$f_3(x+iy) = if_1'(x+y)$$

and when I is taken,

$$f_3(x+iy) = f_1'(x+iy)$$

Thus, we have

$$X_x - Y_y - 2iX_y = iyf_1'(x+iy) + f_2(x+iy) \ X_x + Y_y = Rf_1(x+iy)$$

or

$$X_x - Y_y - 2iX_y = y f_1'(x+iy) + f_2(x+iy)$$

 $X_x + Y_y = If_1(x+iy)$

The former pair of equations are the expression obtained by Dr. Yokota. Thus it seems that his expression corresponds to intermediary integrals of Airy's equation. Lastly, it is to be added that the fact that Dr. Yokota's expression is derivable from another, does in no way lower its merit; in mathematical science every specialized equation can be derived from its fundamental one.

Some Hints Regarding Deflection of Ships due to Temperature Difference.

部語 デザラモテンとある大場 防衛 発数と下足 久々 太田 雑誌

正員 工學博士 末 廣 恭 二

最初ノ温度ノ差=基ク船ノ「デフレクション」ト云フコトハ斯ウ云フコトラヤツタラ宜カラウト云フバーピス先生ノ御創意=基ヰテ,昨年ノ工科大學三年生ノ卒業論文トシテ學生=課セラレタノデアリマスガ,時間ガ無カツタ為メ完全=行カナカツタ,ソレヲ敷衍シテ見様ト思フテ私共兩名デャツテ見マシタガ,大體ノヤリ方ハコヽ=書イテゴザイマス,「アツサンプション」モ書イテゴザイマス,ソレカラ出マシタ数字モコヽ=書イテゴザイマス,併シ最後=書イテゴザイマス通リ,之レハ唯ホンノ理窟ヲ逃ベタノミデ,實際斯ウ云フ事ハドウナルモノデアルカト云フコトハ精細=實測ヲシテ見ナケレバ分ルモノデゴザイマセヌ. 併シ我々ハ不幸ニシテ實測ヲ為ス機會ニ乏シキモノデアリマスカラ,コヽデハ唯,若シ斯ウ云フ風ナ温度ノ分布が成立ツナラバ,コノ位ニナリハシナイカト云フコトヲ申上ゲルニ過ギマセヌ. ソレカラモウーツノ

On Dr. Yokota's "General Expression for Stress Components in Two-dimensional Problems of Elasticity."

ト云フノハ是ハ最初ニ書イテゴザイマス通り、實ハ私ノ力ノ及ブ所デハゴザイマセヌカラ、何モ申スベキ筈ノモノデモナシ、申シタクモナイノデゴザイマスガ、横田君ガ之ニ關スル論文ヲ二回迄モ造船協會デ御讀ミニナツタニ拘ラズ、一モ「デスカッション」が無イノハ甚ダ不都合デアルト云フコトデ、理事アタリデ、若シモ何カ話スコトガ出來ルナラバヤツラ見ナ

イカト云フ御勸デゴザイマシタカラ、大變時機ガ後レテ居リマスガ、雜誌 ノ方ニ寄稿シマス積リデ書キマシテゴザイマス. ソレデ其體裁デ書イ タノデゴザイマスガ,併シャハリ雑誌ニ寄稿ト云フコトョリペーパーニ シテ讀ンダラ宜カラウ. 横田君ガソレニ付テ御答下サルニモ工合ガ宜 カラウト云フ事デデデスカッショントナルベキモノヲ一ノペーパートシ テ讀ミマスニ過ギマセヌ. 尚ホ附加ヘテ御斷リヲ致シテ置キマスガ,サ ウ云フ風ナ理事アタリカラ御話ガアツタ為メ已ムナク書イタ次第デア リマシテ,元來私ノ力ノ及バヌ所ラゴザイマスカラ,或ハ盲者ガ象ヲ搜ツ テ,耳ノ部分ダケ搜ツテ見テ,象ハ平ベツタイモノデアルト言フタト云フ ヤウナ,トンチンカンノ「コンクリユージョン」ヲ致シテ居ルカモ知レマセ ヌ.ドウカ宜シク横田君ノ教ヲ受ケタイト思ヒマス.

討

Discussion.

O Dr. F. P. Purvis.

Note on Prof. Suyehiro's and Mr. T. Inokuty's Paper.

The paper is one which is naturally very interesting to myself; whether the problems involved are of practical importance, or only of academic interest, I am not quite able at present to decide. I have pointed out to the authors that the method used is capable of further application than they give it; and it is this further application that I pressed upon the student last year in the case alluded to at the beginning of the paper. This further application is the induced stress brought about by the non-uniform heating of the structure; each part, from its position, is free to take up part only of the expansion or contraction due to temperature; in so far as it cannot respond to the temperature a stress remains, compressive for increase, tensile for decrease of temperature. The value of this stress is easily derived from the expressions in the paper. Taking compression positive, tension negative,

Internal stress=
$$E\left\{kf(y) - \frac{\partial x}{\Delta x} - \frac{d\xi}{\Delta x}\right\}$$
.

If we apply this expression to case (2) on page (5). & take

B = area above water, temperature t_1

A=total area, so that A-B= area below water, ,, t_2

m =moment of B about N.A.

$$-m =$$
 , $A - B$, , .

then from equation (1) on page 3,

$$\frac{\partial x}{\Delta x} = k \frac{Bt_1 + (A+B)t_2}{A};$$

and from equation (2) on page 3,

$$\frac{\delta_{\overline{z}}^{2}}{\Delta x} = k. \ Y \frac{\int f(y)y \ da}{\int y^{2} \ da} = k \frac{Y}{I} (mt_{1} - mt_{2})$$

$$= k \frac{Y}{I} m (t_{1} - t_{2});$$

also $kf(y)=kt_1$ for the portion above water,

$$k+t_2$$
 ,, ,, below ,, .

Internal stress =
$$K. E. (t_1-t_2) \left\{ \frac{A-B}{A} - \frac{Y.m}{I} \right\};$$

and below water,

Internal stress =
$$K.E.(t_1-t_2)\left(-\frac{B}{A}-\frac{Y.m}{I}\right)$$
.

With any of the three ships given on page 6, for $t_1-t_2=10^{\circ}$ C.

Maximum stress works out about 1. ton per sq. inch. It is at least worthy of further consideration whether stresses of this nature (when added to other stresses) could ever become of serious importance.

〇横田正年君

私ガー昨年ノ暮ト昨年ノ春デシタカ,讀ンダペーパー」二對シテ末廣君 ガ許ヲシテ下サレタコトニ付ラハ大變有難イコトト思ヒマス,自分ハ是 マデニ三度,斯ウ云フ風ナペーパー」ヲ書イタコトガアリマシタガ,ナカナ カソレヲ讀ンデ下サル方ガアリマセヌ、從テ批許モ無シ、其儘ニナル場合 ガ多カツタノデアリマス. 是ハ唯我々造船協會バカリサウ云フ次第デ ハナイノデ,現ニ理科ノ方ノ方々ノヤツラ居ラルル所ノ數學物理學會ニ 於ラハ是ハー例デアリマスガイッカ田丸卓郎君ガ或論交ヲ讀ンデアト カラソレヲ其會ノ雜誌ニ出シタ所ガ,誰モソレヲ讀ンデ吳レタ人ガ無イ, 唯一人長岡半太郎君ガソレヲ讀ンデ,其次ノ會ノ時ニ,何カ終ノ方ノ批評 ヲチョットャッタ. 其時ニ田丸君ガ大變ニ喜ンデ,少クモ長 岡君ハ自分 ノ「ペーパー」ヲ終マデ讀ンデ下サレタ,實ニ有難イト御禮ヲ言ッタコトヲ 覺エテ居リマスガ,ソレト同ジャウナ譯デ,私ノ先般ャツタツマラヌ「ペー パーニ付ラ末廣君ガ藹ンデ批評シテ下サレタコトハ誠ニ嬉シク慮ズル 次第デゴザイマス,デ之ニ付テハ折角讀ンデ下サレタノデアリマスカラ, 私ノ意見モ申述べ、又同君カラ之ニ對スル御意見モ同ヒ、種々ヤリタイト 考~テ居ッタノデアリマスガ,併シ最早時間モ追々迫ツテ参リマシタノ

末廣井口雨氏論文に對する討論

デ,サウ云フ譯ニ参リマスマイカラシテ. 唯簡單ニ私ノ考ダケヲチョット心付イタ所ダケ御話シラ,ソレデ終リタイト思ヒマス.

私ノ今ノ論文ハ斯ウ云フモノヲーツャッテ見ャウト云フ考ヲ起シタ ノハ抑々末廣君ガ種々「ストレッス」ノ問題ヲ解カレタ「ペーパー」ヲ讀ンデ ソレカラ又イングリスノ「ペーパー」ナドヲ讀ンデ,其手數ガ如何ニモ面倒 デアル、種々ノ手續ヲ經テ問題ガ解ケルト云フ風デアルカラ、是ハ我々「エ ンジニアガ使フニハ甚ダ面倒デアル. 何カ兹ニバウンダリーコンデシ 』ン」ヲ與ヘテ,普通「バウンダリー.コンヂション」ニ於ケル「ヂスプレスメン ト」或 ハストレッスコンポーネントノドチラカ,或ハ雨方合セタモノガ何 カ條件ヲ與ヘルカラ其與ヘタモノデ答ノ出ルモノヲ造リタイ,途中ノ「プ ロセス」ヲ省イテ何カー遍デ答ノ出ルモノヲ造リタイト云フコトガ,元此 論文ヲ作ッタ趣意デアッテ,從テ我々「エンジニア」が使フニ最モ都合ノ好 イ形ヲ自分ハ出シタ積リデアリマス,不幸ニシテ末廣君ノ書カレタモノ ヲ見ルト「エンジニア」ニハ少シ面倒過ギルト云フ御意見デアリマスガ,私 ノ考ハサウデナイ,元々「プラクチカル」ニー温ニ答ノ出ル,途中ノ面倒ノナ イモノヲ造リタイト云フ趣意デアリマス,ソレカラ問題ニ依ツテハ却ラ 面倒ニナルト云フコトモ,ココニ末廣君ガ御書キニナイラ居ル,コノ「エキ ザンプルワンノ如キ、私ノ考デハラブガ解イタモノヨリ横田ノ解イタ方 ガ簡單デアルト思ヒマス. 併シソレハ又人ニ依ツテ種々言フ所ガアリ マセウカラ,必シモ私ハソレヲ主張スルノデアリマセヌ.又中ニハ末廣君 ガヤラレタョリモズット簡單ニ解ケテ居ル問題モアリ、又却テ面倒ニナ ツテ居ルノモアリマス種々ノ問題ラエキザンプルトシテ解イタノデア リマスンレカラ「プラクチカル・アップリケーション」ニ對スル説明ガ無イ ト云フコトデアリマスガ,是ハ私ノ解イタ問題ハ既ニモウ末廣君ナリイ ングリスナリ,或ハ其他ノ種々ノ人ガ解イテ居ルモノデ,ソシテワラクチ

討

米廣井口兩氏論文に對する討論

カルニドウ云フ風ニ應用スルカト云フコトハ末廣君,イングリス等ガ精 シク説明サレテ居ルノデアルカラ、殊更ニ私ガ兹ニ此論文ノ「エキザンプ ル」トシテ説明ヲシナカツタノデアリマス何カ新シイ問題ガ解カルレバ 其二付テ十分プラクチカル」プサイド」二入ツテャリタイト思ヒマスガ. 併ナガラ斯ウ云フ風ナモノデ解ケル問題ハ大抵定マッテ居ルノデ、略こ 今迄ノ例デ盡キラ居ルモノト考へマス,是ヨリ新シイモノハ餘リ出來ナ イャウニ考へマス.ソレカラ末廣君ハ「エーアリー」ノ「ストレッス.フアンク ション」カラ「ゼネラル.ストレッス」ヲ出サレタノデアリマスガ,此「ストレツ ス.ファンクション」ヲ出スニ付テ種々ノ「コンヂション」ガアル「エーアリー ノ「ストレッス.ファンクション」カラ「ストレッス」ヲ 出 シ「ストレッス」ヲ「ゼネ ラルニシタト云フノデ,詰り或幾ラカノ假定ガアツテ,ソレヲ本トシテ,左 ノ方ニ行ケバストレッス.ファンクションガ出,右ノ方ニ行ケバ横田ノ「ゼ ネラル.エキスプレッション」が出ルノデ,片方ノモノヲ持ツテ來テコツチ ノ方ヲ證明シタト云フコトニ當ルト私ハ考へマスツレカラ私ノ最モ苦 心シタノハデスプレスメント」バウンダリーコンデション」ヲ與ヘタト キニ「ゼネラルストレョス」ヲ出シタ「ストレッス」バカリデ「バウンダリーコ ンデション」ヲ與ヘタニ限ラズ「デスプレスメント」デ與ヘタトキモ兩方出 シタコトデアリマス,其パーテキュラルストレッス」バカリ・デバウンダリ -.コンヂション」ヲ與ヘテ居ルトキハコヽニ末廣君ガ出サレタ此式ヲ使 へぶ宜シ、デスプレスメント」或ハデスプレスメント」ストレス」ト兩方ヲ以 テ「バウンダリー.コンデション」ヲ與ヘタトキハ矢張リ横田ノ初ノ方ニ出 シテアルモノヲ使フト都合ガ宜イト考へマス,ソレハ其「エーアリー」ノ「ス トレッス.ファンクション」カラ出スコトガ出來ナイモノデ,初メノ假定カ ラ段々ト順序ニ行カナイト出ナイモノト考へマス.

マダ種々ポツポツ考へテ居ツタノデゴザイマスガ,今思出シタ所へ其

討

クラキノモノデアッラ,兹ニ種々末廣君ガ私ノ「ペーパー」ニ對シラ讃解ヲ 列ベラレテ居ルノハ甚ダ恐縮スル次第デ,是ハ決シテ當ラヌコトト考へ マス,ドウカ末廣君ニ於テモ御遠慮ナシニ横田ノ缺點ヲ尚ホ此上ニモ御 話下サレバ幸デアルト考へマス.

〇末廣恭二君

最初=バービス博士ノ「デスカッション」=御答イタシマスガ、元々此問題ハバービス博士ノ御創意=基ヰテ居ルモノデ唯學生ノヤリ切レナカツタコトヲ私ガャツタ、少シ歩ヲ進メタト云フダケノコトデアリマス、此問題ハ實際家ノ始終船=接觸シテ居ル人ガモツト實驗ヲ積ンデ下サレナケレバ事實ドウデアルカト云フコトハ分リ兼ネル、コ、=書イテアリマス通リ、スミスノ運炭船=就テ唯一回ノミノ「オブサーベーションガアルダケデ、其外=ハ何モ無イカラ實際觀測ガ甚ダ不充分デアル・ドウカ實地=關係ノアル方が御暇ガアツテ且ツ多少ノ興味ヲ持タレルナラバ實測ヲサレムコトヲ私ハ希望シテ居ルノデアリマス、バービス博士ハ本問題=聯關シテ「ストレッス」ノコトヲ論ズ可キダガ之レガ論ジテナイト云フコトヲ云ハレマシタガ、此論文ヲ前以テ御目=掛ケタトキ旣ニ同様ノ御注意ヲ受ケタノデアリマシテ、博士ノ云ハレル通リ此問題ノ「オンリーハーフ」ヲマツタノミデアリマス、オリジネーター」タルバービス博士ガアトデ何カ「ノート」ヲ書イテャルト云ハレマシタガ是ハ深ク感謝スル次第デゴザイマス.

ソレカラ今横田君カラ私ノ同君ノ論文ニ對スル批評ニ對シラ更ニ御批評ヲ受ケマシタ本文ニ御斷リ申シテアル通リ,無我夢中デ書イタノデアリマシテ,先刻モ申シタ通リ,象ノ耳ダケ搜ッテ象全體ト思ッタト云フノト同ジデアリマス「ストレーン」デ現ハサレテ居ル式ヲ使ッテ「エキザン

プルニ及三ヲ解カレテ居ラルヽヿハ知ツテ居リマスガバストレーンノ式 ノ方ハ私ハ氣ヲ付ケテ居ラナカッタノデ,耳ヲ搜ッテ足ノ方ヲ搜ッテ居 ラナカツタノデアリマス. 一般ニ「エーアリー」ノ式ハヨク使ハレテ居ル モノデアリマスカラ、私ハソレヲ使ッテ出シタラドンナモノカト云フコ トヲ考へテ試ミタノデアリマス,ソレカラ「アップリケーション」ノコトヲ 御書キニナラナカツタ趣意ハ今ノ御話デ十分了解スルコトガ出來マシ タ,ソレカラ問題ガムヅカシクナル,ヤサシクナルト云フコトハ,是ハ無論, 人々ノ考ニョルコトデ,變ナ數學ガカツタコトヲ申シテ如何デゴザイマ スカ知リマセンガ人ニ依ルト何デモ物體ノモーション」ヲ解クニ「ラグラ ンデュノ式デ解ク人ガアリ、或ハ普通ノ「アクセレレーション」ノ式デ解ク 人ガアリマスガ,之レハ人々ノ習慣ャ好ミニ因ルコトデアリマス,私ガコ 、二申シタ趣意、外ノ方法、何レモエラスチシチー」/理論/土臺カラ 出發シテ居ルガ色々途中ノ運算ヲシテ各種ノ「コールデネート」ニ對シテ 解式ヲ與ヘルマデニ持ラ來テアル故ニ誰デモソレニ實際ノ條件ヲ當嵌 メサヘスレバ良イノデアルカラ簡單デアルト云フ意味デアツテ,即普通 ノ方法ハ近クナッラ居ル各々離レタ途ヲ通ジテヲルガ其目的ニ達スル 結局問題ヲ當嵌メルヤウニ迄ヤツテ居ルカラヤサシイト云フノデ其途 中ガヤサシイトカヤサシクナイト云フノデハナイ,横田君ノ方法、出發 點カラ目的地迄ノ距離ハ無論近クナツテ居ルト私ハ考ヘテ居リマスガ 何レノ場合デモ唯初メカラ出發セネバナラヌト考へマス

○會長 (寺野精一君) マダ此問題ニ付テハ種々御議論ガアラウト信ジマスガ,丁度十時ニナリマシタカラ閉會イタサウト思ヒマス,就テハ會ヲ閉デマス前ニ私個人トシテー言末廣君ニ向ッテ御禮ヲ申上ゲタイコト

ガアリマス,タシカー昨年デゴザイマシタカ本會ニ於テ私ト山本武藏君ノ考案ニ係ル「ストレーン,レコーダー」ノ「アップリケーション」ヲ御披露シタ際ニ,其成績ニ就テ疑ヲ存シテ居リマシタ點ニ付テ解釋ヲ與ヘテ下サレテ,暗夜ニー道ノ光明ヲ認メタ感ガアリマス,爾來其點ニ就テ餘リ深ク・研究セズニ居リマシタガ其見當ヲ與ヘテ下サレタニ付テハ將來我々ハサウ云フ意味ヲ以テ更ニ研究シタイト思ヒマス,此點ハ末廣君ニ深ク感謝ノ意ヲ表シマス.

サテ末廣君ノ雨方ノ「ペーパー」トモ非常ニ有益ナル,且ツ御骨ノ折レタ「ペーパー」ト考ヘマスガ,斯ノ如キ有益ナル「ペーパー」ヲ本會ニ提出シテ下サレタコトハ本會ノ深ク感謝スル所デゴザイマス,會員一同ニ代リマシテ末廣君ニ御禮ヲ申上ゲマス.

講

ON THE STAL TURBINE.*

BY

Mr. Helmer Hedberg.

(Read before the Societies of Naval Architects, and Mechanical Engineers on the 4th February, 1916.)

The Stal turbine is the name of the Ljungström Steam Turbine, as manufactured in Sweden and has its name from the initial letters in the manufacturing concern, Svenska Turbinfabriks Aktiebolaget Ljungström, i.e. Stal. The inventors are two Swedish engineers, Birger and Fredrik Ljungström, who after thoroughly developing the invention started the manufacturing company, Stal, at Finspong, Sweden.

Before starting a more detailed description of the Stal turbine we will make a brief comparison between a Ljungström-turbine and an ordinary turbine of the Parsons type, both shown in the Figure 2 diagrammatically and in vertical section, the latter above, the former below in the Figure. The comparison with the Parsons turbine is made, because that type as well as the Ljungström-turbine, is a pure reaction turbine, so that the latter is a further development of the former. As can be seen from the sections, the size of the whole Ljungström-turbine is about the size of the exhaust of Parsons. both cases the exhaust is practically of the same size, as about the same amount of steam passes through the two turbines. While the exhaust of the Ljungström-turbine holds the whole turbine blading, the Parsons turbine apart from the exhaust consists of a stator arranged in steps and of considerable size, inside of which a rotor also arranged in steps is moving supported by bearings on both sides. Between those revolving and stationary parts are situated, the blade rings through which the steam passes in axial direction from one end of the turbine to the exhaust at the other end. The corresponding parts of the Ljungström-turbine consist, as shown by Figure 2, of only two discs, running in opposite direction, between them the necessary blade system is placed, so that the steam instead of working in an axial direction as in the Parsons turbine, works in radial direction from the centre out to the periphery, in both cases going downwards through the exhaust. Instead of the special bearings used by the Parsons turbine, the

^{*} 本文は講演に使用せしを更に増補訂正せしものなり

revolving parts of the Ljungström-turbine are connected to the shaft ends of each generator and special bearings for the turbine thus made unnecessary. The axial balancing of the Parsons turbine, necessary on account of the step-formed revolving drum, is accomplished through special steam pistons, which revolve with the drum, and the diameters of which are chosen so as to enable the axial balancing to be maintained through a special thrust bearing outside one of the main bearings. In the Ljungstrüm-turbine the corresponding axial balancing is performed simply through surfaces under pressure on the rear side of the rotating discs and by means of special automatic tightening arrangements, which will be described later on, and which make the thrust bearings used in other turbines superfluous; at the same time they make the equalizing of the pressure on both sides of the revolving discs possible, simply through drilled holes (shown in Figure 2) instead of special pipe connections, as used in the Parsons turbine.

From Figure 2 it can also be seen, that the floor space occupied by the Ljungströmturbine is only a fractional part of the space required for other turbines, a reduction, which for turbines of larger power reaches so far as to be only 1/8th of the floor space needed by others.

This is best understood by a few examples. The turbine alone for a 1000 K.W. steam turbine arrangement is only 20 inches and for a 7000 K.W. arrangement only 30 inches in length.

Figure 3 shows the whole system, the steam turbine situated in its own exhaust and the two electric generators placed one on each side of the turbine in axial direction and built with the exhaust as one single cylinder body of extra strong and absolutely symmetrical dimensions. As mentioned before, the revolving fields of the electric generators with their bearings are utilized for supporting the two turbine discs, which are connected to the shaft ends of the two rotors, revolving in opposite directions. Electrically these two systems work as one because the stators of the generators are coupled in parallel to the line and the two rotors are connected in series, receiving their magnetizing current from the common exciter, which can be seen on the right hand side of Figure 3. The electric generators being thus connected in parallel, their speed and load will be the same, and the rotors being connected in series a simultaneous disloading will be effected, should the exciting current by accident be cut off. It has therefore been proved unnecessary to apply a speed-regulator to more than one of the shafts, while special so-called safety regulators are applied to each shaft, working independently, so that either one can bring the unit to rest in case the speed limit on its side is exceeded.



Fig. 1.

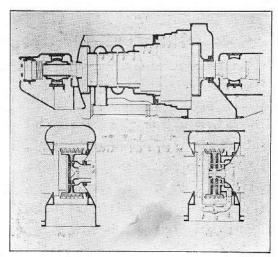


Fig. 2.

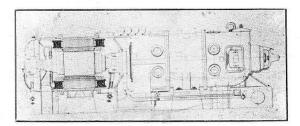


Fig. 3.

ンとに

The influence on the turbine of this arrangement is naturally that the relative speed of the two discs and also the relative speed of the blade rings carried by these discs is doubled, i.e. if for an A.C. generator of 50 cycles each, one of the rotors makes 3000 revolutions per minute, then the relative speed between the turbine discs, i.e. the blade rings, is 6000 turns. The result of this arrangement is, that each blade ring in such a double rotating turbine performs work equal to the square of the relative speed inside the turbine, which means four times as much work per blade ring as in a single rotation turbine. As a consequence the amount of blade rings of a double rotation turbine will be reduced to 1/4th and these can be easily accommodated between two discs with a relatively small radius small enough to avoid dangerous stresses in the material, even at high speed. The extremely compact dimensions of the Ljungström-turbines is thus explained and it must be remembered, that restriction of size is not obtained at the expense of economy of steam; this on the contrary is higher in this turbine than in others, a fact which is proved by the superior steam figures obtained.

The construction of the complete system, steam turbine as well as generators, in one single cylinder, is an extraordinarily important factor towards attaining these results. In building the whole unit together in one piece one gets the best possible rigidness in connection with the most complete symmetry; this makes a special base-plate unnecessary, at the same time that all stresses in the system (heat stresses etc.) are directed towards the centre and the very particular centering of the revolving and the stationary parts, which is effected at the time of erection, pertains under all different temperatures and load conditions, independent of any sinking of the building or of a more or less firm foundation, as can be seen from Figure 4.

On account of its rigidity and symmetrical form the Ljungström-turbine can be placed directly on the condenser, the foundation of which is thus the only one required for the whole plant, an arrangement by which a special mean floor can be avoided. The condenser foundation can be made considerably cheaper and less solid than is otherwise possible, because a sinking of the foundation will in no way change the relative positions of the different parts in the unit and therefore be permitted within reasonable limits. On the other hand the foundation for other turbines is considerably more expensive and requires large space, thus increasing the space needed for the plant as a whole.

It is quite plain that the building necessary in adopting the Ljungström-turbine is much reduced in height as well as in floor space, so that a considerable saving of space is made; this must be put to the credit of the system. It may be of interest to know that for the first 1400 K.W. plant, the cost of the foundation was only equivalent to \frac{190}{190}:—The floor space needed as compared with other turbines ought not to exceed one half as a rule, besides the reduction in height.

The central part of the turbine system, i.e. the blade rings, has naturally been used as the starting-point for the system as a whole, so that around the same all the other parts have been grouped in such a way as has been deemed necessary to obtain the highest efficiency in the blade system. It is therefore in the first place the blade system itself that has been taken into consideration, and this will be explained with the help of Figure 5.

As mentioned before the main qualification for getting the necessary number of blade rings within the radius, limited in size on account of the revolving speed and stress of the material, is the adoption of the double rotation system, whereby the number of blade rings is reduced to 1/4th. The second essential, viz. that the radial dimension of the blades be made small enough, consistent with strength and safety in running, required the design of details and methods of manufacture, without which a complete construction of the turbine could not be carried out. The solution of the purely practical manufacturing problem was therefore the first goal to reach and it was not before this was effected that the complete construction was worked out.

The welding process has now come to a point of perfection, opening new possibilities for the turbine technique, practical as well as constructive, which are in a striking way demonstrated by the Ljungström-turbine, this being the first to fully utilize those possi-The different operations necessary for making the blade rings of the Stal turbine will now be described with help of the Figure 5. The blades are cut to suitable lengths from ready made bars, in the manner usual in other turbines. Then the ends of the blades are faced off in order to enable them to fit in holes, which are punched in channels turned out in a lathe near the edge of two circular iron plates. The blades numbered in Fig. 5, upper middle sketch, are placed between those plates 2, 2, ready for welding. The plates are mounted each on its nave placed on one common shaft, which keeps the whole together while the welding process is going on. As shown by Figure 5, in the middle lower sketch the channel formed profiles at the edge of the two iron plates are filled by means of the welding, so that the ends of the blades, thrust through the holes into the channels, are welded with the plates to one single piece. When this operation is completed, the iron plates are put in the lathe and

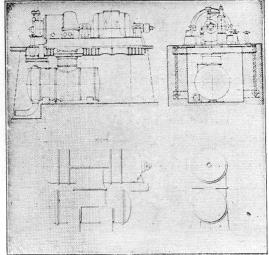


Fig. 4.

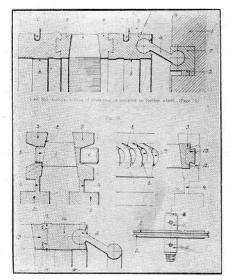
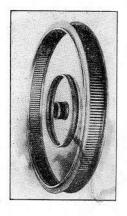


Fig. 5.



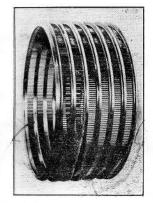


Fig. 6.

dovetails cut, shown by the shaded section in Figure 5 everything below the shaded portion and right and left of it being removed. The bladings are thus at the same time cut off from the plates, the diameter of which is correspondingly decreased; this is the case each time the plates are used; they are thus employed for rings of successively smaller diameter. The blade ring is now, thanks to the welding, on single piece, although it was originally composed of the outer strip of the two plates and of blades up to 800. The blades have, however, despite their small dimensions, received from the welding a more trustworthy fastening than any other blade design strengthened as it is by an arrangement shown in the section in the upper left and lower right sketches of Figure The dove-tail profile, not being strong enough in itself to stand the centrifugal stresses, is strengthened by special reinforcing ring (14), which are supplied with a groove between the numbers 15, 15 of the upper left hand sketch, in which the dovetail form is inserted axially and fixed in this position by means of a rolling operation which closes the edges of the reinforcement ring around the dove-tail thus making the two pieces practically one; thus the strength of the reinforcing ring gives the supporting capacity, with which one has to count when considering the centrifugal and other stresses arising when the turbine is running. Furthermore Figure 5 shows how in the same way reinforcing ring is by rolling, made to enclose the circular edge of a conical ring numbered to in left and sketch, 4 in right, the other edge of which is also circular and fastened into a third ring. This third ring is placed in its groove in the common turbine disc, to which half the number of rings belonging to one turbine is fastened. The right hand sketch shows accordingly a section of a completed blade ring as well as its fastening to the turbine disc through the medium of the conical ring mentioned; this ring is the so called expansion joint.

The object of the expansion joint is to permit the comparatively thin blade ring to expand and contract independently of the thick turbine disc, to which it is fastened, and the heating up and cooling off of which at different loads must necessarily require much longer time. The difference in temperature between the blade ring and the turbine disc will naturally correspond to a drop in temperature in the conical ring from one of its edges to the other, so that the two edges will get a correspondingly changed relative diameter causing a change in the conicity of the expansion ring. The result is therefore a movement in the angle of the conical ring, which movement can easily be carried out on account of the circular shape of the two edges, which adjust themselves without temperature

灩

stresses and independently one to the diameter of the blade ring and other to the diameter of the turbine disc.

The scope of expansion of the blade rings in closely adapting themselves to the existing temperatures is of great importance not only as regards the strength but for the radial clearance, which can be kept constant under different and quickly changing load conditions.

As seen from Figure 5 the complete blade section shows very thin U-shaped so called tightening strips, numbered 7, 7, fastened to the reinforcement rings and reaching as far outside of the same as is required by the distance to the next larger blade ring. This distance is made such that a direct contact between the reinforcement rings of the different blade rings is out of question. These tightening strips are made of pure nickel and therefore can not be eaten away by rust. At the same time they are made so thin, that if contact should occur during the run of the turbine they would be worn off, and not produce any injurious heat. Because of this and on account of the expansion joint previously mentioned, all the clearance spaces between these tightening strips and the next blade ring can be made as small as possible without any risk to safety in working, so that the steam leakage past the blade rings is reduced to a minimum, and the steam economy of the turbine is most favourably influenced.

Figure 6 shows a few complete blade-rings as they appear before fastening to the turbine disc. The rings shown on the left hand side are the largest, the smallest, and one intermediate ring of a 1000 K.W. turbine. The largest diameter is about 2 feet 10 inches. On the right of the same figure is shown the largest ring of a 5000 K.W. turbine, the diameter of which is a little more than 3 feet, not much larger than a blade ring for 1/5th of that power. In both cases the rings are assumed to rotate with a speed of 3000 turns per minute, and in order to reach that much larger output with correspondingly larger exhaust surface, the blade ring has the shape of a drum, the blades being divided into several shorter pieces with their intermediate reinforcement rings, fastened at the two edges in the same fashion as has been previously described for the single blade rings. By this means an extremely rigid design is obtained, the critical speed of which is as high as 6000 revolutions for turbines which in practice run only at 3000 revolutions. Radial deflections on account of faults in the balancing, arising from inaccuracy of manufacture, are indefinitely small, so that comparatively small clearance may be maintained even when using blade drums; this ensures specially low percentage leakage for turbines of larger power.

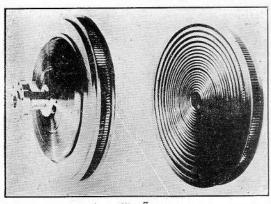


Fig. 7.

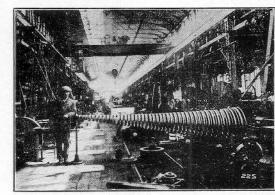


Fig. 7.-A.

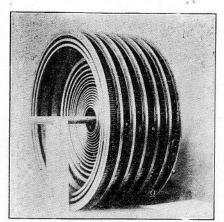


Fig. 8.

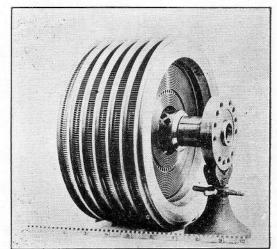


Fig. 9.

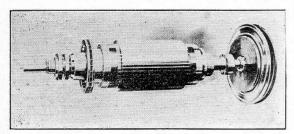


Fig. 10.

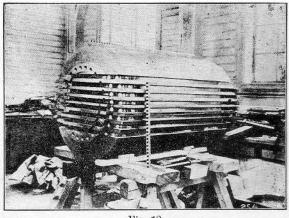


Fig. 12.

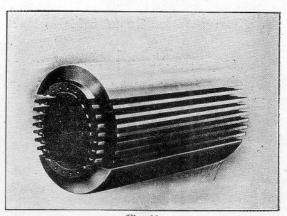


Fig. 11.

It is worth mentioning, that all the different parts are subjected to very severe tests according to a special schedule, where the stresses are divided into factors, each one of which is analyzed separately; the tests include strength and elasticity as well as the determination of the so called curve of exhaustion of the material. Such tests have also been made at different temperatures up to 500°C, with the help of apparatus specially designed for the purpose. The testing of the material has also been extended to include the other parts of the turbine and is regularly used as one of the operations in the manufacture. The Brinell's ball impression test has in this connection received a very extensive use, and it may be of interest to know for instance that material out of which reinforcing rings are made, is tested not only at one spot but at several different points all around the periphery in order to ensure a thoroughly good material.

Figure 7 shows the disc of a 1000 K.W. turbine; on the right seen from the side on which the blade rings are fastened one outside of the other, and on the left seen from the opposite side mounted on the shaft journal, the flange of which is bolted to the rotor of the respective electric generator; the disc is furnished with the so called dummy discs, corresponding to the balancing pistons in the Persons turbine, the task of which is to counteract the axial steam pressure in that turbine. These dummy discs will later on be shown in detail in a section of the turbine (see Figs. 26 and 30.)

Figures 8 and 9 show views of a made up turbine disc for a 5000 K.W. turbine generator (see also Fig. 30.)

Figure 10 shows a complete turbine disc mounted on its rotor for a 1000 K.W. steam turbine.

Figure 11 shows the two pole magnet core of a rotor as it is constructed in the works at Finspong. This rotor is based on the well known design first introduced by the Westinghouse Manufacturing Co., but has been improved in essential points in the make as used by Stal.

Figure 12 shows the same rotor, provided with windings consisting of thin ribbons of copper placed in the slots between layers of pure mica. On account of the simple form of the windings the mica insulation can be arranged in a very effective and strong way, and a reliable rotor procured even for the highest temperatures. This fact supplies the reason why no cooling channels in the rotor are required, sufficient cooling being effected by a stronge current of air under high pressure passing through the air gap between the stator and the rotor. Any gradual plugging up of the cooling channels in

演

the rotor, thereby causing over-heating of the same and risk of disturbance, is therefore excluded. The centimeter scales show the size of the rotor; under normal conditions two rotors are big enough for a 3000 K.W. steam turbine plant of the Ljungström type.

Figure 13 shows how the same rotor is provided with mental wedges driven into the slots outside the copper windings, which are thus furnished with an excellent support against centrifugal forces as well as temperature stresses; dislocation of the mica insulation as well as a displacement of the balance when running being thus avoided. These metal wedges placed as they are all around the rotor, compose to a great extent a short circuiting coil, which in the event of short circuit in the stator, will greatly counteract the starting up of dangerous stress between the coils of the rotor, a condition that still more increases the safety of the rotor design.

Figure 14 shows a complete rotor as manufactured by Stal in Finspong for a 2800 K.W. steam turbine plant. Both the bearings as well as the fan for the ventilation, situated at one end, and the two slip rings for bringing the exiting current in and out are plainly seen.

Figure 15 shows a stator for a 7000 K.W. turbine with a number of coils inserted in their respective slots. This stator belongs to the Willesden Power Station in London, gives a normal tension of 11000 volts, and has been tested up to 25000 volts.

Figure 16 shows a stator of a 2800 K.W. aggregate. The photograph plainly shows the design of the end connections, including a great number of strong clamps which are connected to two concentric rings, whereby an extra rigid design with triangle connections is gained to resist eventual stresses caused by short circuits. Furthermore it will be seen from the figure that the leads are extended a certain distance in radial direction, before they are connected peripherically. It is possible on account of this design to place the axial cooling channels of the stator between the radially extended leads inside of the innermost of the concentric rings of the end supports, an arrangement which permits cleaning of the channels by means of special brushes without the necessity of dismounting the machine in any way.

Consequently, as no channels are necessary in the rotor and the cooling canals as well as the end connections of the stator are easily accessible for cleaning the temperature of the machine may always be kept moderate, and safety against disturbances caused by overheating avoided in the best way possible; extra filters for cleaning the air are in most cases unnecessary.

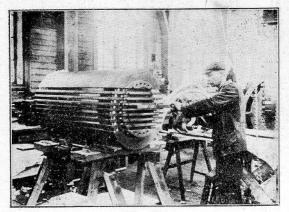


Fig. 13.

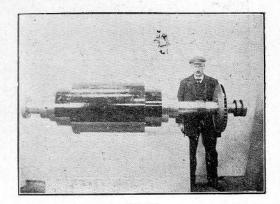


Fig. 14.

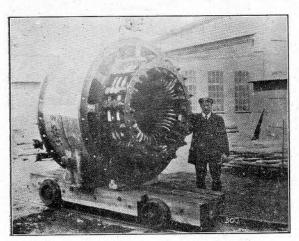


Fig. 15.

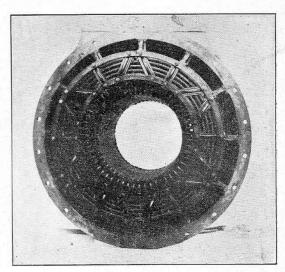


Fig. 16.

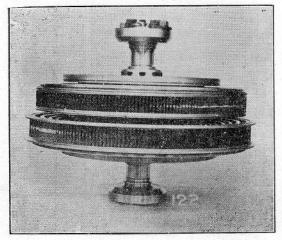


Fig. 17.

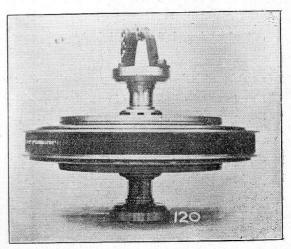


Fig. 18.

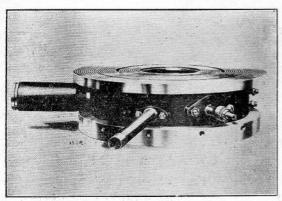


Fig. 19.

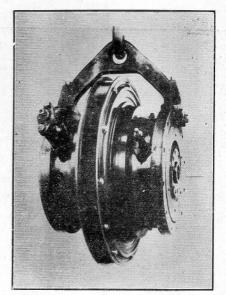


Fig. 20.

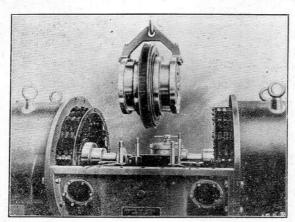


Fig. 21,

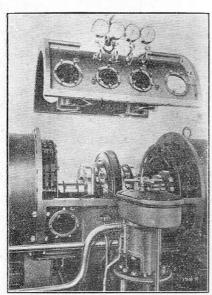


Fig. 22.

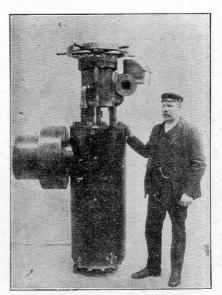


Fig. 23.

The manufacture of electric generators in conformity with design described has been taken up by Stal in Finspong with the idea of securing the same accuracy and care for this part of the plant as is used for the turbine, and also because the intimate connection between the electric generators and steam turbine, comprehended in the design, makes a simultaneous trial necessary; besides which such matters as time of delivery etc. are made independent of outside firms.

Practical results gained with these generators have fully demonstrated the advantages of the design. In taking up the manufacture of the electric generators the Stal has been guided by the experience gained by most firms in similar cases. Among these might be mentioned the A.E.G. in Berlin, where the work-shops for the electric generators have been placed close to the turbine works, although this concern already owned very extensive work-shops for electrical machinery. The reason is that high speed generators directly connected to steam turbines present mainly a mechanical problem, which is therefore most easily solved in connection with the steam turbine manufacture.

The connection of the turbine system to the electric generators and the design of the blade rings being thus described, there remains to be shown the putting together of the main parts of the turbine and the insertion, of the same in the united plant.

Figures 17 & 18 show how the two turbine wheels are put together axially, the rings of one wheel interposed between every two rings of the other wheel.

Figure 19 shows the lower of the two stationary steam inlet chambers, which are placed are on each side of the turbine wheels. To the left is the steam inlet pipe and to the right a valve, used when effecting the overloading of the turbine. Between those two arrangements is the outlet pipe for the shaft leakage, the leakage being carried from the shaft packing in the centre of the steam inlet chamber, through which the shaft end passes to a special feed water heater. This will be more clearly shown in Fig. 26 which gives a section of the turbine. At the top of the figure is shown the stationary half of a labyrinth packing for the axial balancing of the turbine, matching the moving half of the same design, which is fastened on the rear side of turbine disc. The edges and grooves of these fit inside each another when brought together, as shown Figures 20 & 21, which include the turbine with its two steam inlet chambers temporarily held together by a champing device specially made to facilitate the erection and the dismounting of the unit. The different parts are kept in their relative and correct position by small metal pieces resting on the outer flanges of the steam chests. When lowered in

證

the right position these flanges are bolted to the turbine casing and the shaft ends to the flanges of the rotor situated just inside the bearings.

Figure 22 shows the turbine parts in working position. After this the lowering of the upper half of the casing takes place. Previous to these operations a special paste is applied to every surface to make absolutely airtight joints all round. As mentioned before the turbine is placed in its own exhaust, where vacuum prevails, on account of which the tightening can easily be made effective. The high pressure joints found in other turbines are therefore altogether avoided in the Stal for the turbine proper, while on the other hand the introduction of the steam in this as in other turbines must be accomplished by tightening joints subject to high pressure. These have in the Stal turbine received a shape, which particularly simplifies the erection and the dismounting of the turbine. As the temperature of the condenser prevails inside the turbine casing, the same does not need any sort of outer insulation and the unit as a whole when running is practically kept at ordinary room temperature, a fact which is not only an economical gain but also a material advantage at times of mounting and dismounting, when insulating plates with their many bolts etc. are altogether done away with.

The dismounting and putting together of the Ljungström-steam-turbine therefore requires only short time and few workmen on account of the small weight and the compact shape of the different parts, as well as the advantages just mentioned. With 3 or 4 trained men the dismounting of a 1400 K.W. machine can be easily finished within two hours, and the mounting of the same takes about three hours. These figures do not represent the shortest time recorded, the operations mentioned having been accomplished within one and two hours respectively or for mounting and dismounting, three hours in all. Under normal conditions it is in any case possible to inspect all the inner parts of the turbine within 6 hours if 3 or 4 trained men are at disposal. In this connection it may be worth mentioning that on one occasion, when only one man was to be had, he finished the mounting of a 1400 K.W. steam turbine within the same time necessary for several men to do the same work on other turbine types.

Figure 23 shows the inlet valve for a 7000 K.W. turbine plant. The lower part of the valve is a water cooler, big enough to hold water in a highly disseminated condition and so avoid shocks. A special water separator is therefore not normally necessary with this type of turbine, as it is always supplied with the turbine in the form of the inlet valve. The separator is also provided with a steam strainer made of nickel plates with

small holes, to prevent large particles, which might damage the mechanism of the turbine from entering. In addition there are special means of safety inside the turbine, of catching all particle larger than of a certain size.

While impurities of large size are thus removed the inventors have succeeded in guarding the turbine against the action of more minute impurities such as those caused by bad boiler water. At the Willesden Power Station in London, where the condition of the feed water is especially severe, causing heavy coatings of dirt on the blade rings of ordinary Parson turbines, it was proved by dismounting the 1000 K.W. Ljungströmturbine installed that the discharge of dirt on the blading of this turbine was exceedingly small. The time wasting and frequent scraping of the blading necessary with other turbine systems is therefore avoided with the Ljungström type, which besides can easily be cleaned by means of steam jet apparatus specially designed for the purpose.

By avoiding the dirt savings are made not only in time and money, but also in steam consumption, which is increased by dirty blades.

Figure 24 shows a side view of a 1000 K.W. unit as a whole with one half in section and also an end projection of the whole plant. The side projection on the right shows the oil tank with the pipings to and from the different bearings. The circle in the tank indicates an oil reservoir with a water cooling arrangement, through which the oil passes before it leaves the tank. The pipes running alongside the turbine are connected through special pipes to the bearings of the generators; these are clearly seen in The oil circulation is maintained by means of an oil pump of the Cogwheel-type situated in the tank and driven by a vertical shaft, and worm gear from the rotor shaft of the generator situated above. The amount of oil per second is so large, that the size of all lubricating channels must be made particularly ample, and as the oil before its entrance to the pump is forced through a strainer in the tank, there is no risk of blocking the channels. In order to ensure the lubrication of the bearings, when starting the turbine, there is a hand driven oil pump mounted on the tank, by which at starting pressure is applied to the inlet valve, lifting it and at the same time pumping oil to the bearings. As the inlet valve can not be opened by the wheel but only by means of oil pressure, the starting of the turbine is only effected by the hand driven oil pump, and thus the lubrication of the bearings is automatically secured. This type of pump is replaced by a centrifugal steam driven pump in the large units. With these, on opening the steam inlet valve by means of the steam oil pump, the starting up is effected with the same result as regards the lubrication of the bearings.

The above mentioned vertical shaft for driving the oil pump is in its upper part provided with a regulator shown to the right in the upper part of the figure. The regulator controls the speed of both the generator shafts by an oil valve. This valve controls the pressure under the piston, thus lifting the inlet valve, which is closed by a strong spring placed on the other side. The inlet is shown to the left of the end protection, and it is in the upper part of the same that the oil piston is situated. Besides the regulator the turbine is provided with special safety devices, which act upon mechanism as soon as the speed of either of the generator shafts exceeds a certain limit. The oil pressure under the piston of the inlet valve is thereby released, and the valve closed by the pressure of the spring, and the machine is stopped.

The synchronous speed between the two generators constituting the unit, is automatically gained by connecting the same in parallel. The rotors are coupled in series and receive their exciting current from the common exciter, directly driven from the same generator shaft as drives the regulator. At the starting up of the aggregate, the two generators come into phase automatically as soon as the speed of about 1400 turns per minute is reached, this being the speed at which the exciter commences to deliver current to the two rotors. The two generators can therefore be considered as one machine as regards operation, instruments etc.

Figure 25 shows a vertical section of the turbine casing with interior turbine parts and inner bearings for the electric generators. From the inlet valve, situated on the rear side of the casing, there are as shown two inlet pipes connected from below to the two steam chests situated on each side of the two turbine discs, which rotate in the centre. A section of these steam chests as well as the connection of the pipes to the same will be clearly understood from the next Figure 26 showing the assembled turbine parts in section. To the left of the figure a section of the bearings is shown with the oil inlet coming from beneath, and outside of the same the return pipes for the oil. As seen from Figure 25 the bearings are connected to the turbine casing by means of bent arms, which make deflection possible, corresponding to the difference in temperature between bearing and turbine casing. The way of bolting the outer flanges of the steam chests to the casing is also shown. On the bearings to the right can be seen the adjusting screws, by means of which the bearings are put in the correct position at the erection of the plant.

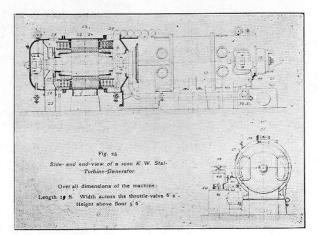


Fig. 24.

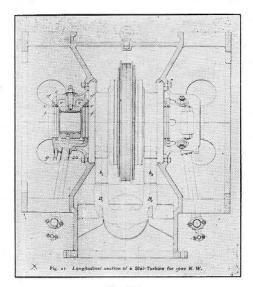


Fig. 25.

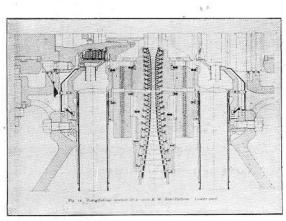


Fig. 26.

講

Figure 26 shows the lower half of the turbine parts as situated inside the turbine casing. As already described these consist of the blade system, the different blade rings of which are plainly shown with their expansion joints; they are connected alternately to the disc on the right and the disc on the left.

The passage from the centre outwards and comparison between the length of the blades in the rings of different diameter is also seen in the figure. On each side of the turbine wheels are situated the two steam inlet chambers the appearance of which has already been shown in Figures. One of the shaft ends is shown to the left in figure 26 and between the two shaft ends and the steam chests, are two shaft packings of the labyrinth type, with the separate outlets, mentioned on page 31 in Figure 20 they are here shown with the ends cut off. The design of the shaft packing will be explained in detail later on. (see pages 35 & 36.)

The steam enters through the Y-formed inlet pipe B_1B_2 of the Figure 25, the two outer pipes of which, one for each steam chest, are there shown in section. These pipes have collars of circular profile, which at the inlet to the steam chests fit tightly to the middle of short pipes, fastened to ends of the steam inlet chambers.

An elastic tightening arrangement is thus obtained, providing for the steam inlet pipe, on account of its thin walls, being heated up faster than the steam chest with its relatively thick dimensions. From the concentric inner part of the steam inlet chambers the steam passes through holes made in the pipe-formed nave of the turbine discs into the centre of the blade system and thence out through the same to the exhaust and the condenser.

Beside the blade system the steam passes also through two other passages from the steam chambers. One of these passages is the shift packings; the other passage is situated between the balancing edges fastened on the rear part of the turbine discs and on the steam chests. The grooves and edges, as described on page 29 fit into one another, forming the zig-zag concentric labyrinth shown in Figure 28. The pressure in axial direction caused by the steam between the turbine discs is counteracted by the pressure put up by the steam passing through the stationary and the moving parts of the labyrinth packing. How this is automatically effected will be explained along with the detailed section of the labyrinth.

A close examination of the section (Fig. 26) will show that the expansion rings, described in connection with the design of the blade rings, are used only not in connec-

演

tion with those rings but also in several other places. Such a ring is seen at the fastening of the steam chest, and is situated between the outer flanges and the main body of the chamber. A ring formed connection of comparatively small section is thus provided between the hot chamber and the cold flange, which quite naturally assumes the same temperature as the condenser.

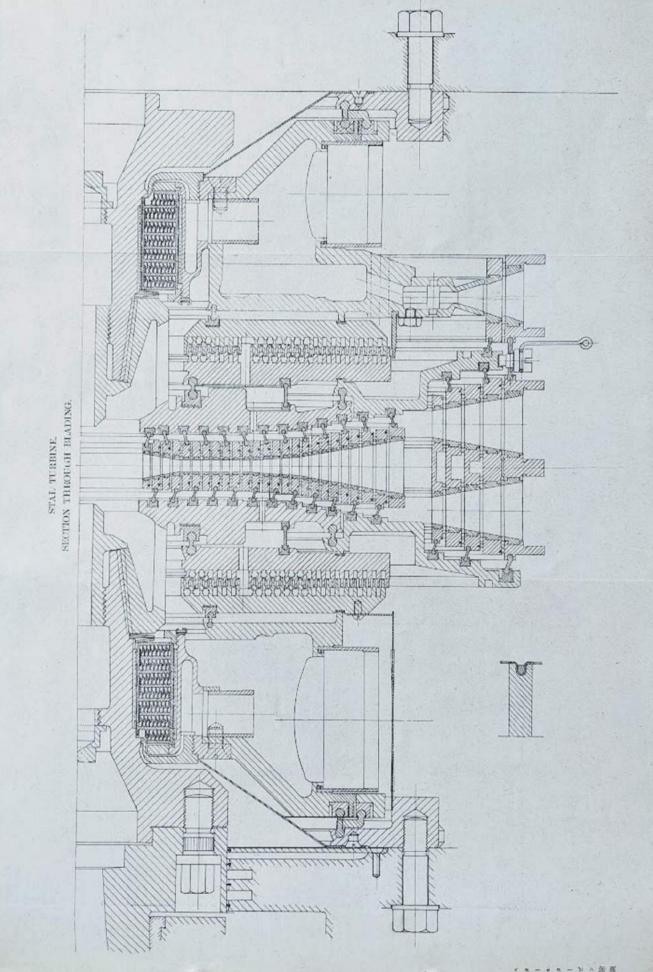
The great drop in temperature, which exists at this point, is wholly taken up by the expansion ring, so that dangerous stresses in the material are avoided and at the same time the loss of heat is reduced to a minium.

The balancing plates are also fastened by means of such expansion rings, so that they have full liberty to expand, independently of the temperature of the steam chambers or the turbine discs. This gives the advantage, that the steam passing between the plates practically alone decides the temperature of the same. The relative diameter of the plates remains unchanged on account of the equal thickness of the same, and the clearance can be kept small, in consequence of which the steam leakage between the balancing plates under all working conditions is small, with a favourable result as to the steam economy.

As seen from the figure the turbine discs are divided radially into three concentric parts, these also being united in the same fashion by means of expansion rings. Expansions caused by the high temperatures prevailing in the centre of the turbine can therefore be effected without any dangerous stresses arising, though this would happen if the central part of the turbine disc were fixed to the outer part of the same, the temperature of which is nearly that of the exhaust steam or condenser.

A common character for all the expansion rings in the turbine is that they materially prevent the transfer of heat from the warmer to the cooler parts, great thermal advantages being thus gained, the high temperature of the inlet steam really being concentrated and retained in the centre of the turbine. The fact that the shaft ends are hollow and therefore transfer the least possible quantity of heat to the bearings situated close by also contributes to a good result in this respect. Any overheating of the bearings on account of the short carrying distance and in case of highly superheated steam is therefore avoided. The cylindrical pipe shape of the naves of the turbine discs is also designed for the purpose of compensating the stresses caused by difference in temperature.

From the section as a whole one can plainly see that the whole system is very flexible to heat, a fact which will ensure safety when working, especially when highly superheated steam is used. To make the clearance between all movable parts where the



steam can escape as small as possible, very thin strips are always used about the blade rings, the dummy discs and the shaft packing so that the least possible over-heating will occur in case the moving parts or moving and stationary parts touch. Hence without danger to the turbine the great advantage can gained of letting actual wear decide the clearance just necessary between the edges of the tightening strips, and the leakage can be reduced to a minimum even at the highest temperatures.

By the arrangements now described the Ljungström-turbine can be guaranteed to have the combined advantages put forward for both the reaction turbine and the impulse turbine, without the disadvantages of the same. To the most economical way of utilizing the steam according to the reaction principle has been added in the Ljungström-turbine the capability of the impulse turbine to stand and utilize high steam temperature. In these circumstances and the double rotation principle there lies the logical and natural explanation of the superior steam figures, which have been realized in the practice.

The assembly of parts in Figure 27 shows in the upper left hand corner a complete shaft packing for a 1000 K.W. turbine and in the lower left hand corner one of the rings for the same. A few of these rings are shown in section to the right, entering into one another, the left hand set mounted on the shaft and the right mounted on the steam inlet chamber. By means of wedges, shown in the section both the sets are prevented from slipping from the part on which each is mounted.

As can be seen from the Figure the concentric offsets between the rings consist of thin cylinders ending in a conical shape of extra thin dimension, this being the real-tightening strip of the labyrinth system through which the steam has to pass is zig-zag and axial direction. Should the thin strips touch the cylinder forms close to them the heat would be so small that no deformation would be caused. The area of all the ring sections is the same. The expansion or contraction of the parts thus happens simultaneously and is equal in amount, leaving the clearances mutually unaltered. These expansions and contractions are independent of the temperature of the shaft end or the steam chest, because the guiding flanges of the shaft packing rings are not tightly fastened to the parts on which the rings are placed, but by means of deep grooves turned in axially immediately outside the guide, thus giving the system a radial elasticity leaving enough liberty for the radial extension of the parts of the rings, which enter into one another. This is of special importance for the right function of the shaft packing, because the latter is at full load subjected to steam of perhaps 350°C., while on the

護

演

other hand with a sudden throwing off of the whole load it must work at a vacuum, and this causes the air to rush through the shaft packing, which is thus exposed to a sudden difference in temperature of about 300° C.

Experience has shown that the clearance of the shaft packings remains unchanged and can be kept so small that the leakage in spite of the high pressure is immaterial. Beside, this leakage is by no means a loss, as the steam is carried to a feed heater situated outside the turbine so that its heat is brought back to the boiler. The Ljung-ström-turbine has a considerable advantage over other turbines as regards the shaft leakage, because in the latter types the steam leakage goes directly to the condenser, this condition naturally representing a direct loss of steam. However, in the steam figures given for the Ljungström-turbine, no account is taken of this difference, although it amounts to as much as 1 or 2%.

Figure 28 shows an enlarged view of part of the labyrinth packings between the balancing plates; these plates appear in Figs. 26 & 30 right and left of the blade discs, the geometrical axis of the turbine is situated below the figure. The concentric teeth nearest the centre are furnished with hollows, the purpose for which will be given later on. If we assume the right hand part of the section to be the balancing plate, which revolves with the turbine, and further that steam passes through the blade system as well as through the labyrinths shown in this figure in direction from below and upwards, then there will arise an axial steam pressure, which will cause the revolving disc to move in either one direction or the other depending upon the side on which the pressure is strongest.

Assuming that the largest pressure is on the side of the blade system, the two balancing discs shown in this section will come closer together, so that the tightening strips in the lower part come inside the widened part, thus leaving a considerably larger area for the steam to pass. Inspecting the upper part, situated farthest from the centre, we find so alteration of the areas open for the steam to pass. Consequently we get an increased inlet area without the corresponding increase of the outlet and the pressure between the plates must necessarily be raised until a complete equilibrium is attained between the pressure on each side of the moving turbine disc.

If we now assume, that the largest pressure is originally prevailing between the two balancing plates, so that these have come somewhat apart, then there will be the opposite relation as before between the labyrinth and its tightening strips. The areas of

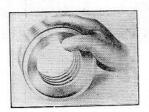






Fig. 27,

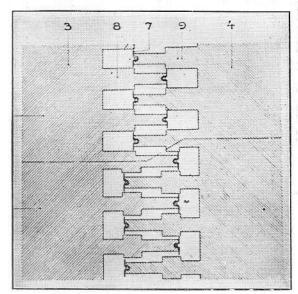


Fig. 28.

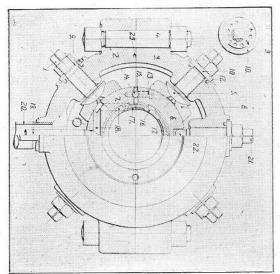


Fig. 29.

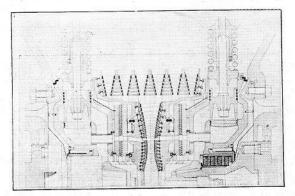


Fig. 30.

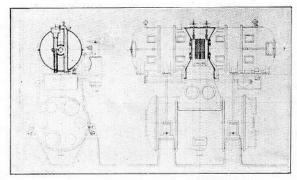


Fig. 31.

the clearance in the upper parts will be increased leaving a free outlet for the steam, while on the other hand at the inner part no difference occurs. The pressure between the places must therefore fall till the point is reached when absolute balance is gained. It is proved in practice that the balancing is completely automatic at any load, keeping the discs within the limit of a few tenths of a millimeter. Any thrust bearing for fixing the axial position of the revolving parts is therefore unnecessary, and the relative axial position of the turbine disc is automatically fixed inside the turbine itself.

The thrust bearing common in other turbines situated at a considerable axial distance from the balancing pistons necessarily causes an axial position, changing according to variation of the temperature, thus naturally increasing the steam leakage, which besides in general is dependent on the core expended by the engineer in charge when looking after the thrust bearing. It is quite obvious that under such conditions the exact adjustment with small clearances which may be obtained on trials at an invariable load and by specially trained men, can not be kept under actual working conditions by the engineer in charge, but must be considerably increased. When running normally the steam consumption will therefore be higher than the tests have indicated; this does not apply to the Ljungström-turbine, in which the clearances are not adjustable, and entirely independent of the greater or smaller accuracy displayed by the engineer as regards working safety as well as economy. A distinct advantage is also the simplification attained, making the thrust bearing superfluous.

Figure 29 shows the arrangement previously mentioned for adjustment of the bearings in order to get the rotor in exact position in the centre. As seen from the figure the lining is held up by adjustable bolts with spherical heads secured to the casing of the bearing. Under these heads there are loose pieces of steel, which fit exactly to the lining. The rotors can by this arrangement be easily centered with 0.02 parts of a millimeter and it has been proved by frequent dismountings and mountings, that this precision is maintained so well that any readjustment is superfluous at the usual inspections, after the turbine has once been put to work.

Figure 30 shows the inner parts of a 5000 K.W. turbine provided with blade drums of the previously type described on page 28 for the low pressure part, while on the other hand the inner, high pressure part only requires blade rings with a single row of blades (see also Figures 8 & 9.)

The figure, upper half of the installation, shows also the automatic overload valves,

mounted on the steam inlet chambers. These are divided into two concentric chambers, of which the outer one, receiving the high pressure steam, is put in connection with the inner one by lifting the overload valves. The steam passes from this inner chamber through axial pipes and holes drilled in the turbine discs into the larger section of the turbine, so that the necessary larger areas are had for the transmission of the larger amount of steam necessary for the overload wanted. The valves open in such a way that, at a certain load, there will be a certain pressure in this part of the blade system transmitted through the holes in the turbine discs and the pipes in the steam inlet chamber to the bottom side of the pistons for the overload valves, the springs of which are so set that they yield to the pressure mentioned and thus open the valves, so that the high pressure steam can pass through.

Figure 31 shows a complete 5000 K.W. plant. The turbo-generator is mounted on the condenser, and supported at both ends by special, nearly vertical stays, in their turn resting on springs on the condenser body, indicated by dotted lines in the end view. This arrangement with elastic supports is the normal one used for equalizing the temperature extensions of the condenser and the exhaust tube. The support of the ends of the units is thus uniform and unchanged even when the turbine is dismounted.

The condenser type used by Svenska Turbinfabriks Aktiebolaget Ljungström for the turbine units manufactured by them is of English origin, known as the Contra Flow Kinetic System, considered by many leading power station experts to be the best system known so far. The manufacturing concerns in Finspong have secured the rights to manufacture this system, with which they very best result has been reached confirming the favourable opinion given about the same.

As the Contra Flow System is well known a detailed description of it is rather unnecessary, but a few points might well be remembered in this connection. The advantage of the air pump arrangement in the Contra Flow System is, that it is obtained by extremely simple and reliable means consisting of an ordinary centrifugal pump and a few mouth pieces. The pumping power is very flexible on account of the steam jet connected in series, and it can be very much increased by letting more steam through the steam ejector, thus increasing the pumping capacity in the even of leakage of air into the condenser. The amount of power needed is not larger with this system, but rather smaller, than that required for other systems, because the reserve power is here situated in the steam-ejector, the steam of which is always returned to the condenser,

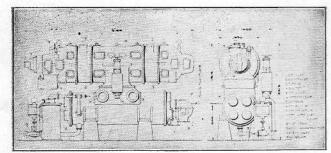


Fig. 32.

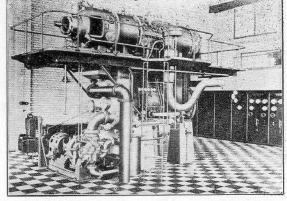


Fig. 33,

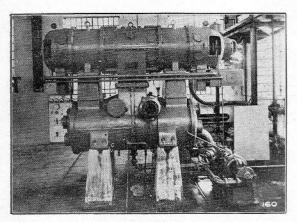


Fig. 34,

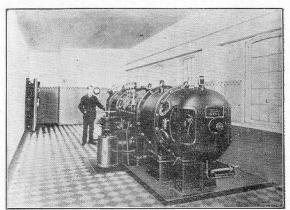


Fig. 35.

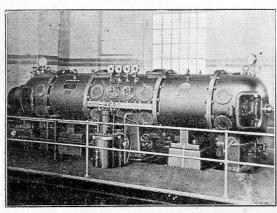


Fig. 36.

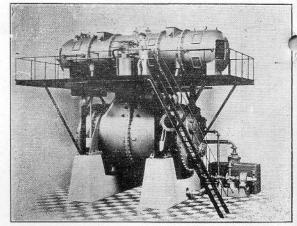


Fig 37.

and therefore does not represent a loss of heat. As seen from figure 32 the pumping arrangements have received a very compact form.

Some of the very first Ljungström steam turbine plants and their records in practical work may be of some interest.

Figure 33 shows the first turbine made of this type. It had 1000 K.W. capacity, was erected in the Willesden Station in London and afterwards taken over by the same concern. The turbine then run during a period of two years with such a result that the order for a 7000 K.W. unit was placed with the Ljungström people.

Figure 34 is the first Ljungström plant in Sweden, erected at Sandvikens Iron Works as a reserve to the hydraulic power; it is of 1400 K.W. capacity. A 2800 K.W. unit is now doing its work in the same power station.

Figure 35 is a 1400 K.W. machine at Skärblacka Paper Mill, running to the great satisfaction of the owners. It is well worth mentioning that the guaranteed steam figures for all plants delivered have been considerably surpassed at the trials, as for instance with this machine, where a result nearly 5% better than that guaranteed was actually reached.

Figure 36 shows the first plant delivered by the English manufacturers, the Brush Electric Engineering Co., Ltd., and erected at the St. Pancras Power Station in London. According to an official report from the operating superintendent at this power station the records show a saving in coal of not less than 16000 yen per year as compared with the Parsons turbine used at the same place, which means that the plant could be paid off in 3 years, a result which must be considered to be more than satisfactory. Such figures and still better ones are easily proved by the results reached, but are naturally in the first place dependent on the length of time in a year, during which the turbine is working. If a power station gets such an economical machine in addition to several other plants previously installed, it is only natural that it will reach a load-factor, which will exceed the one normal for the power station and the value of the steam saving must therefore be increased to a considerable extent.

Figure 37 is a model of the 7000 K.W. plant delivered to the Willesden Power Station in London. The condenser is of extra large dimensions and could readily be used for a 10000 K.W. unit.

As to the steam consumption figures for the Stal turbines actually obtained, it may be mentioned that a 1400 K.W. plant at 1000 K.W. only used 11.2 lbs. of steam per

K.W. hour. The corresponding figure for a 2800 K.W. unit is 10.7 lbs. per K.W. hour. Comparisons between the Stal turbine and others have shown a superiority of the former of usually between 10 and 15%. The value of this, from a purely economical point of view, can be readily understood from the fact that on a working time of 3000 full load hours per year, 10% improvement of the steam economy of the turbine, for the buyer, means saving the cost of the plant, including steam-turbine-generator and condenser, in one year, on account of the saving in coal. That still better results can be reached is shown by the previously mentioned report from the operating superintendent of St. Pancras Power Station in London. And it is quite obvious that such a long working period a 6000 or 7000 load hours per year can be expected in certain cases, for instance when the turbine is used in a Power Station together with several other turbines, in which case its value will be three fold told to the owner in case of 10% superiority in the steam consumption. Naturally these figures all depend upon prices of coal and machinery at different places. The information given refers to conditions as they were in Europe last year.

The Stal turbine is superior not only when used for ordinary power station work or similar purposes, but it has also gained admirable results when used for the purpose of ship propulsion.

The first steamer fitted with the Stal turbine is a Swedish coastwise freight steamer, named Mjöhner, a sister ship of which was furnished with ordinary triple machinery. A comparison between the two showed a coal consumption of more than 42% less, to the credit of the Stal steamer, and after in every respect successful service of about one year the owners ordered Stal turbines for three more of their new boats.

The Mjölner machinery consists of two 400 K.W. Stal turbine generators of 7200 revolutions delivering alternating current of 120 cycles to two three-phase induction motors of a speed of 900 revolutions. This speed is then reduced by a helical gear to 90 revolutions per minute, being the most economical for the propeller used.

As the steamer also trades in icy waters, a safety arrangement has been introduced to prevent the breaking of the propeller shaft, or the teeth of the helical gearing. This protecting arrangement consists of slipping clutches inserted between the motor and the smaller spur wheels.

The arrangements for manoeuvring are made in such a manner that there is no difficulty in handling the engines single-handed.

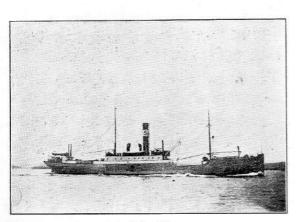
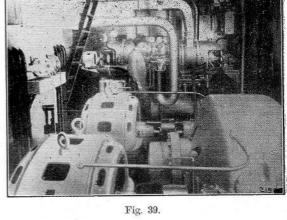


Fig. 38,



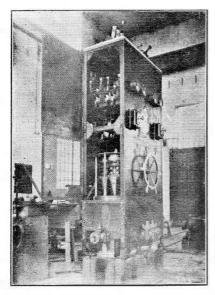


Fig 40.

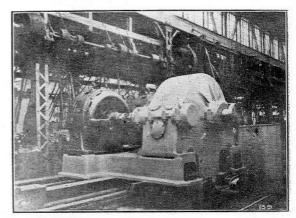


Fig. 41.

The electrical manceuvring has shown itself to be particularly satisfactory, it being possible to reverse the machinery considerably quicker, at the same time as the gradual speed regulation can be made to a considerably lower speed than in the case of piston machinery, a fact which when going in fog or manœuvring in a harbor is of great advantage.

A few figures 38 to 41 from the Mjölner are here shown.

The Ljungström people in Finspong are now busy on orders for Marine turbines from concerns in England and Russia as well as Sweden and Norway.

The matter of the Stal turbine for marine use is so extensive, that it will be impossible to make any closer study of the same here, but a combination of the different items forming the total gain that can be expected, when using a Stal turbine-electrical machinery, may be of some interest. They are:

- 1. Decreased fuel consumption, i.e. decreased cost for fuel per trip.
- 2. Increased dead weight capacity on account of the smaller weight as compared with ordinary triple-machinery.
- 3. Increased dead weight on account of the smaller bunkers needed for the trip.
- Decrease of the expenses for oil, packings and other machinery parts.
- Decrease of the repairing and up-keep costs.
- 6. Decrease in cost for food and wages on account of the smaller number of men needed.
- 7. Increased propeller effect, that means increased speed.
- Increased economy by using electrically driven winches.

To these may be added a few, in some cases considerable, advantages from the -constructive point of view:

- The possibility of installing machinery in a limited space and of big enough power to obtain a certain high speed, which would otherwise require considerably larger dimensions of the ship, with increased cost for building the same.
- The possibility, by placing the motors far aft, but keeping the generators and boilers amidships, to avoid tunnels for the shafts, at the same time retaining the trim of the ship unaltered and independent of the change in the banker quantity.
- The possibility of installing the generators above the main deck, so that the space below the deck otherwise used for the machinery can be used for freight. The Stal people have lately made up a proposal for replacing the present quadruple

machinery of 16000 S.H.P. in the Cunard line's S/S Caronia with Stal turbines.

The comparison may be thus summarised;

Coal consumption, alternative I. 0.673 lbs. per I.H.P. and hour.

Coal consumption, alternative II. 0.655 lbs. ,, ,,

Corresponding figure from the trial trip of S/S Caronia....1,292 lbs.

The saving in coal is thus Ca 50%.

The saving in weight of machinery is about 50%.

The saving in space is such that still using the present boiler plant, a 27000 S.H.P. Ljungström turbo-electric machinery can be installed.

This assumes turbo-electric propulsion, but the Ljungström people have also worked out designs for steam turbines working directly on the propeller shaft through some gearing arrangement. The turbine is in this case designed to be directly reversible and work astern with 40% of the full load power at 2/3 of the normal speed.

Such an arrangement will probably be of great use for fast going destroyers and other smaller was ships, but on the other hand the turbo-electric machinery is as a rule the superior of the two, when used for ordinary trading and passenger vessels as well as larger warships.

The possibility of possibility the generators along the will be a that the

Tokyo, the 21st of Jan. 1916. HELMER HEDBERG.

第四回三好獎學資金懸賞當選論文

AN ANALYSIS OF MODEL SCREW PROPELLER EXPERIMENTS.

By

S. Motora, Member.

There are many quantities which are introduced in investigation of the action of a screw propeller. They may be summerised as follows:—

- 1. speed of advance
- 2. number of revolutions
- 3. thrust
- 4. turning moment
- 5. thrust horse-power=thrust × speed of advance
- 6. shaft horsepower= $2\pi \times \text{revolutions} \times \text{turning moment}$
- 7. efficiency = $\frac{\text{thrust horsepower}}{\text{shaft horsepower}}$

As will appear in the above table, the quantities (5), (6) and (7) are derived from (1) to (4). For a given propeller the quantities (1) to (4) are connected by some definite relation with each other. If any two of them be given, the other two are determinate, and it follows that if any two of these seven quantities be given, the remaining five are determinate.

Now a screw propeller many be characterised by following elements:—

- 1. diameter
- 2. pitch or pitch ratio
- 3. area or area ratio
- 4. number of blades
- 5. form of blades
- 6. thickness of blades
- 7. diameter of boss &c. &c.

All these elements have influence on the action of propellers. But for a type of propellers which does not much deviate from usual practice, (5), (6) and (7) are less important in comparison with (1), (2), (3) and (4). Hence it is not difficult to apply the results of experiments obtained from the most usual type of propellers to any other type

懸

賞

文

第四回三好獎學資金懸賞當選論文

The action of a screw propeller may be represented by the equations, taking into accounts the predominant elements i.e. diameter, pitch ratio, and area ratio only as variables:

$$T = P D^2 V^2 f_1 \tag{1}$$

$$\mathbf{M} = P D^3 V^2 f_2 \tag{2}$$

where T = thrust

M=turning moment

P=the density of water

D=diameter of the propeller

V=speed of advance

 f_1 and f_2 are coefficients proper to the individual propeller. The validity of the above formulas is evident by the principle of dimensions, for the dimension of thrust is $[MLT^{-2}]$ and that of $\rho D^2 V^2$ is $[ML^{-3}.L^2.L^2.T^{-2}] = [MLT^{-2}]$ which is identical to the dimension of thrust. Similarly the dimensions of the both members of the equation (2) are $[ML^2T^{-2}]$.

Analytical expressions for f_1 and f_2 are difficult to obtain theoretically. They can be determined by experiments only. It is, however, evident that f_1 and f_2 are some functions of pitch ratio, area ratio and slip ratio. Moreover as a propeller accompanies more or less suface disturbance according to the depth of immersion, and is affected by the viscosity of water, they must also be affected by dimensionless quantities $\frac{gD}{V^2}$ and $\frac{\rho VD}{\mu}$, where q is the gravity and μ represents the viscosity of water. In some cases the atmospheric pressure seems to be an important factor, as in the case where cavitation phenomenon takes place, then f_1 and f_2 are again affected by $\frac{P_0}{\rho V^2}$ where P_0 shows the If $\frac{\rho VD}{\mu}$ and $\frac{P_0}{\rho V^2}$ be kept unchanged, the law of comparison is strictly applicable whatever may be the form of f_1 and f_2 , and the results of the experiments which have been carried out by eminent experimenters such as Mr. R. E. Froude, Mr. D. W. Taylor and others, showed that within certain range of values of V and D which are practicable in tank experiments, the operation of propellers follows approximately the law of comparison. Hence, within the range of V and D, $\frac{\rho VD}{\mu}$ and $\frac{P_0}{\rho V^2}$ can be taken as constants. But, for wider range of values of V and D than mentioned above as in the case of comparing the operation of model screws to that of full sized

文

ones where the ratio of linear dimensions will sometimes exceed fifty, the terms due to $\frac{\rho VD}{\mu}$ and $\frac{P_0}{\rho V^2}$ seem no more to be constants. Unfortunately, it is very difficult to obtain the effect of viscosity and pressure either by experiments or by theory. The only means to be tried is to compare the results of model propeller experiments to those of speed trial of full sized ships and propellers and to find correction factors. It is, in the present condition of our knowledge about the problem of ship propulsion, the most accurate process available. Hence, a careful study of experimental results of model propellers would be of great value for designers.

Surface disturbance is a function of the immersion of propeller. But unless the propeller is so near to the water surface that it draws in air from the surface, the immersion has no appreciable effect on the action of a propeller. Since, in most of actual cases, we have sufficient immersion, we may omit the terms due to $\frac{gD}{V^2}$; and even in the case of insufficient immersion, it is possible to find some corrections to be applied.

The equations for T and M may, omitting the terms due to $\frac{\rho VD}{\mu}$, $\frac{P_0}{\rho V^2}$, and $\frac{gD}{V^2}$, now be written as follows:—

$$T = \rho D^2 V^2 f_1(p, a, s) \tag{3}$$

$$M = \rho D^3 V^2 f_2(p, a, s)$$
 (4)

$$e = \frac{TV}{2\pi nM} = \frac{1}{2\pi} \cdot \frac{f_1}{f_2} \cdot \frac{V}{nD}$$
 (5)

where p = pitch ratio

a = area ratio

$$s = \text{slip ratio} = 1 - \frac{V}{npD}$$

n = number of revolutions per unit time

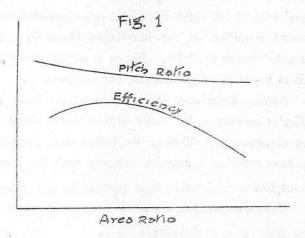
Divide the both sides of (3) by D^2V^2 and replace s by its expression, we get

$$\frac{T}{D^2V^2} = \rho f_1(p, a, 1 - \frac{V}{npD}) \tag{6}$$

If $\frac{T}{D^2V^2}$ and $\frac{T}{nD}$ be known, this equation represents a relation between p and a, and for each set of values of p and a which satisfy the equation (6), corresponds a definite value of e which is also a function of $\frac{V}{nD}$. We may construct a diagram expressing the relation between p, a and e, taking any one of them as the abscissa and the remaining two as the ordinates. It is the most convenient way to take a as base. Fig. 1 shows an example of such diagrams.

第四回三好獎學資金懸賞當選論文

For every set of $\frac{T}{D^2V^2}$ and $\frac{V}{nD}$ there exists a set of values of a and p which gives maximum efficiency. If we adopt the space coordinates and take $\frac{T}{D^2V^2}$ and $\frac{V}{nD}$ parallel to x and yaxis respectively, and e, p, and aparallel to z axis, we will get three curved surfaces. The height of any point on the e surface represents the maximum efficiency attainable for $\frac{T}{D^2V^2}$ and $\frac{V}{nD}$ which correspond to the coordinates parallel to x and y axis of the point. The points on pand a surfaces with the same x and y



values show the most favorable combination of p and a. If we cut the e surface by equidistant planes which are parallel to xy plane and project the lines of intersection on the same plane, we will get a series of contour lines. Similarly we can get contour lines for a and p on the same xy plane.

In designing a propeller T and V may be taken as known quantities. Supposing a ship is required to be driven at an assigned speed, the resistance of the ship at that speed is readily speed, the resistance of the ship at that speed is readily estimated by model experiments or by some other methods. Then T and V may be computed by the formulas.

$$T = \frac{R}{1-t}$$

$$V = (1 - w) V_s$$

 V_s = speed of the ship

 $R = \text{tow rope resistance of the ship at the speed } V_s$

(1-t) = thrust deduction factor

(1-w) = wake factor

To obtain the accurate values for thrust deduction and wake factor is another difficult

But since it is out of the object of this paper it will not be described at length here. For the present, we may take T and V as given. Next things to be considered are the number of revolutions, the diameter, the pitch ratio and the area ratio. Of these four quantities, the first two are more or less restricted within certain limits, the number of revolutions being in close relation with propelling machinery, and the diameter being limited by the ship's draught. On the other hand pitch ratio and area ratio are not limited in any way. If we assume suitable values for number of revolutions and diameter, we should select p and a without any restriction for their magnitudes, so as to get maximum efficiency attainable. Hence the number of revolutions and the diameter may be taken as the primary independent variables, and the efficiency, the pitch ratio, and the area ratio as the dependent variables, the thrust and the speed being suposed to be given quantities. Since both of the variables $\frac{T}{D^2V^2}$ and $\frac{V}{nD}$ contain D, there is some inconvenience in using the chart. To avoid this, $\frac{V}{VT}D$ and $\frac{VT}{V^2}n$ may be taken as primary variables where the former is the square root of the reciprocal of $\frac{T}{V^2D^2}$ and the latter is the reciprocal of $\frac{V}{nD}$ multiplied by the square root of $\frac{T}{D^2V^2}$.

For shortness, denote $\frac{VT}{V^2}n$ by Cn and $\frac{V}{VT}D$ by C_D . C_n and C_D , therefor, represent n and D respectively in certain scale. Hence we can, at a glance, find efficiency corresponding to the values of n and D which are to be adopted, or determine n and Dwhich will give the greatest efficiency, harmonising with other requirments such as the

There are two valuable informations published on the model screw propeller experiments, namely, "Results of Further Model Screw Propeller Experiments", by Mr. R. E. Froude, and "Speed and Power of Ships", by Mr. D. W. Taylor, Naval Constructor U. S. N. It will not be needed to enter in detail of their investigations. A brief description will suffice here.

engine speed and the ship's draught.

	Froude	Taylor
number 1.18	36 in total comprising 12—three blade elliptical 12—three blade wide tip 12—four blade elliptical	120, all three blade elliptical
diameter	9.6 in.	16 in.
nominal pitih ratio	0.8, 1.0, 1.2, 1.4	0.6, 0.8, 1.0, 1.2, 1.5, 2.0
area ratio Expanded Area Disc Area	0.287, 0.395, 0.503, for three blade elliptical 0.437, 0.584, 0.730, for three blade wide tip 0.383, 0.527, 0.671, for four blade elliptical	0.229, 0.306, 0.382, 0.458, 0.535
thickness ratio $= \frac{AB}{Dia}$	0.03	0.1033 0.0774 for screws of 0.229 0.0516 area ratio 0.0258 0.0894 0.0672 for screws of 0.306 0.0448 area ratio 0.0225
	more make although a name and a second of the second	0.0800 0.0600 for screws of 0.382 0.0400 area ratio 0.0200 0.0730 0.0544 for screws of 0.458
AB	almail W. Al. ali and Jamin's action and a land a	0.0363 area ratio
diameter of boss	0.91 in.	3.125 in.
immersion	0.64 ft. or 0.8 D	16 in. or 1 D .
speed of advance	300 ft. per min.	5 knots or 506.67 ft. per min.

Charts I, III, III, IV and V are calculated from the experimental results of Mr. Froude. Charts I and III are the efficiency charts for three and four bladed screws of elliptical blades respectively, corresponding slip ratios being shown in dotted lines in the same charts. Charts II and IV represent the contour lines of pitch ratio and area ratio also for the two kinds of propellers. It should be remarked that the pitch ratio used in the analysis of Mr. Froude's experiments is the analysis pitch ratio defined by him and consequently the slip ratio shown in Chart I and III is not the nominal slip ratio but is computed by using the analysis pitch ratio. Chart V is constructed by superposing the charts I and III, the explanation of this chart will be found later on. Charts VI, VII and VIII are computed from the experimental data informed by Mr. Taylor. Chart VI shows the efficiency of three bladed elliptical type with thickness ratio of .04, Charts VII and VIII being the same as chart VI except that the thickness ratio are .06 and .08 respectively.

In comparing the Charts I, VI VII, and VIII, it will be found that the contour lines obtained from these two data are quite similar in their configuration, there being only slight difference in efficiency values. If we take notice of the considerable difference of conditions of these two sets of experiments, for instance, the type of model propellers tried, the apparatus employed, and methods of experiments &c., the agreement seems quite satisfactory.

The curve AA in the Charts I, III, VI, VII and VIII, are the locus of points at which the straight lines Cn=constant touch the contour lines and therefore they determine the diameter and the efficiency for any assigned value for n; similarly the curves BB are the locus of points at which the straight lines C_D =constant touch the contour lines and they determine the revolutions and the efficiency for any given value of the diameter.

It is obvious in designing a propeller that it is desirable to determine diameter and revolutions so as to locate C_n and C_D near to the curves AA or BB as possible, if the efficiency of propeller only is to be taken into accounts. But in actual case where a propeller works in ship's wake, the problem is not so simple. A propeller which is less efficient when the propeller alone is considered, may give better performance when combined with ship, than more efficient one. It is out of the scope of the present paper to investigate the interaction of propeller and hull. It must, however, be noted that though the propeller efficiency is quite different from the propulsive efficiency, yet it is by no

means a useless attempt to study the nature of the propeller action in open water. It will be of great value to calculate C_n and C_D for ships which have shown successful performances and to plot them on the charts. It will serve as competent guide for a designer. I have analysed the trial result of several ships and found that the majority of C_n and C_D thus found lie between AA and BB.

A few conclusions which are brought out from these charts may be mentioned.

- The efficiency is high at small number of revolutions, associated with large diameter, pitch ratio, and area ratio, and falls off gradually as revolutions increases, diameter, pitch ratio, and area ratio also becoming smaller. It will be inferred from the form of the curves that we can attain greater efficiency than those shown in the charts by adopting small value for C_n and large one for C_D . It might be possible to get such a high efficiency, but it requires heavy, slow running engine and large propeller which will be prohibitive in practical case. On the contrary, as there is general tendency in recent days to adopt high revolutions for propeller in virtue of the extended use of turbine engine, it will often be found that C_n is so great that it lies outside of the field which is covered by the contour lines and in these cases the difficult problem of cavitation usually takes place. It is well known fact that model screw does not cavitate in tank experiment while full sized one does in similar condition. If we can construct an efficiency chart with respect to full sized propellers, there may exist considerable difference between this and the charts shown in the paper. Even in this extreme case it is practicable, by carefull analysis of trial results, to calculate the corrections, and by its application, we can infer the most favourable number of revolutions for turbine and propeller and determine the corresponding diameter, pitch ratio, area ratio and efficiency. These charts suggest us that a screw propeller is an exceedingly successful apparatus for driving ship of moderate speed when coupled with engine of moderate number of revolutions, but that some other means of ship propulsion should be looked for to meet the ever growing tendency of higher speed for ship and engine in these days.
- 2. Any particular combination of pitch ratio and area ratio occurs only once in each chart and the efficiency shown in the charts corresponding to the combination is a little lower than the maximum efficiency of the propeller characterised by the combination and the slip is greater than that of the maximum efficiency.
- 3. Chart V is constructed by superposing chart III on chart I. It will be found that the contour lines intersect at the curve DD. Above this line three bladed propeller

gives better efficiency than four bladed one, while below it four bladed one is superior. It is frequently required to keep the diameter of propeller within certain limit, especially in merchant ship where the load is variable. In this case the four bladed propeller is distinctly preferable. The reason why two bladed propeller is not adopted except in small craft is quite evident. There are many opinions about the comparative merit of the three bladed and the four bladed propellers enunciated by several authorities. Summarizing their opinions, it may be said that the three bladed propeller has not only better efficiency than the four bladed one, but it should be lighter and cheaper, that four bladed propeller is recommended only in cases where a greater portion of each blade is above the surface of the water during the upper half of its revolution as in the case of cargo steamer without sufficient load, especially in rough water, and that in these conditions four bladed screws will run more smoothly. Captain Dyson has pointed out in his "Screw Propeller" that in the case where the diameter is to be reduced below certain limit, the four bladed screw will give better propulsive efficiency than three bladed screw. exactly the point which the chart V brings out. At a glance, we can determine which of them, the three bladed or the four bladed, is to be preferred, while it requires somewhat lengthy calculation if one follows Captain Dyson's method.

4. Charts VI, VII and VIII give us valuable information about the effect of the blade thickness on the action of propeller. It is generally accepted that the thinner the blade the more efficient a screw will be. This statement may be accurate in similar sense as three bladed screw is more efficient than four bladed screw. It appears that there exists some limiting value of thickness corresponding to given value of C_n and C_D which give maximum efficiency. To make the blade thinner beyond this limit seems quite useless. The thickness ratio in these charts are rather too large and I have tried to get a chart for screws of thickness ratio 0.02, but failed because there is no maximum in the efficiency curve shown in Fig. 1. within the range of area ratio covered by the model screws experimented with. Even in constructing these charts, it was often necessary to make use of the method of exterpolation and moreover since there have been considerable difficulties in fairing curves passing through the points which were calculated by experimental data, they can not, by no means, be accurate.

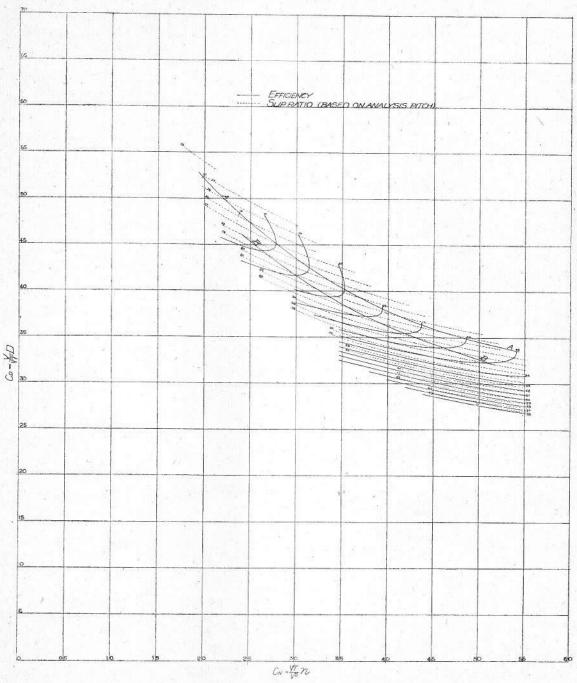
In preparing these charts it is intended to express the most complicated problem of screw propeller in the simplest form by keeping the number of variables as small as possible and assuming that our choices of the pitch ratio and the area ratio are quite free. Since all the omitted variables have little, if any, effect on the action of a screw propeller and furthermore the last assumption need not be strictly adhered to because it is apparent from Fig. 1. that any slight deviation of the pitch ratio and the area ratio from those corresponding to the maximum efficiency does not produce any material difference from the maximum efficiency, these charts can practically be applied for wider range of conditions than what is specified in the course of constructing the charts.

festelaries who dried along all descript gations are an established a little is an

to melitar historikanas kom alle seegge at februik si di stady shall solution de

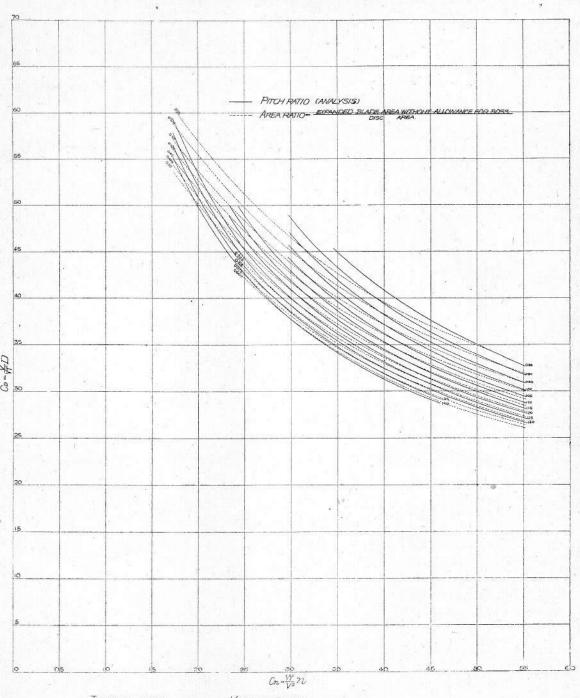
he superior that date, they says not by no ments, by according

CHART I EFFICIENCY & SLIP RATIO THREE BLADED ELLIPTICAL SCREWS (FROUDE)



T-THRUST IN TONS N-NUMBER OF REVS PER MIN V= SPEED IN KNOTS. D=DIAMETER IN FT

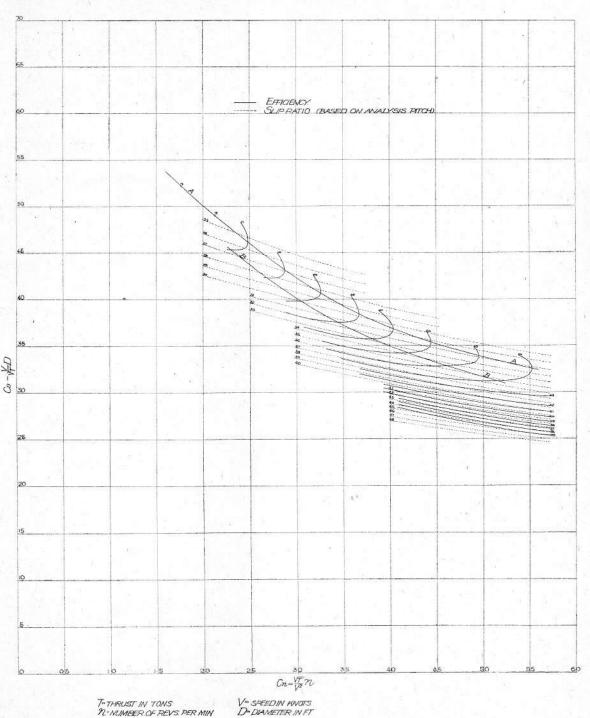
CHARTII PITCHRATIO & AREARATIO THREE BLADED ELLIPTICAL SCREWS(FROUDE)



T= THRUST IN TONS
NUMBER OF REVS PER MIN

V= SPSED IN KNOTS D=DAMETER IN FT.

CHART III EFFICIENCY & SLIP RATIO FOUR BLADED ELLIPTICAL SCREWS (FROUDE)



CHARTIN PITCHRATIO & AREARATIO FOUR BLADED ELLIPTICAL SCREWSGROUDE)

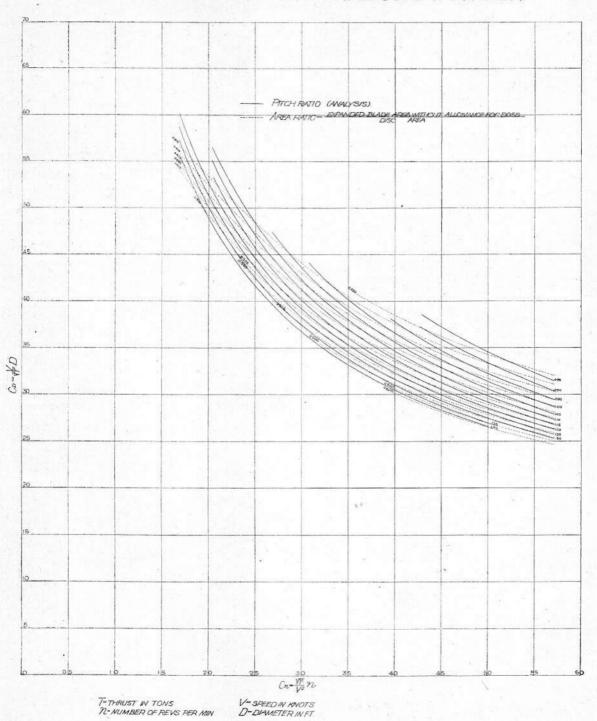


CHART V COMPARISON OF THREE BLADED SCREW& FOUR BLADED SCREW.

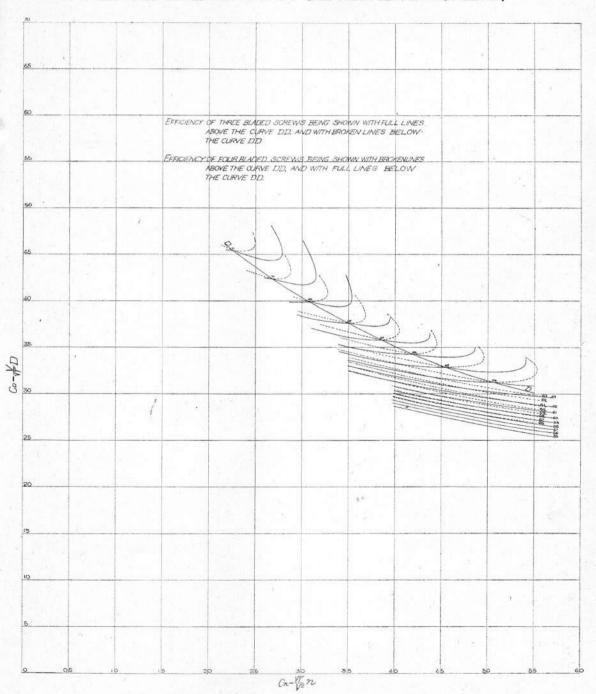


CHART VI EFFICIENCY OF THREE BLADED SCREWS (TAYLOR). THICKNESS RATIO = 004

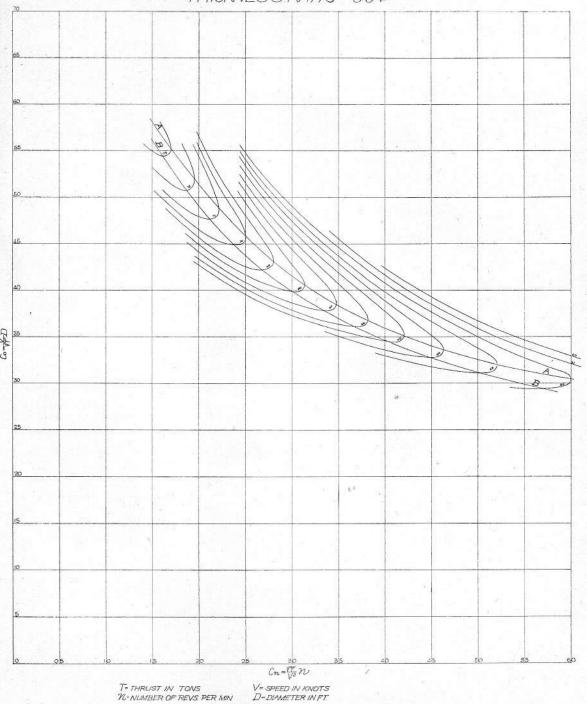
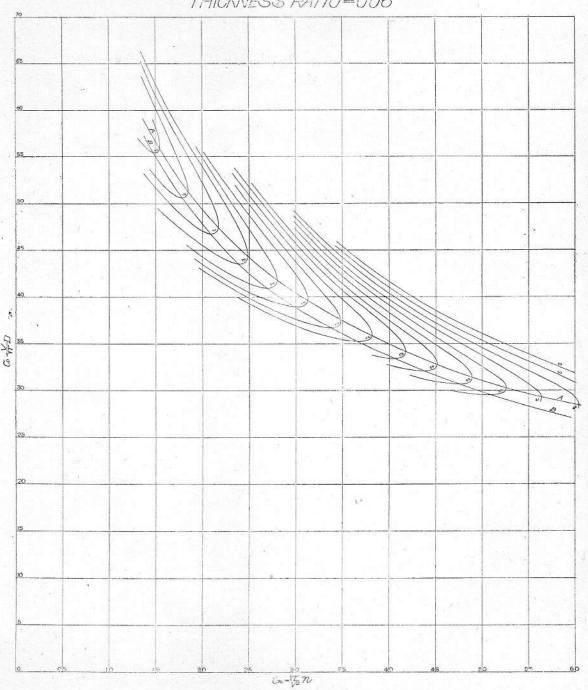
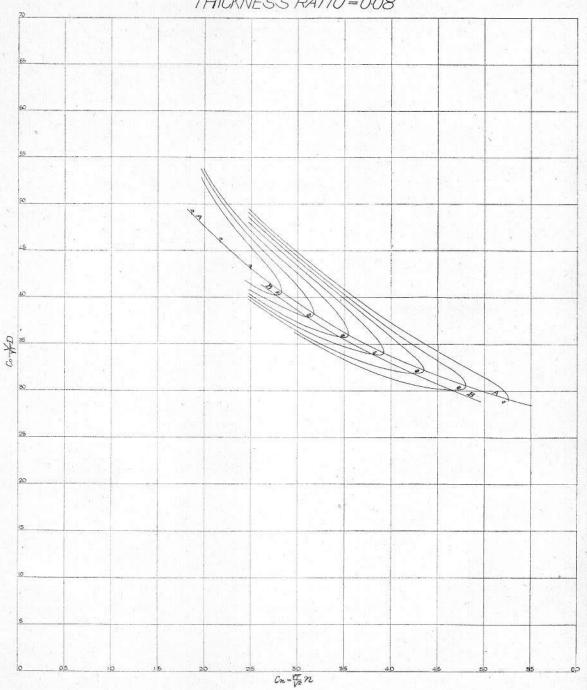


CHART VII EFFICIENCY OF THREE BLADED SCREWS (TAYLOR). THICKNESS RATIO=006







쬺

APPENDIX.

Fuller Explanations being demanded by one of the juries on the prize essay "An analysis of model screw propeller experiments":—

For chart. I.

Examples of how the resistance is obtained from Froude's figures. It will be sufficient if this is done for

.68 efficiency,

.33 slip ratio

only;

but all the items necessary to understand the process should be stated. For chart. II.

Similar examples, of how the results are obtained from Froude's figures. Say for 1.33 pitch ratio; also for .45 area ratio.

The following further communications were made by the author.

Communications.

S. Motora.

There will be several ways of obtaining the charts from the data given by Dr.

党

Froude in his 1908 paper. In fact, I have found that the method I have employed in preparing the charts I and II which refer to three-bladed screws was not convenient; so in the succeeding calculation for four-bladed screws some improvements have been made. By this reason, I will explain the process of obtaining the charts III and IV, though the required examples refer to the charts I and II. It will be observed that the only difference between the calculation of the three-bladed screws and the four-bladed screws exists in the values employed for the B (blade factor) and the efficiency correction which will appear in the tables Ia and Ib in the following explanations.

The process of obtaining the charts III and IV.

1. Draw the following two sets of curves on the base of $C_A = \frac{n'^2 H}{B V^5}$ (where $n' = \frac{rev \ o}{100}$, denoted by R in Froude's paper).

a.
$$x = \frac{n'pD}{V}$$
 for $p = 0.8$, 0.9, 1.0, 1.1, 1.2, 1.3, 1.4, 1.5,

b. e = efficiency for p = 0.8, 0.9, 1.0, 1.2, 1.3, 1.4, 1.5,

These curves, as indicated by Froude, are correct for the three-bladed elliptical screws of 0.45 disc area ratio (Fig. 1).

- 2. From these curves the following tables are computed.
- a. Seven tables of efficiency, corresponding seven area ratios 0.3, .35, .45, .55, .65, .75, .80, each table referring to the area ratio assigned in the head of the table. An example will be seen in the table Ia.

B is the blade factor given in the Froude's paper,

$$C_A = \frac{n'^2 H}{B V^5} = \frac{T V' \times 2240 \times 6080}{33000 \times 60} = \frac{6.8775}{B} \frac{T n'^2}{V^4}$$

By this relation the first, second, and third columns are written down. The efficiency values are taken from Fig. I and entered into the upper line of the space prepared for each value. Then, add the correction for e which are also obtained from Froude's paper, and the results are shown in the lower lines.

- b. Seven Tables for $\frac{n'D}{V}$; the values of x are taken from Fig. 1, divide them by p shown at the head of the respective column, the quotients $\left(=\frac{n'D}{V}\right)$ are written in the lower lines in the space corresponding to each C_A values. (Table Ib).
- 3. Combining these tables, eleven diagrams are constructed; an example is shown

- in 'Fig. 2. Each diagram refers to as pecified value of C_A or $\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ and consists of two sets of seven curves, corresponding to seven area ratios employed and showing e and $\frac{n'D}{V}$ on the base of pitch ratio.
- 4. In each of the above diagrams draw straight lines parallel to the base corresponding to $\frac{n'D}{V} = 0.9$, 1.0, 1.05, &c.; take the *e* and *p* corresponding to the points of the intersections of these straight lines and $\frac{n'D}{V}$ curves. These values are entered in a table, one for each of the diagrams. (Table II.)
 - 5. The tables are now plotted in curves. (Fig. 3.)
- 6. Then find the maximum points of each of e curves and read the corresponding values of e, p and a. These values are shown in the Table III which represents the full results and not an example as in the case of preceding tables.
- 7. From this table a diagram (Fig. 4) is constructed. The *e* curves for each $\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ value are shown on the base of $\frac{n'D}{V}$.

The curves corresponding to the intermediate values of $\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ which were employed in the calculation are obtained by constructing the cross curves of this diagram.

Similar curves p and a are obtained in quite aimilar ways.

8. Now, draw a set of straight lines e = constant and take the values of e, and $\frac{n'D}{V}$ and $\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ corresponding to the points of the intersections of the straight lines and the curves. The Table IV shows these values. The second lines in each space corresponding to $\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ are simply the quotients of $\frac{n'D}{V} / \frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ which are to be substuted for $\frac{n'D}{V}$ for the sake of convenience of practical application.

Similar tables for p and a are computed. (Tables V, VI.)

- 9. The contour curves for e, p and a are obtained by simply plotting the values given in these tables.
- 10. A table is computed by the Fig. 5, showing the values of p corresponding to $\frac{n'D}{V}$ and $\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ given in the first line and in the first column. The slip ratio (=s) is calculated by the formula,

$$s = 1 - \frac{1}{p} \frac{V}{n'D} \times \frac{60.80}{60}$$

The results are written below the corresponding p value. (Table VII.)

- 11. Plot these s values on the base of $\frac{n'D}{V}$. (Fig. 7.)
- 12. Take the $\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ and $\frac{n'D}{V}$ corresponding to the points of the intersections of the straight lines s=constant and the curves. (Table VIII.)
 - 13. Contour curves will easily be obtained by this table.

TABLE Ia.

EFFICIENCY. (4 Blades.)

a = .35

B = .1106

$$C_{A} = \frac{6.8775}{.1106} T \frac{n'^{2}}{V^{4}} = 62.185 \left(\frac{Tn'^{2}}{V^{4}}\right)$$

						Pitch	Ratio.			
\sqrt{T}	$n^{n/2}$.8	.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4 -	1.5
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$		C_A			Corr	ection f	or e in	%		
	8600.0 8600.0	90-11.2646 270.0121	45	70	95	-1.15	-1.25	-1.25	-1.25	-1.25
.016	.000256	.01592 {	48.00 47.55	57.15 56.45	63.70 62.75	68.35 67.20	71.42 70.17	73.10 71.85	74.00 72.75	74.00 72.75
-020	.00040	.024875{	55.45 55.00	62.85 62.15	67.70 66.75	70.94 69.79	72.60 71.35	73.00 71.75	72.72 71.47	71.97
.024	.000576	.03582 {	60.23 59.78	66.05 65.35	69.62 68.67	71.55 70.40	72.15 70.90	71.75 70.50	70.64 69.39	69.15 67.90
.028	.000784	.048755{	63.10 62.65	67.60 66.90	70.10 69.15	71.00 69.85	70.85 69.60	69.70 68.45	68.20 66.95	66.25 65.00
.032	.001024	-063675{	$64.77 \\ 64.32$	68.08 67.38	69.86 68.91	69.80 68.65	69.15 67.90	67.50 66.25	65.58 64.33	63.40 62.15
.036	.001296	.080590{	65.50 65.05	67.90 67.20	68.98 68.03	68.45 67.30	67.30 66.05	65.35 64.10	63.00 61.75	60.62 59.37
.040	.001600	.099495{	65.66 65.21	67.32 66.62	67.85 66.90	67.00 65.85	65.35 64.10	63.15 61.90	60.58 59.33	57.98 56.73
.044	.001936	.12040 {	65.50 65.05	66.66 65.96	66.65 65.70	65.50 64.35	63.60 62.35	61.00 59.75	58.35 57.10	55.60 54.35
.068	.002304	.14328 {	65.10 .64.65	65.98 65.28	65.46 64.51	63.98 62.83	61.76 60.51	59.10 57.85	56.35 55.10	53.70 52.45
.052	.002704	.16815 {	64.70 64.25	65.15 64.45	64.36 63.41	62.52 61.37	60.00 58.75	57.20 55.95	54.50 53.25	OSIG.
.056	.003136	.19501 {	64.30 63.85	64.30 63.60	$63.26 \\ 62.31$	61.05 59.90	58.38 57.13	55.60 54.35	52.75 51.50	

$$\frac{n'D}{V} \text{ (4 Blades.)}$$

$$a=.35$$

$$B=.1106$$

$$C_{A}=62.185\left(\frac{Tn'^{2}}{V^{4}}\right)$$

$rac{\sqrt{T}}{V^2}n'$	Tn'^2					Pitch	Ratio.			
V^2	$\frac{Tn'^2}{V^4}$	C_A	.8	.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5
.016	.000256	.01592 {	1.1020 1.3775	1.1310 1.2565	1.1620	1.1945 1.0860	1.2290 1.0242	1.2640 0.9722	1.3005 0.9288	1.3365 0.8910
.020	.00040	.024875	1.1400 1.4249	1.1780 1.3087	1.2170	1.2580 1.1436	1 3000 1.0834	$1.3425 \\ 1.0327$	1.3875 0.9910	1.4315 0.9542
.024	.000576	.03582 }	1.1785 1.4730	1.2240 1.3599	1.2710	1.3200 1.2000	1.3685 1.1405	1.4170 1.0900	1.4680 1.0485	1.5185 1.0125
.028	.000784	.048755	1.2180 1.5225	1.2700 1.4110	1.3240	1.3785 1.2532	1.4340 1.1950	1.4900 1.1462	1.5455 1.1040	1.6005 1.0670
.032	.001024	.063675	1.2575 1.5718	1.3155 1.4615	1.3755	1.4360 1.3055	1.4975 1.2480	1.5580 1.1985	1.6180 1.1557	1.6790 1.1194
.036	.001296	.080590	1.2970 1.6211	1.3610 1.5121	1.4260	1.4925 1.3568	1.5580 1.2985	1.6235 1.2490	1.6890 1.2065	1.7545 1.1697
.040	.001600	.099495	1.3350 1.6687	1.4050 1.5610	1.4760	1.5465 1.4060	1.6165 1.3472	1.6870 1.2977	1.7570 1.2550	1.8270 1.2180
.044	.001936	.12040 {	1.3715 1.7142	1.4470 1.6076	1.5235	1.5990 1.4536	1.6735 1.3947	1.7480 1.3445	1.8220 1.3014	1.8950 1.2634
.048	.002304	,14328 {	1.4080 1.7600	1.4885 1.6536	1.5685	1.6485 1.4985	1.7280 1.4402	1.8070 1.3900	1.8850 1.3465	1.9605 1.3070
.052	.002704	.16815 {	1.4440 1.8049	1.5275 1.6970	1.6120	1.8965 1.5423	1.7800 1.4835	1.8635 1.4335	1.9440 1.3885	2,0250 1,3800
.056	.003136	.19501 {	1.4800 1.8500	1.5680 1.7420	1.6565	1.7445 1.5860	1.8320 1.5267	1.9190 1.4762	2.0030 1.4308	540

Upper figures in every rectangular space are x.

Lower ", ", " ", " ", x/p.

Lower

TABLE II.

$\frac{n'D}{V}$	p & e	.30	.35	.45	.55	.65	.75	.80
1.20 {	$\begin{bmatrix} p \\ e \end{bmatrix}$			1.498 57.75	1.470 58.95	1.452 59.25	1.443 59.15	1.430 58.95
1.25	p	1.450 57.28	1.412 59.05	1.364 61.20	1.342 61.85	1.328 61.95	1.320 61.45	1.313 61.00
1.30 {	p e	1.327 60.55	1.294 61.95	1.254 63.70	1.234 64.00	1.222 63.75	1.214 62.95	1.210 62.27
1.35 {	$\begin{array}{ c c c c c c c c c c c c c c c c c c c$	1.222 63.05	1.194 64.15	1.160 65.45	1.144 65.35	1.134 64.65	1.126 63.58	1.125 62.60
1.40 {	$p \\ e$	64.92	1.110 65.70	MAGE: 100 MAGE:	1.066	1.056 64.92	1.050 63.40	1.046 62.20
1.45 {	$egin{array}{c c} p & & \\ & e & \\ & & \end{array}$	6. F.	1.034 66.68	1.008 67.05	.9. 6 66.12	.988 64.70	.982 62.50	.978 61.15
1.50 {	p e	.9880 66.66	.970 66.95	.946 66.82 ^f	.936 65.60	.928 63.85	.923 61.20	.920 59.55
03, 00, 500, 000,	78. 7.6.78 510.1	68,501	00 662.60 11.1 082	. 1 20.1 . 1 20.1 . 1 1000.			010 =	- 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1

- A FAR SHOWN SHARE SHEET AND SHEET	en 200 ram weeks and a		***************************************		Part of the last o	STATISTICS		No. of Concession, Name of Street, or other Designation, Name of Street, Name	
($\frac{n'D}{V}$.9	.95						L.T.
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n' = .016$	e	72.85	72.50						
$\overline{V^2}^n = .010$	p	1.450	1.360						
A Trans I are 1	a	.430	.313				1	1	
	$\frac{n'D}{V}$	1.00	1.05					4	
$\sqrt{\frac{VT}{V^2}}n' = .020$	e	71.95	71.75					41	
$-\frac{1}{V^2}n = .020$	p	1.342	1.252					1 44 01	
	a	.467	.390						
E183 OSE1	$\frac{n'D}{V}$	1.05	1.10	1.15		- David		- 175	
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'=.024$	e	70.45	71.05	71.00	-144	26.75			
	p	1.347	1.248	1.168					
	a	.5195	.440	.400		RE'E	100	. 7 %	
	$\frac{n'D}{V}$	1.10	1.15	1.20	1.25	Te mi			
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'=.028$	$egin{array}{c} e \ p \end{array}$	68.45	69.60	70.05	70.00				
1 49 80 4 81 80		1.351	1.250	1.164	1.092	Zavi			
\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	a	.5680	.4935	.4465	.420			udi .	
* U 1 - 1050 1 ($\frac{n'D}{V}$	1.15	1.20	1.25	1.30	1.35	100 To		
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'=.032$	e	66.12	67.80	68.68	68.98	69.05			
1 Vince of	p	1.350	1.246	1.165	1.090	1.026	1		
	a	.579	.516	.470	.436	.385			
	$\frac{n'D}{V}$	1.20	1.25	1.30	1.35	1.40	1.45	1 10	
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n' = .036$	e	64.00	65.90	67.15	67.95	68.20	68.00		
$\overline{V^2}^{n} = 0.000$	p	1.345	1.246	1.158	1.086	1.020	.966		
	a	.586	.520	.484	.437	.418	.373		
	$\frac{n'D}{V}$	1.20	1.25	1.30	1.35	1.40	1.45	1.50	
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n' = .040$	e	59.25	62.00	64.00	65.50	66.50	67.05	67.00	
. V ²	p	1.451	1 334	1.236	1.154	1.080	1.014	.962	
La constant de la con	a	7.66	.006	.550	.497	.450	.424	.390	

Table III.—Continued.

. ($\frac{n'D}{V}$	1.25	1.30	1.35	1.40	1.50	1,55	1.60	
\sqrt{T}	e	57.30	60.15	62.30	64.15	65.80	66.05	66.00	
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n' = .044$	p	1.434	1.322	1.226	1.143	1.012	-954	.906	
	a	.650	.595	.540	.488	.434	.405	-357	4.
($\frac{n'D}{V}$	1.30	1.35	1.40	1.45	1.50	1.60	1.65	1.70
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'=.048$	e	55.60	58.42	60.83	62.67	63.94	65.10	65.25	65.23
$V^2 = .048$	p	1.413	1.310	1.214	1.132	1.062	.945	.896	.854
	a	.679	.590	.540	.500	-465	.415	.370	.333
	$\frac{n'D}{V}$	1.40	1.45	1.50	1.60	1.65	1.70	1.75	
$\frac{\sqrt{T}}{V}n' = .052$	e	57.15	59.55	61.35	63.82	64.35	64.45	64.50	
$\overline{V}^n = .052$	p	1.292	1.200	1.120	-990	.934	.886	.847	
	a	.583	.549	.495	.440	.420	.390	.350	
	$\frac{n'D}{V}$	1.40	1.45	1.50	1.55	1.60	1.70	1.75	1.80
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n' = .056$	e	53.30	55.90	58.26	60.25	61.85	63.45	63.72	63.90
$V^2 = 1000$	p	1.372	1.274	1.184	1.107	1.038	.926	.881	.840
	a	.645	.586	.547	.510	.471	.423	.384	.360

EFFICIENCY.

Upper figures in every welsingular space are $\frac{a^*B}{V}$ Lower $\frac{P}{\sqrt{T}}D\left(=\frac{\frac{a^*D}{V}}{\frac{V^*T}{V^*}}\right)$

Pra Pra			57	58	50	.60	61	62	63	64	65	OS	67	68	69	70	71	72	78
.016	1																		.802 51.25
.020																			
.024																	1.153		
.028												100		1.097	1.119				
.029	1													1.119	1,153				1 3
.030	1													1.145	1.191		-		
.031	1												1.144	RIRES	1.238				
032													1.171	1.209	1.290				
,033	-										1.146	1 171	1.203	1.347					
.034	1											1.197		1.381					
.035	-											1.926	200000	1.322					1-19
.036										1.192	1.224	1.253	1.203	1.359					
.037	1								1.201	1.224	1.250	1.280	35.91	52,10					
.038	1							1.205	1.225	1.248	1.273	1.307	1.367						
.000	1						1.209		1.249	1.273	1.301	1.339	1.400						
.040	1						1.229		1.270	1.297	1.329	1,360	1.446						
.041	1			1.903	1.218	1.285	1.253		1.295	1 323	1.300	1,403	30.10						
.042	1 1.183	1.195	1.209	29 34 1 993	1.239	1.256	1:274	1.295	1.820	1.349	1.385	1.440				1			
.043	1 901	28.45 1.914	1.927	1.242	1.259	1.275	1.295	1.319	1 345	1,875	1.415	1.476							
	1 1,218	28.23 1.232	1.245	1.262	1.278	1.297	1.317	1.241	1.369	1.403	1.442	1.594						30	
.044	1 995	1,550	1.965	1.281	1.299	1.318	1.339	30.47 1.863	1.391	1.425	1.475							1	
.045	27.44	\$7.78	28 11	1.501	1.319	1,339	1,360	1.385	1.413	1.450	1.506								
.046	27.23	17.58	27.91	1.399	1,341	1.361	1 383	1.404	1.439	1.479	23.74						1		
.047	37,07	1.30%	1 202	28.13	1.360	1.381	1.404	1.430	1.461	1.503	1 890								
.048	26.89	37.20 1.325	37.56	27.93	28.33	28.77	29.25	29.79	30 48	31.31	53,04								1/16
.049	26.70	27.04 1.343	27.37	27.25	25.14	28.07	29.08	29.05	30.34	31.34	55.18					100			
.050	26.54	26.86	27.20	27.08	27.309	28.42	28,94	23,00	30.24	31.20									
.051	26,35	1,361 26.68	27.02	27.41	21.53	25.21	28.16	218.33	30.14	51.16								18	
.052	26.21	1.379 26.52	26.86	81.33	61/00	23.0%	MO'GT	19.21	20.04	21/4/2					13			H.	
.053	26.02	1.397 26,36	26.72	21.00	21.00	21,20	20.43	STATE OF	239,014	51.30									
.054	95.85	1,415 26.20	6.55	26.94	41.40	06.200	29.01	20.195	SEEF, K.W.	52.42									
.055	95.69	1.433	26.42	26.52	21.20	21,02	20.24	50700	20.12	52.25									
	1.432		1 470	1.495	1.517	1.548	1.579	1.600	1.662				K	1				3 84 -	

PITCH RATIO.

Upper figures in every rectangular space are $\frac{n'D}{V}$

Lower ", " " " " " $\frac{V}{\sqrt{T}}D\left(=\frac{n'D}{\frac{V}{V^T}n'}\right)$

	TOP SHADOW COUNTY			The second second second			CONTRACTOR OF THE PARTY OF THE	THE RESERVE AND ADDRESS OF THE PARTY OF THE		Description of the last of the	
p $\sqrt{T}_{n'}$ V^2	.9	.95	1.0	1.05	1.10	1.15	1.20	1.25	1.30	1.35	1.40
.016 {								1.007 62.93	.981 61.30		.931 58.18
.020 {					1.149 57.45	1.115 55.75	1.089 54.45	$1.052 \\ 52.60$	1.026 51.30	1.000 50.00	.97 7 48.85
.024 {	110			FULL			1.129 47.04	$1.102 \\ 45.92$	1.076 44.83	1.049 43.71	1.027 42.79
.028 {		1416.2 186.5	5501 4 .00.1	1.281 45.75	1.245 44.46		1.178 42.07		1.125 40.18		1.076 38.43
.032 {	1400.1	kit t UV.D	1.373 42.91	1.330 41.56	1.293 40.41		1.227 38.35	1.200 37.50	$1.172 \\ 36.63$	1.147 35.85	1.126 35.19
.036 {	801.1 6. n(s)	271.1 1538	1.418 39.38	1.3 7 7 38.25	$1.340 \\ 37.22$	1.306 36.27	1.275 85.42	$1.246 \\ 34.61$	1.219 33.86	1.195 33.19	$\frac{1.174}{32.61}$
.040 {	1.308.1 1.55.1			1.423 35.58	1.386 34.65	1.352 33.80	1.320 33.00	$1.292 \\ 32.30$	1.266 31.65	1.242 31.05	1.220 30.50
.044 {	1.606 36.50	1.553 35.30	1.507 34.25	1.467 33.34	1.429 32.48	1.396 31.73	1.365 31.02	1.337 30.39	1.310 29.77	1.286 29.23	1.265 28.75
.048 {	1.647 34.31	1.594 33.21	1.549 32.27	1.510 31.46	1.472 30.67	1.439 29.98	1.409 29.35	1.380 28.75	1.354 28.20	1.329 27.69	1.307 27.23
.052 {	1.687 32.44	1.634 31.42	1.590 30.58	1.550 29.80	1.514 29.11	1.481 28.48	1.450 27.88	1.422 27.34	1.396 26.84	96 M	1 2
.056	1.728 30.86	1.675 29.91	1.630 29.11	1.591 28.41	1.554 27.75	1.521 27.16	1.491 26.62	1.463 26.13	1.437 25.66	1417.1 20.5	

AREA RATIO.

Upper figures in every rectangular space are $\frac{n'D}{V}$

$\frac{\overline{T}_n}{\overline{T}_2}$	1	35	.375	.40	.425	.45	.475	.500	.525	.550	.575	.600	.625	.6
.061	{	3870. 3870.	.920 57.50	.910 56.87	.901 56.31	.893 55.81	.886 55.37					12.09		
.020	{	· /R40.	$1.059 \\ 52.95$	$1.043 \\ 52.15$	$1.026 \\ 51.30$	1.010 50.50	.995 49.75	4.982 9.10				100		
.024	{	iogl.	1.187 49.46	1.160 48.33	1.137 47.37	$1.114 \\ 46.42$	1.093 45.54	1.073 44.71	1.056 44.00	1.040 43.33		Fast		
.028	1	TELL	$1.282 \\ 45.79$	$1.250 \\ 44.64$	1.223 4.368	1.197 42.75	$1.174 \\ 41.93$	1.150 41.07	1.130 40.36	$\frac{1.112}{39.72}$	1.094 39.07	125		
.032	{) soul	$1.359 \\ 42.47$	$1.329 \\ 41.53$	$\frac{1.300}{40.63}$	$\frac{1.271}{39.72}$	1.245 38.91	1.219 38.10	1.195 37.35	1.173 36.66	1.153 36.03	1.136 35.47		
.036	. (40.72	39.75	38.83	37.97	37.13	36.33	35.55		34.16	33.55	33.00		
			51.00	30.00	00.00	00.00	04.20	33.00	04.00	02.20	01.00	01.00	00.00	00.
.044	{	1.613 36.66	1.572 35.73	1.533 34.84	1.497 34.02	1.461 33.20	$\frac{1.427}{32.43}$	1.396 31.73	1.368 31.09	1.343 30.52	1.318 29.90	1.295 29.43	1.274 28.96	1. 28.
.048	{	1.682 35.04	$\frac{1.637}{34.10}$	1.596 33.25	$1.557 \\ 32.44$	1.518 31.62	1.483 30.90	1.450 30.21	1.421 29.60	1.395 29.06	1.369 28.52	1.345 28.02	1.324 27.58	1. 27.
.052	{	1.749 33.63	$\frac{1.700}{32.69}$	$\frac{1.656}{31.84}$	1.614 31.04	$\frac{1.577}{30.32}$	1.539 29.59	$\frac{1.505}{28.94}$	1.473 28.33	1.446 27.81	$\frac{1.419}{27.29}$	1.395 26.83	$1.371 \\ 26.36$	1. 25.
.056	1	1.815	1.765 31.52	1.717 30.66	1.673 29.87	1.631 29.13	1.594 28.46	1.559 27.84	1.527 27.27	1.496 26.71	1.469 26.23	1.443 25.77	1.418 25.32	1. 24

SLIP RATIO.

Upper figures in every rectangular space are p Lower ,, ,, ,, ,, ,, $s \left(= 1 - \frac{1}{p} \frac{V}{n'D} \times \frac{60.80}{60} \right)$

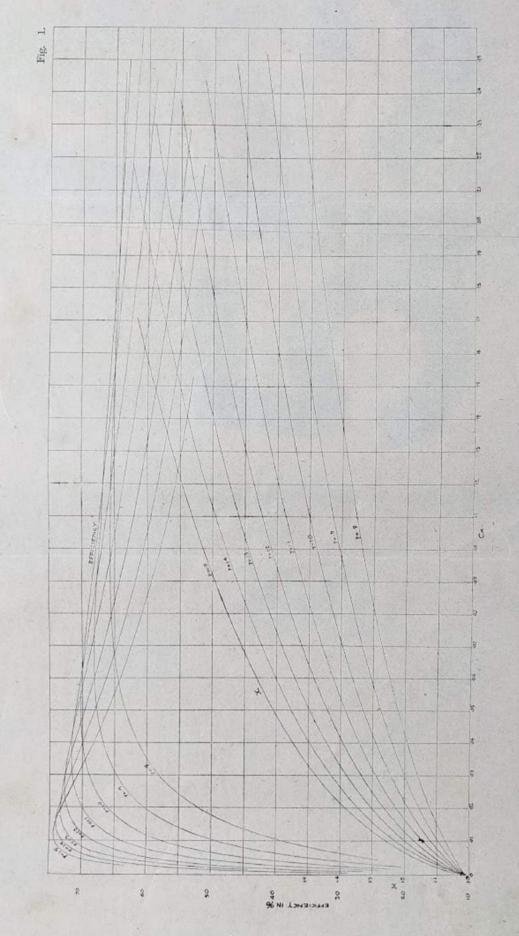
$\frac{\sqrt{T}}{V^2}n'$ $\frac{n'D}{V}$.016	.020	.024	.028	.032	.036	.040	.044	.048	.052	.056
.9 {	1.449 0.223										
1.0 {	1.274 .2046	1.342 .2449	1.453 .3026								
1.1 {	1.130 -1848	1,174 .2155	1.249 .2624	1.350 .3176	1.469 .3729						
1.2 {		1.050 .1958	1.098 .2309	1.165 .2752	1.249 .3239	1.345 .3721	1.452 .4184	3			
1.3				1.028 .2417	1.091 .2856	1.159 .3274	1.236 .3693	1.322 .4104	1.415 .4491		
1.4 {					.969 .2531	1.021	1.080 .3298	1.143 .3667	1.213 .4032	1.292 .4398	1.372 .4724
1.5 {						.916 .2626	.962 .2978	1.010	1.062 .3639	1.120 .3968	1.184 .4294
1.6 {								.906 .3010	.945 .3299	.987 .3584	1.038
1.7 {								.821 .2740	.854 .3021	.887 3280	.927 .3570
1.8 {											.3298

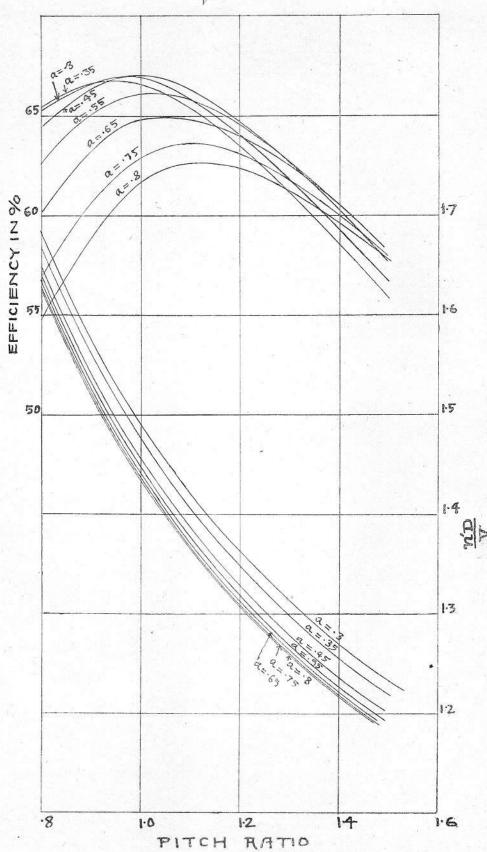
SLIP RATIO.

Upper figures in every rectangular space are $\frac{\pi'D}{V}$

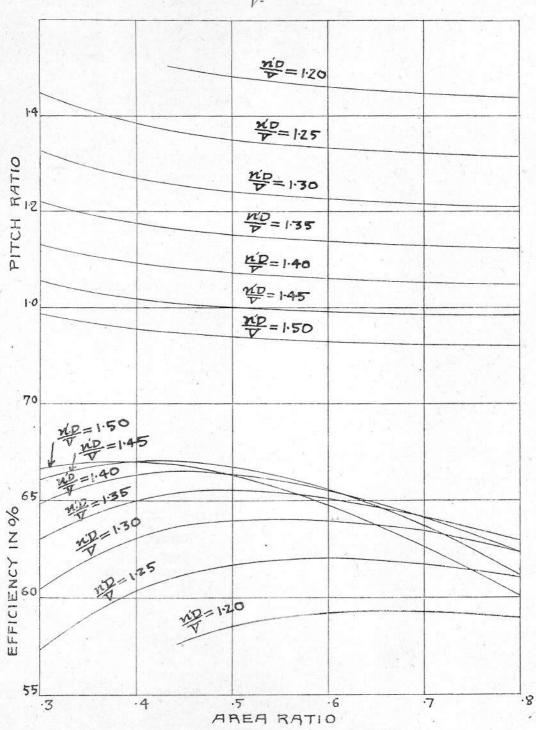
Lower , , , , , , , , , , , , $\frac{\mathcal{V}}{\sqrt{T}}D$

VT.	1										
s VTn	.016	.020	.024	.028	.032	.036	.040	.044	.048	.052	.056
.20 {	1.019 63.66	1.176 58.795	1,3295 55,39								
.21	0.971 0.69	$\frac{1.126}{56.295}$	1.277 53.20					11			
.22	.926 .57.875	$\frac{1.081}{54.045}$	1.233 51.37								
.23	.885 55.31	$\frac{1.012}{52.10}$	1.194 49.745	1.338 47.78							
.24		1.007 50.35	1.160 48.33	1.305 46.60	1.447 45.215						
.25		.976 48.80	1.127 46.95	$\frac{1.272}{45.425}$	1.410 44.00	1.549 43.025	1.686				
.26		.946 47,30	1,097 45.70	$\frac{1.240}{44.28}$	1.377 43.03	1.512 42.00	1.640 40,995				
.27		.918 45.90	1.069 44.54	1.210 43.21	1.345 42.03	1,475 40.97	1.598 39.95				
.28		.894 44.70	1.044 43.495	1.183 43.25	$\frac{1.316}{41.12}$	$\frac{1,440}{39,995}$	1.561 39.02	1.680 38.18			
.29		.872 43.60	1.019 42.45	$\frac{1.156}{41.28}$	1.288 40.248	1.408 39.11	1.526 38.15	1.639 37.25			
.30 {		,850 42.50	.996 41.50	1.133 40.46	$\frac{1.262}{39.435}$	$\frac{1.379}{38.3}$	1.492 37.3	1.602 36.41	1.708 35,58	1.808 34.77	34.13
.31 -{			.973 40.54	1.109 39.605	1,236 38 622	$\frac{1.350}{37.5}$	1.461 36.525	1.567 35.61	1.669 34.77	1.767 33.98	1.865 33,30
.32			.952 39.665	1,087 38.816	1.213 37.905	1.325 36.30	1.432 35.8	1.535 34.885	1.633 34,02	1.729 33.25	1.824 32.57
.33 {			.932 38.83	1.066 38.07	$\frac{1.189}{37.165}$	1.299 36.08	1.404 35.10	1.504 34.18	1.60 33.33	$\frac{1.694}{32.58}$	1.785 31.88
.34 {			.912 38.00	1.055 37.32	1.167 36,372	1.275 35.415	1.377 34.42	1.475 33.52	1.569 32.69	1.658 31.89	$\frac{1.748}{31.21}$
.35			.892 37.165	1.025 36.605	1.144 35.75	1.252 34.775	1,351 33,77	1.447 32.89	1.539 32.06	$\frac{1.626}{31.27}$	1.713 30.59
.86				1.007 35.96	$\frac{1.124}{35.125}$	1.23 34.165	1.326 33.15	1.420 32.27	1.510 31.46	1.596 30.69	$\frac{1.682}{30.03}$
.37				.990 35.355	1.104 34.50	1.208 33.55	1.303 32.57	1.395 31.70	1.484 30.92	$\frac{1.568}{34.15}$	1.651 29.48
38.				.971 34.68	1.084 33.875	1.187 32.97	1.28 32.00	1.339 31.11	1.458 -30.37	1.542 29.65	1.624 29.00
.39				.953 34.035	1.065 33.28	1.166 32.385	1.258 31.45	1.346 30.59	1.433 29.85	1.516 29.15	1.597 28,52
.40				.935 33.39	1.046 32.685	1.145 31.80	1.236 30.895	1.323 30.07	1.408 29.33	1,490 28.65	1.571 28.05
41							1.216 30.40	1.301 29.57	1.385 28.85	1.466 28.19	1.546 27.61
.42							1.195 29.87	1.279 29.07	1.362 28.37	1.442 27.73	1.521 27.16
.43						1	1.174 29.35	1.258 28.59	1.34 27.92	1.421 27.33	1.497 26.73
.44							1.154 28.845	1.238 28.14	1.318 27.46	1.398 26.88	1.474 26.32
.45							1.134 28.345	1,217	1.297 27.02	1.376 26.46	1.451 25.91
.46							1.116 27.90		1.276 26.58	1.354 26,04	1.428 25.50
							1.097	1.178 26.77	1.256 26.13		
.47					1		1.078	1.159	1.236	1.313 25.23	
.48	140	- 4				1	26.95	26.34	25.75	20.23	24.13





元良氏論文附圖

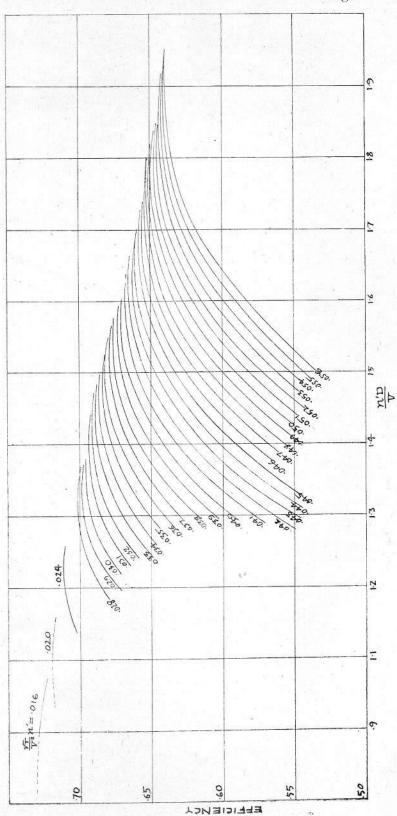


元良氏論

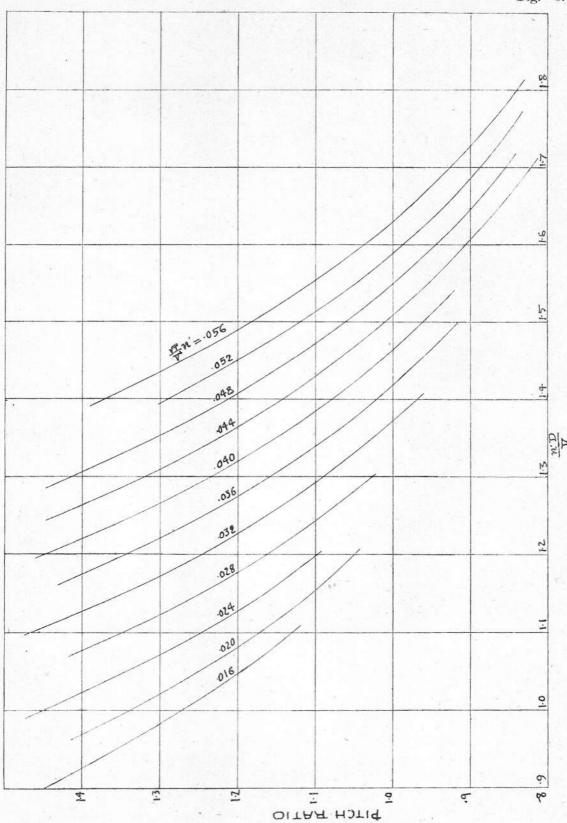
文

附圖



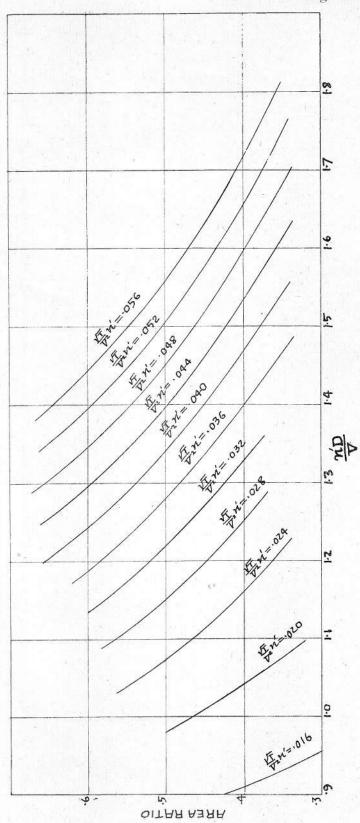


元良氏論文附圖



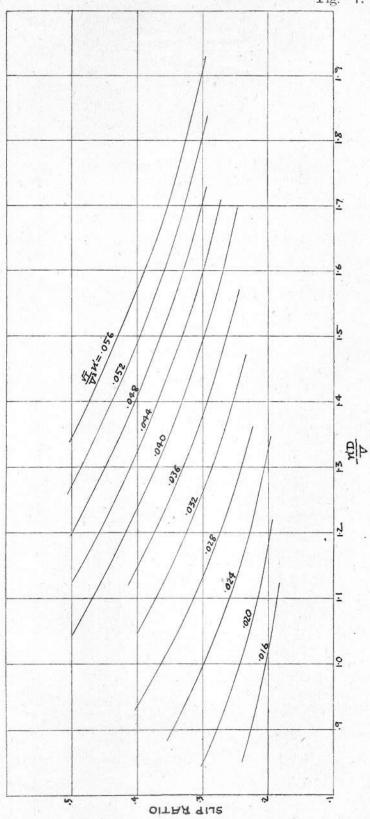
元良氏論文附

圖



元良氏論文附圖





元良氏論文附

圖

大 大 JE. īE. 五. Ħ. 年 年. 九 九 月 月 + + 四 Ŧî. \Box H 印 验 行 刷

城 町十 Ħ. 番地

工 學 會 內東京市京橋區山城 内

協

行

所

編輯兼發行者

神

下澁谷三百八十六番地東京府豐多縣郡澁谷町大字 定

印

刷

渚

島

即

刷

所

Ξ

二丁 目 一 雷 地東京市神田區美土代町

二 丁 目 一 番 地東京市神田區美土代町